

靈、たましい、からだ

マンミン国際神学校

〈第一テサロニケ 5：23〉

「平和の神ご自身が、あなたがたを
全く聖なるものとしてくださいますように。
主イエス・キリストの来臨のとき、
責められるところのないように、あなたがたの
靈、たましい、からだが完全に守られますように。」

目次

はじめに

第1部 からだ

第1章 人はどのように造られたか

1. 「肉」の靈的な意味
2. 人が創造された過程といのちの種
3. 結婚
4. 生命体が宿って成長する過程
5. 「選び」と「召し」
6. 種を下さった摂理
7. 心の地
8. 器の出来
 - 1) 四つの心の地
 - 2) 器の出来の重要性
9. 心の出来—四つのタイプ
 - 1) すべきこと以上をするタイプ
 - 2) すべきことだけをするタイプ
 - 3) すべきことをいやいやするタイプ
 - 4) すべきことはしなくて悪を行うタイプ

第2章 からだを形成しているもの

1. 肉の性質
2. 肉の気質
3. 神はなぜ土で人を造られたのか
4. 良心の違いはどこから来るのか
 - 1) 親から
 - 2) 環境から
 - 3) 自分の努力
5. からだの発達段階：見て、感じて、行う
6. 肉の欠如

第3章 肉に関する用語

1. からだ / からだの行い
2. 肉 / 肉的なこと
3. 肉の行い
 - 1) 不品行
 - 2) 汚れ
 - 3) 好色
 - 4) 偶像礼拝
 - 5) 魔術
 - 6) 敵意
 - 7) 爭い
 - 8) そねみ
 - 9) 憤り
 - 10) 党派心と分裂
 - 11) 分派
 - 12) ねたみ
 - 13) 酗釈
 - 14) 遊興
4. 肉を体験しなかった人の靈は完全でない
5. 肉の欲
6. 目の欲
7. 暮らし向きの自慢

第4章 肉を脱ぎ捨てる方法

1. 目の欲を遮り、肉の行いを断ち切り、心にある罪の性質まで捨てる方法
2. 最も大きい罪の性質を集中的に捨てる方法

第2部 たましい

第1章 たましいとたましいの働き

1. たましいの定義
2. たましいの働き
3. たましいの人
4. 記憶の方法
 - 1) 流してしまう
 - 2) 見て聞いておく
 - 3) 記憶に留めておく
 - 4) 刻んでおく

第2章 たましいの働き

1. 真理に逆らうたましいの働き
 - 1) 理解できなくて心にいだけない
 - 2) さばく
 - 3) 罪に定める
 - 4) 間違って伝える
 - 5) 悪い感情をいだく
2. 真理に属するたましいの働き
 - 1) すべてを真理の基準でわきまえる
 - 2) 真理にふさわしく感じる
 - 3) 相手の立場から受け入れる

第3章 御霊による思いと聖霊の声

1. 肉の思いと御霊による思い
 - 1) 神のみことばを信じることにおいての違い
 - 2) 結ぶ実の違い
2. 聖霊の声を聞くには
 3. 人と動物との違い

第3部 霊

第1章 霊と靈の知識

1. 霊の定義
2. 霊と靈の姿
3. 霊の知識

第2章 霊の死と回復

1. 霊の死
2. 死んだ靈が生き返って救われるには
3. 霊の回復過程

第3章 人の心

1. ことばと神
2. 人と心
3. 心の大きさ
 - 1) 肉の人は、御靈の人が理解できなくてさばく
 - 2) 御靈の人は、肉の人でもさばいて罪に定めない
4. 心の要素
 - 1) 真理の心 / 真理に逆らう心 / 本性
 - 2) 良心
 - 3) 本性の中の真理に逆らうものまで捨てるべき
5. 御靈に属する靈・たましい・からだ
 - 1) 守りなさい / してはならない / 捨てなさい / しなさい
 - 2) 御靈の人が受ける祝福
6. 御靈に導かれるために
 - 1) たとえを使われたイエス様
 - 2) 伝道する時
 - 3) 信仰が成長するために

終わりに

はじめに

『靈・たましい・からだ』の学びは、私たち人を創造された父なる神が、私たち自身は誰であり、また、どのように造られたのかについて、一つ一つ教えてくださる靈の知識である。このような知識は、人の知恵と力で得るのではない。ただ創造主の神だけが、人間の本質を見抜くことができるので、神がそれに関して教えてくださる時でこそ、私たちは理解できて悟れるのである。

詩篇の記者は〈詩篇139:13-16〉で「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。」と記している。

それでは、「靈・たましい・からだ」を学ぶと、はたして私たちにとってどんな益になるだろうか？

第一は、私たち自身を一つ一つ分解して発見させることで、もっとすみやかに聖められるようになる。何も知らずに信仰生活をするのではなく、なぜ自分自身を徹底的に捨てなければならないのか、神のかたちを取り戻すためには、具体的に何を捨てるべきかを悟り、自分の心と思いが治められるようになる。

第二に、自分自身を正しく知ってこそ、敵である悪魔の策略に陥ることなく、一歩進んで闇を支配して従える力までも持てるようになる。自分を発見するこの学びは、信仰生活が成功することにおいて、まことに必要である。

使徒パウロも、主に出会う前は、自分の義でがっちり固まった人だった。律法による義についてならば、非難されるところのない者であり、その心には神に向けられた熱い心もあったが、真理を靈的に悟れなかつたので、かえって神に立ち向かつたのである。

しかし、主に出会った後、神の御前で自分の眞の姿を発見したとき、彼は「私はその罪人のかしらです。」と告白して、自分を「月足らずで生まれた者と同様な私」と言ったのである。このような自己発見があつたので、使徒パウロは自分を捨てて、毎日が死の連續になれたし、結局、異邦人の使徒として神の御前に尊く用いられる人になった。

『靈、たましい、からだ』を学んで、神のかたちを完全に取り戻し、まことに尊い器として用いられ、さらに誉れと栄えある座に至られるよう、主イエス・キリストの御名によつて祈る。

第1部

からだ

第1章

人はどのように造られたか

1. 「肉」の靈的な意味

聖書には「肉」という言葉がよく出てくる。はたして「肉」とは、何だろうか？　単語の靈的な意味がよくわからないなら、誤解したりする。たとえば、「肉は何の役にも立たないので、捨てますように。肉は死です」という説教を聞けば、「えっ、いったいどうやって私の肉が捨てられるんだろうか？」と思うかもしれない。

辞書で「肉」という単語を調べてみると、「動物の肉、または、人のからだの肉」と定義している。

それでは、靈的な意味の「肉」とは、はたして何だろうか？　靈的に「肉」とは「朽ちて変わるもの、なくなるものの総称」である。この「肉」と反対になる概念が、「靈」である。「靈」とは「永遠で変わらないもの、完全で美しいもの」を意味する。

この世にあるものは、朽ちて変わるのがほとんどである。永遠のいのちがないし、消えてなくなるものである。人のからだも、この「肉」である。老いて病気にかかって死ねば、朽ちて一握りの土になってしまないので、結局、肉である。この地上の花も、木も、動物も、太陽と月と星も、すべてのものが時間が流れるにつれて変わって、朽ちてなくなる。目に見えるものだけでなく、目に見えないものも肉である。

世の人々の感情と考え、追い求めている価値も、永遠なものでなく変わるものなので、これもすべて肉である。富も、名誉も、知識も、そのほかに世の人々が尊く思うほとんどが、結局は朽ちるもの、むなしいものなのである。

愛という感情をたとえてみよう。世の人は「愛しています」と言っても、靈的な愛はできない。永遠に変わらない愛、相手の利益だけを求める愛ではなく、情欲的で自分の利益を求める愛であり、時間と条件が変わるにつれて変わってしまう愛である。だから、これもやはり肉なのである。

そのほかにも、憎しみ、そねみ、ねたみ、高ぶり、自分の利益を求めるなど、人が心にいだいていることのうち、永遠不滅の真理である神のみことばと反対になるすべてが、みな肉である。

それで、〈第一ペテロ1:24〉に「人はみな草のようで、その榮えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。」とあり、〈ヤコブ4:14〉には「あなたがたには、あすのこととはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、

しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。」とあるのだ。

このように世の人々は、そのからだと思いと心にいだいたことが、結局は変わって朽ちる肉である。だから、この地上で肉の人が生きていくことそれ自体が結局、むなしいだけなのである。

2. 人が創造された過程といのちの種

これからこの「からだ」について、いくつかに分けて説明していく。第一は、「創造といのちの種」に関してである。

神は創造の第六日に、神のかたちに、土地のちりでからだを造って、鼻にいのちの息を吹き込んで、人を創造された。神が男と女を創造された後、彼らに祝福のことばを下さった。〈創世記1:28〉に「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」とある。すなわち、人に子孫を生む力を与えられたのだ。神はアダムとエバのふたりだけではなく、数えきれない子どもを得ることを願われたからである。

だから、神は男と女にいのちの種である精子と卵子を与えて子どもを生むように、摂理のうちに計画されたのである。まるで畑に種を蒔き、実を刈り取って、また種を蒔くという農作業をするように、アダムとエバにいのちの種を与えて、人間耕作が続けられるようになされたのである。

このように、いのちの種そのものが神から來たので、神は私たちの靈の父でもあるが、両親にいのちの種を下さって、実際私たちが生まれるように働かれた方でもある。

ところで、いのちが宿することにおいて、誤解してはならないことが一つある。「神が子どもを授けてくださる」と言うと、子どもの性別や体質、知能のような先天的な要素まで、神が決められると思う人もたまにいる。

しかし、神はいのちの種を下さるが、どんな精子と卵子が結びつくのかまで、いちいち関与されるのではない。すなわち、いのちが宿る時はいつも神が介入して、誰々は男に、誰々は女に、また、誰々は強い体質に、誰々は弱い体質にと決められるのでもない。知能が高いか低いか、性格がおとなしいか、よく憤るなども、神が決められるのではない。

農夫が農作業をして収穫する時も、同じ畑から麦も出て、殻も出て来るように、いのちが宿る時も、その時の精子と卵子によって子どもの性別、体質、性格、知能などが決定される。

奇形児が生まれる場合も同じである。神がそのように生まれるようにされたのではなく、人のミスや遺伝的な欠陥からこのような場合が生じるのである。

ところが、時によつては、神が特別にみごもりに介入される場合もある。親が神に喜ばれる信仰をもつて切に慕い求めて祈るとき、神が信仰のとおり働いてくださる場合である。

ところで、神は男と女のうち、どちらのほうを愛されるのだろうか？ 私たちの神は、男女を差別される方ではない。それでも、聖書を見ると、女よりは男のほうが大いに用い

られて、神に愛されているように見えるところもある。

ちなみに、〈創世記 25 章〉を見ると、神がヤコブとエサウがすでに胎内にいる時に、ヤコブを愛して選ばれたことがわかる。これは、誰かを差別するからではなく、すべてを予知する神は、エサウよりヤコブの心のほうを愛されたからである。

同じように、神が男のほうを喜ばれるように見える場合も、男のようにまっすぐで変わらない心を愛されるからである。女であっても、旧約聖書の預言者デボラやエステルのような人物は、神に愛されて、大いに用いられた。これは、神がご覧になって、どんな場合でも揺れ動かない、強くてまっすぐな心と、男に劣らない大胆さを認められたからである。

したがって、〈箴言 8:17〉に「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す者は、わたしを見つける。」とあるように、神の御前では男か女かが重要なのではない。どんな心に変えられるか、どれほど神を真実に愛するかによって、神にもっと愛されて認められるのである。

3. 結婚

ある人は結婚するとき、自分たちについて「私たちが会って結婚するのは神のみこころだ」と言ったりする。結婚式の司式でも「神が結びたもう夫婦」と宣言することも聞く。それなら、結婚はすべてが神のみこころに従ってするのだろうか？ そうではない。自分たちが好きだから会って、配偶者として選んだのであり、神のほうから「あなたは誰々と結婚しなさい」と思いのままに決められるのではない。

しかし、場合によっては、神が結んでくださった夫婦もある。たとえば、神を信じる人が結婚をしようと思って、神の御前に配偶者を求めて祈って答えられた場合である。本当に信仰で祈り求めて、神にゆだねたなら、神はその信仰のとおりふさわしい相手を備えてつなぎ、ふたりの心をつかさどって、結婚するように導いてくださる。だが、このような場合がどれほどあるだろうか？ ほとんどは自分が好きだから会って、嫌なら自分の意志で別れるのである。

また、ある人は「結婚することが神のみこころだ」と言ったりする。最初の人アダムとエバを造って、彼らに「生めよ、ふえよ」と言わされたので、男女が結婚して、子孫をたくさん生むことが神のみこころだと言うのである。

しかし、アダムとエバが初めて造られた時は、今とは状況が全く違う。その時は、人を造られてさほど経たなかったので、この地上に子孫をたくさん増やさなければならぬ時だった。

今から約二千年前、使徒パウロが生きていた時代でも、聖書には何と記されているだろうか？ 〈第一コリント 7:7〉で、使徒パウロは「私の願うところは、すべての人が私のようであることです。」と言った。つまり、自分のように独身で過ごしてほしいということである。〈第一コリント 7:26〉では「現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。」と言っている。

もちろん、誤解してはならないのは、このみことばが「結婚は罪だ」と言っているのではないということである。〈第一コリント7章〉を読んでいると、〈38節〉に「ですから、処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしているのであり、また結婚させない人は、もっと良いことをしているのです。」とある。すなわち、結婚をするからといって、それが過ちではないが、結婚しないほうが「もっと」良いという意味である。

なぜそうだろうか？ 〈第一コリント7:34〉に「心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」とあるように、男でも女でも、結婚しない人は、結婚して夫や妻に結ばれているより、主のためにもっと心を尽くして忠実に働くので、靈的に大きい祝福になるからである。

しかも、約二千年経った今日は、使徒パウロの時よりもっと「終わりの時」に近い。だから、「現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。」という〈26節〉のみことばの意味を、もっと深く悟らなければならない時である。このようなみことばだけ見ても、神がすべての人の結婚をつかさどって、各人の配偶者を決めておかれたという考えは間違っていることが悟れる。

けれども、神を信じる人で、結婚したいと思う人は、必ず神が結婚を導いてくださるように祈らなければならない。結婚して神を愛する心が分かれたり、忠実に働くのが難しくなるのではなく、夫婦がともに神の御前にもっと忠実になり、互いに靈的な愛を分かち合うような良い配偶者に出会えるように、信仰をもって祈り求めなければならない。

4. 生命体が宿って成長する過程

男女が出会って、結婚して愛し合うと、男の精子と女の卵子が結びついて、新しい命が宿る。まるで畑に種が落ちて実を結ぶように、男のいのちの種が女の畑に落ちて、命が宿るのである。

そして、この胎児は母の胎内に約10か月間いて、完全な人に成長するようになる。いのちが宿って成長する過程を見ると、創造主の神の妙なる摂理が感じられる。

まず、受精について調べてみよう。受精とは、男性の精子と女性の卵子が結びつくことである。精子は頭と尾の部分に分かれている。頭には、どんな子が宿るかについての重要な情報になる遺伝物質が含まれていて、尾は卵子のところまで移動できる力を持っている。また、頭には、卵子に出会った時に結合できるように、卵子の壁を突き破る酵素もある。

精子は約3億個が一度に子宮に入ってくるが、そのうちの1個が卵子に出会うと、卵子の壁からは高圧の電気が発散されて、他の精子はショックを受ける。先に卵子に到着して結合した精子のほかは、寄りつけなくなるのだ。そして、これ以上他の精子が入ってこないように、壁が急速に厚くなる。

このようなすべての過程が自動的に行われるよう、神がとても神秘的に人を創造して

くださったのである。このように結びついた受精卵は、1日で二つに分かれて、二日後には8、次は16、このように分割して、八日後、子宮壁に着床する。それから2週間経つと、完全に新しい変化が始まる。

その3週間後には心臓が動き始め、それから1週間後には脳と脊椎、神経組織ができる、受精して12週になると、身長は5センチ、体重は30グラム、腕の長さは1センチ程度になり、指紋もできて、すべての器官が作られ始める。

受精から2か月間で、母の胎内で胎児は体重が何と200万倍に増加すると言われる。時計が「カチ」という瞬間に、身長と体重が約20倍に成長するのである。本当に瞬く間の変化と言えるだろう。

1秒で体重が20倍に増加するためには、細胞分裂もそれだけ起きているはずだ。また、細胞分裂が起きるためには、細胞の中にある遺伝子のDNAも、それだけ増加しなければならない。

DNA一つには30億の遺伝情報が入っている。DNAを一つの家として、その中に入っている遺伝情報をそれぞれ一つのレンガだとすると、DNA一つを複製することは、レンガ30億個でできた家を一軒建てるようなものである。それもレンガの配列が、元の家とたった一つでも違ってはいけないのである。

1秒にもならないうちに、30億個のレンガが一つももれなく組み立てられて、それぞれの形に応じてあるべき位置に入って、完全に同じ家が建てられるなら、これをどうして偶然と言えるだろうか？　ただ全能なる神の力でだけできることである。

それで、生命工学を研究する科学者の多くが、このようなことだけを見ても、創造主の神を認めるしかないと告白しているのだ。

胎児の成長過程をもう少し調べてみよう。宿って1か月になると、神経官が発達し始め、血液、骨、筋肉、血管、内臓器官が作られるための基礎作業が進められる。

2か月になれば、胎児の心臓はポンプ運動をして、ある程度身体の外観ができる、肉眼でも頭と腕と脚の形が確認できる。3か月目は、顔が作られる時期であり、頭と胴体、腕と脚が自分で動き始める。

4か月になると、身体と生命維持に必要な器官が正常に作動するようになる。5か月から、胎児は筋肉を動かして周りの環境を確認するなど、もっと活動的になり、聴覚機能が向上していく。

そして6か月になると、胎児は消化器が発達して、本格的に成長が速くなり、7か月目は頭から髪の毛が生えて、男の子の場合は、性ホルモンによって精巣が陰嚢の内に入る。女の子の場合は、8か月目で性器が完成する。9か月目は、髪の毛がはっきりするようになり、全身の毛が退化して体のシワもなくなり、四肢がふくらむ。そして、最後の10か月になると、平均50センチの身長に3キロの体重になって生まれるのである。

それでは、このように成長する胎児のからだに、靈とたましいが宿る時はいつだろうか？　精子と卵子が結びついて6か月になったとき、はじめて靈とたましいが与えられる。しかし、たとえ6か月以前、すなわち、靈とたましいが与えられる前であっても、人がその命

を思うままにしてもよい、という意味では決してない。

子どもは宿ったその瞬間から、神に属する生命体であり、そのいのちに関する主権は神にだけある、ということを心に刻まなければならない。医学的にも、胎児の聴覚器官がほとんど完成され、まぶたができるて閉じていた目を開くようになるのも、5か月以後だそうだ。また、大脳機能を活発にする脳のシワも、5、6か月にでき始めると言われている。

その上、聖書を見ると、すでに6か月が過ぎた胎児が、聖霊の働きに反応する場面がある。〈ルカ1:41-44〉に「エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声をあげて言った。『あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。』」とある。

これは、イエス様をみごもったマリヤが、その6か月前にバプテスマのヨハネをみごもったエリサベツに会ったとき、エリサベツの胎内の子がイエス様のゆえに御霊に感じて喜ぶ姿である。すでに胎児は生命体であるだけでなく、6か月が過ぎた胎児は御霊に感じて動かされて満たされる、霊的な存在であることがわかる。

先に調べたように、胎児は宿って10か月間、母体で成長する。この期間は、からだの成長だけでなく、人格と知能と性分が造られるのに、かなり重要な時期である。

たとえば食べ物でも、胎児は胎内で母親が摂取するものがそのまま供給される。母親が酒やタバコなどからだに害になるものや、刺激性のあるものを取り込めば、これは直ちに胎児に影響を及ぼす。母親が薬の服用を誤ったり、有害な環境にさらされたりする時も、胎児は深刻な影響を受ける。

また、みごもっている間、母親がどんな感情を持って、どんな思いをするのかも、胎児に大きい影響を与える。それで、昔から人々は胎教を大切にして、妊娠中はさらに身を慎んで、気をつけて正しいことを見聞きして、正しい心を持つようにしたのである。

宿っている期間に両親、特に母親の影響を受けるのは、霊的にも同じである。神の恵みによってみごもって生まれた子どもは、特にかわいくて賢いのがわかる。また、みごもっていたとき、主にあって熱心に忠実に仕えて、火のように祈ったらこのような子が生まれた、性分も柔軟で賢く、健康に成長している、という証しが多い。すでに胎の中から神の恵みが臨んでいるために、神がその子のすべてに細やかに介入されるのである。

このようなことを知って、真理にあって信仰で子どもを生んで育てると、いくらでも靈肉ともに健康で賢い子に育てられる。

聖書にも、母のハンナの祈りによって神が授けてくださったサムエルは、すでに幼い時から神と交わって、おとなになってからは、神の御前に偉大な預言者になった。

バプテスマのヨハネも、神がつかさどられて宿ったので、胎の中から聖霊に働きかけられた。彼は〈ルカ1:80〉に「さて、幼子は成長し、その靈は強くなり、イスラエルの民の前に公に出現する日まで荒野にいた。」とあるように、子どもの時から聖霊に働きかけられ

て、主の道を備えていったのである。

5. 「選び」と「召し」

聖書を見ると、「選ばれた」「召された」という表現がある。この地上で多くの人々のうち、神が人間耕作を計画して、その摂理を成し遂げられるために、特定の人物を「召して」用いられる場合もあって、一般的な基準を定めて、その基準に入ってきた人を「選んで」用いられる場合もある。

このような摂理のうちに「選び」と「召し」がどう違うかを見分けなければならない。信仰生活において、このような違いを正しく知って悟るなら、神のみこころにあって完全な救いに至り、神が用いられるにもっとふさわしい器に変えられることができる。

まず「選び」とは、神が何かの枠を作つておかれ、その中に入ってきた人、という意味である。

たとえば救いならば、救いの枠を作つておいて、その中に入ってきた人は救われる、ということである。すなわち、イエスを救い主として信じて受け入れて、神のみことばどおり生きていく人を「神に選ばれた」と言うのだ。

ある人々は、まるで神が主権をもつて、救われる者と救われずに滅ぼされる者を初めからすでに選んでおかれたと考える。それで、一度主を受け入れて救われた人は、その時からたとえみことばどおり生きられなくても、結局は救われるよう強権的に働くと錯覚する人もいる。

しかし、神は決してそのような方ではない。神が救いの枠を作つておかれ、自由意志によって信仰を持ってその枠の中に入ってくる人は、神に選ばれて救われるのである。

一方、救いの枠に自分で入つてこなければ選ばれないし、ひとまず入つても、再び出て行つてしまふなら、これは初めから入らなかつた人と同じように、選ばれなかつたことになり、救われずに死に至るのだ。

それで、〈第一コリント3:17〉にも「もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」とあるのだ。また、〈ヘブル6:4-6〉には「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖靈にあづかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わつたうえで、しかも堕落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」とある。

これは、主を知って信じたとしても、いったん救いの枠から外れると、誰でも滅びに至る、というみことばである。それで、〈マタイ 22:14〉には「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」とあるのだ。だから、「選ばれた」というと、これはキリストを救い主として受け入れて、神のみことばどおり生きていく人を指し、神に選ばれたということなのである。

では次に、「召される」とは何だろうか？これは、世界の始まる前からすべてを予知して予定された神が、人間耕作の摂理を成し遂げるために、ある人を選んで、その人生を全面的につかさどっていかれることである。

たとえば、信仰の父アブラハムや、イスラエルの祖ヤコブ、エジプトからイスラエルの民を連れ出したモーセなどが、神の摂理にあって大きい使命を果たすために召された人々である。

世のすべてを前もって知っておられる神は、耕作の摂理の中で、どの時点でどんな心の人が生まれるかをご存じである。したがって、神が望まれる目的のために用いられる人を召して、神の摂理にあって大きい使命を果たすようにされるのだ。

このように召された人は、宿って生まれる過程はもちろん、その人生の毎瞬毎瞬に神が直接介入される。どこに行って何をしても神につかさどられて、訓練をしっかり受けて、結局は、その使命を十分に果たすようになるのだ。

〈ローマ 1:1〉に「神の福音のために選び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、」とあるように、使徒パウロも、新約時代の福音宣教のために召された人である。使徒パウロは異邦人の使徒として、人としては耐え難い、途方もない苦しみを受けて、全世界に主の福音を伝えるために召されたのだ。強くて大胆であり、変わらない心だったからである。

また、新約聖書の書簡のほとんどを書いて、神のみこころを世に伝える尊い使命もあったので、すでに小さい時から神がその成長と教育、主との出会いまで、すべて介入された。神のみことばを徹底的に学び、当時、最高の律法学者ガマリエルのもとで優れた知識を積み、十分に使命が果たせる器にされたのである。

また、バプテスマのヨハネも、神に召されて、胎に宿った時から神がつかさどって、小さい時から特別な生き方をするように導かれた。荒野にひとりで住み、世と接しないで、らくだの毛の着物を着、腰には皮の帶を締め、その食べ物はいなごと野蜜にしながら、主の道を用意する使命をゆだねられた。

モーセも同じである。神はモーセが生まれる前から働かれて、彼がかごに入れられてナイル川に置かれた時も、正確にその時間にパロの娘を備えて彼を救うようにされ、エジプトの王子として育つように導かれた。また、成長する時も、実の母のもとで神と自分の民族について学ぶようにされ、エジプトの学問と世の知識も学ぶように働かれた。

そうするうちに、神のみこころにあって40年間の訓練を受けた後、ホレブ山の柴の中の、火の炎の中から召されて、イスラエルの民をカナンの地に導く指導者の使命をゆだねられたのである。

また、エレミヤについては、〈エレミヤ 1:5〉に「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」とある。

このように、神は人間を耕作しながら、いつ、どんな心を持った人が生まれるか知つておられ、強權的につかさどることによって、神のみこころが成し遂げられるように働く場合がある。これが「召される」ことなのである。

6. 種を下さった摂理

これから説明するのは「種」についてである。先に、いのちの種についておおまかに調べた。ここでは、神が種を下さった摂理と関連して説明する。

神は男には「精子」、女には「卵子」という種を与えられた。この種によって、神はこの地上の人間耕作の歴史が続けられるように、摂理のうちに計画されたのだ。

農作業も同じである。農夫は収穫するために地に種を蒔く。種には、植物として育つ部分と、植物が育つのに必要な養分が蓄えられている部分がある。そして、種が芽生えるには、適当な水分と温度、光と酸素などが必要である。

このように植物の種が畑に蒔かれて、適当な環境で発芽して育ち、実を結ぶ過程のように、人も似たような過程を経て、新しい生命体が誕生する。つまり、精子と卵子が結びついていのちが宿り、また、そのいのちは母体から栄養分を供給されて、一定の温度と環境で育つのである。

このような種についての摂理だけを見ても、神の知恵と力はどれほど不思議で驚くものだろうか？ ところで、ここで私たちが一つ考えてみることがある。それは、農夫が種を地に蒔いて、一生懸命に育てる理由は、まさに実を刈り取るためだということである。いくら良い種を地に蒔いて、心を込めて育てても、実を結ばないなら何の役にも立たない。

同じように、農夫である父なる神が、私たち人にいのちの種を与えて、この地上で六千年間、耕されるのは、結局、実を刈り取るためなのである。

それでは、この「実」とは、はたして何だろうか？

植物の実のように、目に見えて食べられる実でなく、私たちが結ばなければならない実は、私たちの靈とたましいにかかる靈的な実のことである。言いかえれば、私たちの主に似せられた美しくて善良な心を耕して、私たちが失った神のかたちを完全に取り戻すことが、私たちがこの地上の人生で結ぶべき実である。

この実を結ばないなら、私たちの父なる神がおられる天国に入ることができなくて、その靈とたましいは殻のように何の価値もないために、結局は地獄の火に投げこまれて、焼き尽くされるのである。

7. 心の地

次に調べるのは「心の地」である。

先に、植物の種が地に落ちて育つように、精子と卵子が結びついて、新しい生命体として育つと述べた。ところが、ここで説明する「地」とは、そのような肉的な意味でなく、

靈的な意味で「人の心」を意味する。

これは、人の靈とたましいを理解するために必要な内容である。聖書にも、土地のちりで造られた人の心を、地にたとえたところがある。〈マタイ 13:3-9〉でイエス様が、人の心を良い地、いばらの地、岩地、道ばたに分けて説明された。

それでは、このような地、すなわち、人の心はどのように形成されるだろうか？ 子どもは、親から気を受け継いで、それぞれの性分を持って生まれる。この性分は人の心を形成するのに重要な影響を及ぼす。ある人は「人は血を受けて生まれる」と言うが、実際は、血でなくて気を受け継いで生まれるのであり、これが人の性分になる。

それなら「気」とは何だろうか？ 辞書で「気」を調べると、「生まれつきもっている心の傾向。性質。性格。」と定義している。ここでは「気」を「人の全身から出てくる体液の結晶体」と説明することができる。

この気は、神の力によって、精子と卵子という目に見えない小さいいのちの種に込められている。したがって、精子と卵子が受精して子どもが生まれると、その子は親の気を受け継ぐので、親の顔つきだけでなく、性分や性格、癖までも似て生まれるのである。

だから、このいのちの種というものが、どれほど驚くべき神の創造物だろうか？ もう一度整理すると、人は親の気を受け継いだ性分を持って生まれ、この性分によって心が形成される。

たとえば、ある子は生まれた時から柔軟で我慢強いかと思えば、ある子は憤りが多くてせつかちである。それなら、その親もやはりそうなのがわかる。だから、「気」というものがそれほど重要なのである。

また、人の心を形成するのに重要なのは環境的な要素である。たとえば、生まれたばかりの子は何も蒔かれていらない地のようなものだ。入力されたものが全くないので、何の考えもない無の状態である。

ところが、子どもが育つにつれて、見て聞いて接するものによって思いが入り始め、これが心に蒔かれるようになる。良いものが思いの中に入力されるなら、心に良いものが蒔かれ、反対に、悪いものが思いの中に入力されるなら、心に悪いものが蒔かれるようになる。

したがって、人の心は大きく分けて、先天的な要素と環境的な要素によって造られる。すなわち、親の気を受け継いで生まれた心の地に、この世に生まれて成長しながら、どんなものを思いの中に入力して学び、含んでいるのかによって、善惡の基準に違いができる、人の心が違ってくる。

これらのことがわかってこそ、自分がどのように造られてきたか悟るようになる。また、悟るほど、変えられていく過程において神の助けが受けられるのである。

たとえば、良い親の気を受け継いで、生まれた時は良い心の地を持っていても、成長しながらしおっちゅう悪いものを入力していくなら、悪い地に変わる。反対に、生まれた時

は悪い地だったとしても、そこに良いものを入力し続けるなら、結局は良い地に変えられる。

もちろん、こういう場合もある。うわべの姿は荒々しくて悪いけれど、もともと柔和な気を受け継いだ人は、そうでない人よりはどうしても変えられやすいのが見られる。心の元の土質そのものは良いので、育ちながら入力された悪いものを引き抜いて、良いものをこまめに入れていくなら、良い地にすみやかに変わる。

仮に、親から受け継いだ気そのものが悪くて、その上悪いものまでたくさん入力してあるならば、聖められるためにはさらに多くの祈りと断食が必要である。しかし、どんな場合でも神の力でできないことはない、ということを悟らなければならない。

それでは、私たちは主を信じる前に、どんな心の地を持っていただろうか？ 神を信じて真理に照らしてみると、どれほど悪いものが多かったんだろう。そねみ、ねたみ、憎しみ、憤りなどが心に蒔かれていた。

ところが、主に出会って、みことばどおり生きるなら、悪い心の地も良い地にいくらでも作り変えられるのである。たとえば、岩地を良い地に変えるなら、石を全部拾って捨てればよく、いばらの地を良い地にするには、いばらを全部引き抜けばよいのだ。

同じように、聖書に「捨てなさい」「してはならない」とあるなら、捨てて、しなければよい。また、荒れた地に一生懸命肥料を与えて、土を耕して良い地にするように、神のみことばに「守りなさい」「しなさい」と言わされたとおりに聞き従うなら、肥えた良い地の心に変えられるのである。

このように、真理に逆らう悪いものを熱心に捨てて、真理である良いことを行っていけば、私たちの心の地そのものが耕されて、良い地に変えられる。これがまさに聖められる近道である。

ところが、みことばを聞いても行いが伴わないなら、心が変えられないでの、何の役にも立たない。むしろ聞いた知識によって高ぶりになるだけである。

したがって、父なる神が望まれることは、実際に真理を行って、悪を捨てて心を変えていき、結局は私たちの主のように、100 パーセント真理だけで満たされた、良い地のような心になることである。

8. 器の出来

このテーマは農作業と関連があるので、まず土についてちょっと調べてみよう。農夫にとって、土というものは大変重要な意味を持っている。同じ種を蒔いて、同じように水をやって肥料を与えても、土がどうなのかによって、秋の収穫量が大いに違ってくるからである。土は太陽の光と空気と水を合わせて、新しい命が生まれる環境を作り、その中で種が芽を出して育つが、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍の実を結ぶのである。

これは、土で造られた私たち人も同じである。みことばの種が私たちの心に落ちると、あるものは実を結び、あるものは実が結べない。また、実を結ぶ程度がみな違う。

それでは、なぜこのような違いが出てくるのだろうか？ それは、私たちがどんな心を持っているのかによって、みことばが心に落ちて実を結ぶのも違ってくるからである。

これをもう少し具体的に理解するために、今から器の出来について調べてみよう。

すでに調べたように、私たち人の心は、親から受け継いだ気と、育ちながら見て、聞いて、感じて入力したものが結びついて作られる。このような過程を通して、人はその心に善と悪を積み上げていく。

〈ルカ 6:45〉に「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」とあるように、人は善か悪をその心に自分で積み上げていくのである。

また、このように人が心に何かを入れながら、正しい、正しくない、あるいは、良い、悪いなどをわきまえるようになる。心に入れたものがない幼い時は、何かをさばかずにそのまま受け入れるが、成長するうちに自分なりにわきまえるようになる。

ところで、人がこのように心に何かを入れていくとき、その心の地がどうなのかにより、芽を出す程度が違ってくる。

たとえば、私たちがみことばを聞く時も、人によってそれを聞いて受け入れる態度が違う。ある人は心の扉を開いて「アーメン」と受け入れるかと思えば、ある人は、自分の思いと知識に合わないから、さばいて排斥してしまったりするのである。また、ある人は切実な心でみことばを聞いて、行うために努力する。ある人は聞いて恵みを受けても、時間が過ぎれば忘れてしまう。

このように、みことばを聞く態度とどれほど心に留めるのか、そして、それをどう行っていくかは、それぞれ人の心の地によって違う。これらすべてによって人の器の出来が決められる。

1) 四つの心の地

今から心の地のタイプを説明するので、自分の心の地はどうなのか、また、器の出来はどうなのか、考えてみよう。

聖書では、人の心が大きく四つに説明されている。すなわち、道ばた、岩地、いばらの地、良い地のような心である。神は人にみことばが入る過程を、種蒔きのたとえで教えてくださったのである。

まず「道ばた」は、種が芽生えもしない地である。

道ばたとは、人々が長い間踏みしめて固くなった地のことである。このような地は、つるはしを力一杯振るっても碎きにくいし、種を蒔いても、根が地に入っていくために、芽が出ることもない。すなわち、生命の働きが起こらないのだ。かえって「鳥が来て、地に落ちた種を食べてしまった。」と聖書に書いてある。このように、人の心が道ばたのよう

に固くなつて、頑固な人がいる。

たとえば、イエス様の時代のユダヤ人指導者たちは、自分の思いと枠にこだわり、神の力を現しておられるイエス様を排斥して、福音を受け入れなかつた。今日も、道ばたの心を持った人は心が頑ななので、神の力を見せてても心の扉を開かずに、福音を排斥してしまうのである。

〈マルコ4:15〉に「みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。」とある。このような人は、みことばを聞いても、心に蒔かれないので、サタンが来て、それを持ち去ってしまう。

説教を聞くとき、サタンがその心に来て、みことばを心に留めないように持ち去ってしまうのである。すると、みことばを信じようとせずに否定して、みことばを伝える神のしもべを、自分の思いの中できばいて罪に定めるのである。

このように心が頑なで心の扉を開かない人は、みことばが蒔かれても実を結ばないので、結局、救われない。したがつて、こういう固い心を持った人は、すみやかにその心を打ち碎かなければならぬ。

次は「岩地」である。

岩地は、道ばたよりはましな地である。道ばたは、みことばを聞いても、受け入れようとする心になつていなついために悟れないが、岩地の人は、それでもみことばを聞けば悟りはする。

農作業をしたことのある方は知つてゐるだらう。岩地に種を蒔けば、芽が出ることは出るが、ポツポツと出るだけで、よく育たない。

〈マルコ4:5-6〉に「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。」とあるように、岩地に落ちた種は、芽が出ても、土が薄いので、根を深く下ろすことができなくて、すぐ枯れてしまう。

それでは、どんな人が岩地のような心だらうか？ みことばをすぐ受けるけれど、心から信じられない人である。みことばを聞く時は「アーメン」とうなづき、必ずそうしようと決心するが、困難がやって来れば、信仰を守らないのである。

また、恵みを受けた時は感激して喜ぶが、苦しみと迫害と患難がやって来ると、気を落としてすぐ変わつてしまふ。心に信仰の確信がないから、行いが伴わないのである。

ところで、〈マルコ4:17〉に「根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」とある。ここで「みことばのために」とは、たとえば、聖書には「安息日を守りなさい」「十分の一献金をしなさい」「偶像を拝んではならない」「仕えなさい」とあるが、このようなみことばを聞いて行っていくとき、何か困難や迫害がやって来ると、信仰でみことばを受けられなかつた人は、そのまま力が抜けてつまずいてしまう。

このような姿が自分の姿ではないのか、一度振り返つてみなければならない。信仰生活が長いのに、心が変えられなくて行いが伴わないのであるなら、自己発見が必要である。

イスラエルの民は、エジプトから出て来たとき、エジプトに下される十の災いも見て、

モーセによって葦の海が分かれるのも見た。しかし、いざ神が彼らに信仰を求められる時になれば、信仰の行いを見せずに、かえって神のしもべモーセに対してつぶやいた。

次に「いばらの地」のような心もある。

いばらの地の心を持った人は、みことばを聞いて行いはする。しかし、神のみこころが完全に行えないでの、うるわしい実が結べないのである。その理由は何だろうか？この心の地には、いばらがあるからだ。

〈マルコ4:19〉では、いばらとは何を指すかを三つで説明している。すなわち「世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。」とある。このような心の地の人は、みことばどおり行って自分なりに信仰生活を正しくしているようだが、試練、患難が伴い、靈的に成長できないのである。それは、世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望があるからである。

このような心を持っているなら、今のところはみことばどおり生きているようだが、いつか富の惑わしや試練がやって来ると、つまずきやすいのである。〈ヤコブ1:8〉には、こういう人を「二心のある人」と言っている。

いばらは、芽が出始めた時は、それほど大きい害を与えるさうだが、しばらく経って芽が育った後は、全く違ってくる。このように、世の心づかいやむさぼりを捨てずに持っていると、サタンが巧妙に惑わして、結局はみことばが実を結ばないようにさせる。

最後に「良い地」とは、肥えた地のような心である。

良い地とは、固い地でもなく、石やいばらがない地に、農夫が心を込めて耕した肥えた地のことである。このような心には、どんな障害物もないでの、みことばが蒔かれさえすれば、三十倍、六十倍、百倍の実が結ばれる。まさにこのような人に神の祝福が臨み、祈ることは何でも答えられる。

「私は熱心に信仰生活しているのに、なぜ祝福されないんでしょうか？」「なぜ問題が解決されないで、試練、患難がやって来るのでしょうか？」と思う人がいるならば、自分の心の地を一度振り返らなければならないだろう。確かに良い地になったのか、また、どれほど変えられたのかを顧みなければならない。

自分がどれほど良い地になったのか知るには、みことばをどのように行っているのか調べればよい。良い地の心になった分、みことばを行っていくことがやさしい。

ある人は、みことばを聞いて知っているけれど、疲れ、怠け、真理に逆らう思い、欲などのため、行いが伴わない。

しかし、良い地はこういう障害物がないために、みことばを聞けば、その場で悟って行う。「これが神のみこころだ」「これが神に喜ばれることだ」と言うと、そのまま行う人が良い地の心である。

前は行うのが難しかったことが、心の地が耕された分、真理を聞いて行いやすくなったりもいるだろう。憎んでいた人を憎まないようになった。赦せなかつた人が赦せるようになった。そねんでさばいた心が、だんだん愛と憐れみの心に変わる。高ぶつた心が低く、仕える心に変わる。

このように、悪はどんな悪でも避けて、心の割札をすることが、まさに心の地を耕して

良い地にする過程である。良い地にみことばの種が蒔かれると、種がすくすく育って、美しい実、すなわち、御靈の九つの実が豊かに結ばれるようになる。

また、良い地になれば、心から信じられる信仰が与えられて、祈っても、神の力を引き下ろす火のような祈りになる。そして、聖靈の声を正確に聞いて、神のみこころのとおり行うようになる。

このように良い地になり、みことばを熱心に聞いてよく刻み、そのとおりに行うなら、その分、その人は器の出来が良いと言える。

聖書には、どれほど良い器かによって、器を金の器、銀の器、木の器、土の器などに分けて記されている（第二テモテ 2:20）。神は人それぞれの器がどうなのか、知っておられる。どれほど自分自身と戦って心を変えるなら良い地になるかという、その人の器を予知されるので、その器の出来を見て、その人を召して用いられるのである。

たとえば、神は使徒パウロの気や性分が、訓練を受けて碎かれて変えられるなら、尊い器になることをあらかじめ知っておられたので、彼を母胎から召してご自身で練って用いられた。

彼はイエス・キリストを受け入れる前も、律法に従って生きて、その心が神だけを愛したので、主が直接会ってくださったのである。その時からパウロは一度も移り変わることなく、主だけのために死に至るまで忠実であった。

神が主のしもべや働き人を召されるのも同じである。誰が多くのたましいを救って、神の羊の群れにもっと忠実であり、神の働きができるか、神はご存じなので、その心の器をご覧になって、召して用いられる。

それなら、私たちは神の御前にどんな器だろうか？

同じ場所で、同じ時間に、同じみことばを聞きながらも、ある人は恵みを受けて、ある人は変えられるのに、ある人は変えられないで、むしろつまずいてしまうことが見られる。まさにその心の地によってみことばが実を結ぶ程度が、このように違うのである。

したがって、種を熱心に蒔くことも大切だが、まずは自分の心をどれほど良い地に耕すかのほうが、もっと大切である。

〈詩篇103:14〉に「主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。」とあるように、私たち人は土地のちりで造られた。

そのために、私たちの心の地はそのまま放っておけば、荒れて、雑草が生えて、たちまちやせ地になってしまう。したがって、私たちは勤勉な農夫になり、熱心に心の地を耕さなければならない。

もう一度説明すると、器の出来とは、どれほどみことばをよく聞いて、聞いたみことばを心に深く刻んで信仰でしていくかによって違う。このようにどれほど熱心に心の地を耕していくかが、器の出来を決めるのである。

たとえば、みことばを聞くとき、集中して聞く場合と雑念にふけりながら聞く場合、あるいは居眠りしながら、またはぼーっと聞く場合とは、心に蒔かれる程度がみな違う。い

くら多くのみことばを聞いても、心に留めるのと上の空で聞くのとでは、かなりの違いが出てくる。

それで、〈使徒の働き 17:11〉に「ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」とあり、〈ヘブル 2:1〉には「ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。」とあるのだ。

このように、良い器を作るためには、まずはみことばを正しく聞かなければならぬし、聞いたみことばを心に留めなければならぬ。

〈ルカ 2:19〉に「しかしマリヤは、これらのことすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」とあるように、マリヤはみことばを大切に思つて、心に納める良い器なのである。

そして、このように聞いて悟ったみことばを行いで現すと、結局は良い器になり、神の用いられるにふさわしい姿に変えられる。

〈第一コリント 3:9〉に「私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畠、神の建物です。」とあるように、私たちはみな、神が耕される畠である。したがつて、私たちの畠を「良い地」にするために、みことばをよく聞いて心に留め、そのまま行わなければならぬ。そうする時、金の器のように良い器になるのである。

2) 器の出来の重要性

ある人はみことばを聞いてもただ聞き流してしまうかと思えば、ある人はひと言ものがすまいと集中して聞いて心に受け入れる。また、ある人は、それに自分を照らしてみて悟り、熱心に行っていく人もいる。これがまさに、器の出来の違いである。

それでは、器の出来は、なぜ重要なのだろうか？

それは、器によってみことばを心に受け入れて、留めて、行う程度が違うので、器の出来が良ければ、それだけすみやかに聖められて、靈的な力ももっと大きく現せるからである。

みことばを同じように聞いても、人によって心に受け入れる程度が違つて、また、みことばどおりしていく程度もみな違う。ある人は聞くことは聞くけれど、間違つて心に受け入れたり、ある人は心に受け入れても行わない。一方、心によく受け入れて、熱心に行っていく人もいる。このように同じみことばを聞いても、そのみことばを適用する方法がみな違うのである。

まさにこのような違いのため、主のしもべや働き人も、力と権威がそれぞれ違うのである。なぜある人は祈ると神のみわざが起こつて、ある人はみわざが起こらないのだろうか？みことばを知らなくてそうなのではない。人それぞれに器が違つて、それによってみことばを心に受け入れてしていく程度が違うからである。

このような違いを理解しやすいように、例を挙げてみよう。

たとえば、数学の時間に生徒が何か公式を一つ習つたとしよう。すると、ある生徒は公式を学んでも、上の空で聞いて忘れてしまうかと思えば、ある生徒は習つた公式を覚えて

しまう時まで熱心に復習する。ところが、公式をすらすら暗記したからといって、生徒の数学の実力がみな同じなのではない。その公式を適応して、どれほど多くの問題を解いて応用するかによって、実力が変わってきて、数学成績が違う。

靈的にも同じである。同じみことばを聞いて学んでも、靈的な実力や力が違う。なぜある人はみことばを聞いたら驚くほど変えられて、神に認められているしとしてみわざが伴うのに、なぜある人は数年経っても、大きな進歩がないのだろうか？

私たちがみことばをいのちのように大切に思って、そのみことばどおり行っていくなら、必ず変えられる。何より、靈であられる神と交わることができる。だから、祈れば次々と答えられて、靈的な祝福だけでなく、物質の祝福もあふれるように受けるようになる。聖靈の声を聞いて使命を果たしていくので、聖徒を顧みるとき、たましいの働きが打ち砕かれて変えられるみわざが現れる。

自分がしようとするのではなく、父なる神がなさるようにゆだねるので、自分のいるすべてのところで美しい実が結ばれるのである。

9. 心の出来—四つのタイプ

次に調べるのは「心の出来」である。

「器の出来」が器の材質、たとえて言えば金か銀か木か土かということにかかわっているとすれば、「心の出来」は、同じ材質で作られた器であっても、どれほど心を広く遣うかということである。

それでは、この心の出来を大きく四つに分けて説明してみよう。

1) すべきこと以上をするタイプ

第一は、自分がすべきこと以上をやり遂げるタイプである。最も心の出来が良い人である。

たとえば、親が子どもに「部屋に落ちているゴミを拾いなさい」と言うと、ゴミを拾うだけでなく、ゴミ箱まで空けて来る子がいる。さらに進んで、部屋のホコリまで掃いて、すみずみまで掃除する子もいる。この場合は、親の期待以上に行ったので、親の心に満足と喜びをいだかせる。

また、掃除をしても、自分の家の庭と門の前だけ掃いて終わらせる人がいるかと思えば、ある人は隣の家の門の前まで掃く。さらに、近所の路地までこまめに掃除する人もいる。このように心を広く遣う人は、すべてのことで周りの人からほめられて、認められるようになる。

神の御前でも、自分の心をどれほど広く遣うのかによって、心の出来が変わる。

たとえば、ステパノ執事やピリポ執事の場合は、信仰生活をするとき、自分は主のしもべでないから、適当にやればよいと思わなかった。主のしもべに劣らない心の出来を持って、聖められて忠実であり、神の御前で全き子どもの姿になっていった。だから、彼らは神に愛されて喜ばれ、執事としてすばらしい力と不思議とするしを、人々の間に大いに行えたのである。

教会で、賛美やある分野に特別な賜物があつて、務めを受けた人であつても、心の出来が良い人は、その分野だけで働くのではない。たとえ聖徒を顧みる務めは受けなかつたとしても、聖徒を顧みたり、そのほかに自分にできることがないかと心を遣う。

教会の行事がある時も、心を広く遣う人は、自分の使命を果たすだけでなく、全般的な分野に気配りをして、父なる神と牧者的心で顧みる。

このような心ならば、祈る時も、自分が使命を受けた分野だけのために祈るのではなく、他のあらゆる分野で使命を受けた者のために、自分のことのように切に祈るようになる。このような時は、神の御前でも大いに喜ばれて、それほど天国の報いも大きい。

2) すべきことだけをするタイプ

第二の場合は、自分がすべきことだけをやつとする心である。このような人は、自分に与えられた責任と義務はしっかりと果たすが、周りを顧みたり、他の人を助けたりするところまでは心が遣えない。

たとえば、親が「ゴミを拾いなさい」と言うと、ゴミだけ拾う場合である。すると、もちろん聞き従ったことについてはほめられるが、それ以上に親に喜ばれないである。

主にあっても、何かの使命を任されたとき、その使命だけを果たす場合がある。ちょうど自分に与えられた働きだけをして、他のところには心を遣わないのだ。ところが、このように自分に任された分野だけちゃんとすればよいとして、それ以上の心を遣わない人は、神の御前にそれほど喜ばれない。

3) すべきことをいやいやするタイプ

第三の心は、すべきことはするが、どうしてもしなければならないことだけをいやいやする。それも喜んで感謝をもつてするのではなく、不満をいだいて不平たらたらです。

このような人は、すべてに否定的であり、自分を犠牲にして仕えるのを惜しむ。使命を受けた時も、義務感から果たすことは果たすが、他の人を困らせて、負担をかけるようになる。

しかし、人が何をしようが、神がご覧になるのは私たちの心である。たとえば、祈りをしても、務めを持っている者なので、しかたなくいやいやするのではなく、本当に神を愛するのでその前に出て来て、心から切ない祈りをしなければならない。

また、自分の任された分野でリバイバルしようとする時も、ある人は実を結ぶべきだと負担に思って無理に聖徒を訪問して伝道する。この時も神の御前で喜ばれる人は、魂を愛するので自分自身のように顧みて、何としてでもひとりでも多くの人が救われるよう、熱い心で福音を伝えるのである。

こういう人の口からは、否定的な言葉や不平、不満が出てこない。いつも喜びの賛美が流れ出て、父なる神の愛と恵みに感謝する告白が自然に出てくる。

4) すべきことはしなくて悪を行うタイプ

第四に、ある人は自分のすべきことをするどころか、かかわらないほうがましと思うほど悪を行う、良くない心を持っている。責任感や義務感もなく、相手に対する配慮もないだけでなく、自分の考えと理屈を言い張り、他の人を困らせるのである。

たとえば、親が掃除をさせると「弟もいるのに、何で僕じゃないといけないんだ?」と言つて、掃除もせずに弟をたたいて泣かせる場合である。

神の働きをする時も、当然すべきことなのに、自分がなぜこんなことまでしなければならないのかと不平を言って、さらに周りの人を困らせて、平和を破る人がいる。また、ゆだねられたたましいを愛で養えず、失つたりつまずかせたりする場合もある。

それでも自分の欠けたところを悔い改めて、何としてでも使命をよく果たそうと努力するのではなく、いつも他人のせい、環境のせいだけにする。自分が置かれた状況が悪くてできない、あの人が私を困らせるからできない、このように言い訳だけをして、任された使命まで手放すのである。

このような人には何かを頼みたくないだろう。どうせ何かを任せるなら、第一のタイプのように、自分のすべきこと以上をして、しかも喜んでしてくれる人がほしいだろう。神がご自身の働きを成し遂げられる時も、このように心の出来が良い人を喜ばれ、大いに用いられるのである。

それなら、自分がこの四つのうち、どれに属しているのか、一度顧みてみよう。何かの使命を果たすとき、もっと心を広くして周りのことを顧みただろうか? でなければ、自分に任せられた分だけをちゃんとやればいいと、もうそれ以上は心を遣わなかつたのではないだろうか? ひょっとして、与えられた分だけをかろうじて果たしながら、不満で一杯だったり、行うべきことも行わないで、周りの人を困らせて、互いに争つてぶつかつたりしたことはなかつただろうか?

このようなことを調べてみたら、自分の心がどうなのか答えが出る。仮に自分の心の出来が良くなかったなら、今からでももっと広くて大きい心に変えればよい。

そのためには、まず心を聖めて、器の出来を良くしなければならない。器が良くないのに、心だけが良くなることはありえないことである。そして、あらゆる分野で熱い心をもつて行い、自分を犠牲にして献身することが、心の出来を良くする道である。このように心の出来が良い人は、神の御前に用いられる時も、もっと大きい事を果たして、栄光を帰すことができる。

ヨセフがまさにそうである。ヨセフは兄たちのそねみ、ねたみのため、エジプトに売られて、パロの侍従長ポティファルの奴隸になった。彼は、父に愛される息子として幸せに暮らしていたが、奴隸として売られてきたからといって、自分の身の上を嘆いていたのではない。むちで打たれないように、主人がさせることだけを適当にしたのでもない。

どれほど誠実に自分に任されたことをして、主人の心で家のことを顧みただろうか。ついには主人ポティファルに認められて、その家と全財産とを管理させられるほどだった。結局、ヨセフは神に選ばれて、ついにエジプト全土を支配する者になり、自分の家族と民族を救う偉大な人になったのである。

仮に、彼がこのように良い心を作つていかなかつたなら、適当に主人がさせる働きだけをしたはずであり、それなら、彼の人生は結局、エジプト人の奴隸として終わつただろう。しかし、ヨセフは自分が置かれた環境で毎瞬、神の御前に最善を尽くそうと絶えず努力し

て、良い心で見聞きして行ったので、神の御前に大いに用いられたのである。

このように、どのように心を遣って、自分の心を作っていくのかによって、その人の人生と、また、神の御前に用いられることに、途方もない違いが出てくる。心を美しく作っていくと、結局は、全家を通じて忠実な者と認められたモーセのように、神の御前で尊い働き人になるのである。

第2章

からだを形成しているもの

1. 肉の性質

人は初めから肉に属する存在として創造されたのではない。神は人類の先祖であるアダムを造られたとき、神と交わるものとして造られた。神のかたちに、土地のちりでからだを造って、その鼻に神のいのちの息を吹き込まれたので、人は初めは永遠のいのちを持った存在だった。

この時、アダムのからだは、老いたり病気にかかったり、朽ちたりするからだではなかつた。また、神はアダムに永遠の真理、すなわち、真と善と靈の知識だけを教えてくださつた。

ただし、その時、アダムの靈は完全ではなかつた。アダムは神のいのちの息を吹き込まれて「生きもの」になった。ところが、神に対して不従順の罪を犯すと、肉にすぎない者になつてしまい、その中に神の靈がとどまらなくなつた。

アダムの靈が完全だったなら、決して変わることがないので、肉に墮落することはない。しかし、アダムは自由意志を与えられたので、自分の選択によっては、肉の存在に変わることもあつた。

この自由意志については、この後でもう少し詳しく説明することにする。ここでは、神のいのちの息が吹き込まれていたアダムが、自由意志によって自ら真理に逆らうものを選んだので変わつてしまい、朽ちる肉の存在になつてしまつたことだけを覚えておけばよいだろう。

アダムは自由意志によって神の命令を破つて、善惡の知識の木の実を取つて食べたので、不従順の罪を犯したのである。〈創世記2:17〉に、神はアダムに「しかし、善惡の知識の木からは取つて食べてはならない。それを取つて食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と仰せられたとある。神が「食べてはならない。」と仰せられた実を食べれば、アダムは必ず死ぬが、それを食べるか食べないか、その選択はアダムにかかっているのだ。

もちろん、アダムの靈は神から与えられたものであり、これは永遠不滅なので、完全に消滅することはない。ただ、不従順の罪を犯してからは、神との交わりが途絶えて、靈の知識が供給されずに、世から肉に属するものだけが供給されるので、神が下さつた靈は、その活動がだんだん弱くなつて、結局止まるようになる。神から授かつた靈は、その種だけが残つた。すると世から真理に逆らうものがからだに入つてきて、靈を囲み、靈が全く活動できなくなつた。このような状態を「靈が死んだ」と表現するのである。

もちろん、アダムが罪を犯したからといって、その瞬間に突然、彼の中にあつた靈の知識が全部なくなつて、肉の性質だけが入つていくのではない。しかし、罪を犯した瞬間から、靈の知識を供給してくださる神から断ち切られたので、だんだん肉の性質に染まるのは、時間の問題だった。

それなら、肉の存在に墮落してしまったアダムに入ってきたもの、すなわち「肉の性質」とは何だろうか？

靈の生きた者として創造されたアダムに、神は靈の知識を満たしてくださった。それは善、仕え、柔軟、寛容、平和、秩序、相手の利益を求めるなどであった。また、天下万物を支配して従えるように、神に属する知恵と知識を与えてくださった。

ところが、アダムが不従順の罪を犯して肉の存在に墮落した後は、神との交わりができなくなり、靈の知識の供給が断ち切られた。その代わり、肉の性質に囲まれるようになつた。

この肉の性質とは、憎しみ、そねみ、憤り、欲、高ぶり、姦淫、自分の利益を求めること、無礼で蔑むこと、他人の過ちを口に出すことなど、靈である神のみこころと反対になる、醜くて悪いすべてである。

まさに闇の支配者である敵である惡魔・サタンが、このように肉の性質を人の中に吹き込み続けていくのである。肉に墮落した人に肉の性質がますます吹き込まれていくのだ。

このように人が肉の存在にだんだん変わっていくのは、人がもともと土地のちりで造られたからである。神が初めにアダムを造られたとき、土地のちりで形を造った後、いのちの息を吹き込んで、「生きもの」となるようにされた。それから、靈の知識を満たしてくださったのである。

ところが、罪を犯して以来、神から断ち切られて、肉の存在になってしまったアダムは、本来の土へ帰ってしまった。するとその属性も、元の土の属性へ帰ったのである。まさに、何を混ぜるのかによって、気質が変わってしまったのである。

農作業をしたことのある方はよく知っているだろうが、土は、その中にどんな成分を加えるかによって、土質が変わる。土に肥料を与えて良い成分を混ぜれば肥えた地になり、反対に、良くない成分をたびたび混ぜていけば、やせた土に変わっていく。

同じように、土地のちりで造られた人が肉の存在になってしまった後は、人に入るものによってその人の気質が変わっていく。

もう少し理解しやすく説明してみよう。ある人は、ちょっと気を悪くすることがあっても、我慢して理解しようとする。ところが、同じように気を悪くすることがあっても、我慢するのではなく、すぐに癪癩を起こす人がいる。

このような人は「憤り」という性質を自分の心の中にたびたび入れていくのである。そのようによく憤れば憤るほど、言葉つきも変わって、何でもないことにも怒って、声が大きくなる。たびたび憤りという成分を入れていくと、その土質自体がだんだん憤りの多い土質に変わっていくのである。

このような人は周りから「どうして何でもないことに怒るんですか？」と言われても、自分が発見できない場合が多い。いつも習慣的にそうしているので、「私がいつ怒ったの？」と聞き返したり、「私がわけもなくそうするのではない。怒るしかないから怒るんだろう」と言ったりするのだ。

すべて同じである。偽りをよく言えば、偽りの性質が強くなつて、人をよく殴れば、暴力的な人になっていく。行いだけでなく、見聞きすることも重要である。映画で暴力を楽しむ人は、その荒々しくて暴力的なことが、自分の中に植えられて、実際に暴力的な人に

変わっていく。どんな肉の性質を入れたかによって、人はそのとおりに変えられていくのである。

〈ヨハネ8:44 前半節〉に「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。」とある。アダムや御靈に属する人が、父なる神から靈の知識を供給されるように、肉の人は、敵である悪魔・サタンから肉の性質を吹き込まれる。だから、肉の人について「あなたがたの父である悪魔」と言うのである。

このように悪魔の子になり、肉にとどまっている人は、結局、さばきの日に悪魔と一緒にさばかれて、地獄の火に投げ込まれるしかない。だから、私たちが救われて天国に行くためには、自分の中にある肉の性質を取り出して、悪魔が与えるものをこれ以上入れてはならない。そして、神が下さる靈の知識を入れていかなければならない。

2. 肉の気質

肉に変わってしまった人は、その性質を維持して活動する力を得るために、肉を求め続けていかなければならない。しかも、時間が経つにつれて、ますますその性質の強いものを求めるようになる。

たとえば、人が活動して生きていくためには、食物を摂取しなければならない。食物の成分がからだを構成する要素になるのである。

ところで、果物、野菜、穀物、肉類など、人が摂取する食物も、時間が過ぎれば朽ちて変わる肉である。このような肉の食物から摂取された肉の成分は、肉に変わった人のからだと結びつく。それで、人の中に新しい肉の成分を作り出すのである。

この時、人がどんな物を食べるのかによって、どんな肉の成分が人の中に入ってくるのかが決められる。食べ物のうち毒々しくて悪いものをたくさん食べれば、その人の気質も強くて悪く変わるものである。

ところが、アダム以後、肉の存在に変わった人は、歳月が過ぎるにつれて、ますます肉の性質が強い食べ物、毒々しいものを必要とするようになった。エデンに住んでいた時は、果物だけを食べていたが、アダムが罪を犯した後は、野菜と穀物も食べるようになった。

そうするうちに、ノアの洪水の後は、肉類も食べるようになってしまった。肉の人に変わってしまった分、食べ物も肉の性質が強いものを食べてこそ、活動する力が供給されるようになったのである。

動物を見ても、草食動物はその性質が比較的おとなしい。一方、肉食動物は、それだけ性質が暴虐で残忍な傾向がある。前は草食だけをしていた人が、生きている動物をほふつて肉を食べるようになったということは、それだけ人が肉の性質に染まったという意味である。

しかし、洪水以後も、神がすべての動物を食べるよう許されたのではない。イスラエルの民には、律法によって忌むべきものを分けて、この忌むべき動物は食べないようにされた。忌むべきものは、それだけ悪くて毒々しい気質の強い動物である。

しかし、新約時代になって、主を信じる異邦人には食物に対する制限をもっと少なくされた。イスラエルの民に禁じられたものの中でも、血と絞め殺した物だけを禁じられたのである。

異邦人は、すでに数千年間、忌むべきものを食べて生きてきた。ところが、主を受け入れて神を信じる異邦人に、忌むべき食物を全部断ちなさいと言うと、異邦人がその通りに従うことがあまりにも難しくなる。だから、愛の神は守るべき基準を最小限に下げてくださったのである。

ただし、律法を守り続けてきたイスラエルの民には、相変わらず忌むべきものを禁じられた。しかし、イスラエル民族でない人も、忌むべき動物の肉を食べなければもっとよい。食べるからといって罪になるのではないが、食べなければ、それだけその動物にある悪くて毒々しい気質を受け入れないので、私たちが聖められて悪を捨てることに、もっと益になるのだ。

もちろん、〈第一テモテ 4:5〉に「神のことばと祈りとによって、聖められるからです。」とあるように、私たちが聖められるのは神のことばと祈りによるのであり、行いでなく信仰によるものである。しかし、私たちが肉と靈について靈的な知識を学んだだけ、神のことばと祈りで聖められる過程でも、できるならもっと益になる道を選んだほうがよいだろう。

このよう人がどんな食物を摂取するのかによって、その性分と気質の形成に影響を受ける。特に幼い子どもの時は、食べ物の影響をもっとよく受ける。母親がみごもった時に摂取する食べ物も、将来生まれる子の性分と気質に多くの影響を与える。生まれた子がどんな乳を飲んで育つか、すなわち、母乳を飲ませるのか、牛乳を飲ませるのかによっても、子どもたちの性分と気質が変わる。

動物の乳を飲むと、子どもにその動物の気質が加わる。以前、狼の乳を飲んで育った狼少年の話があった。彼はその行動や気質が狼そっくりだったそうだ。これはもちろん、育ちながら見て学んだ対象が狼だったこともあるが、その狼の乳を通して狼の気質が供給されたので、その気質ももっと似てしまったのである。

また、化学的に加工されて添加された食べ物も、自然の食べ物より良くないということは十分に考えられるだろう。

前に日本のテレビで、韓国のある少年のIQを検査した結果、何と210もあって有名になったことがあった。ところで、この少年の両親が子どもを育てた方法がとても印象的だった。子を宿した時から、親が心を穏やかにして、憤らないでけんかもしなかったというのだ。食べ物も良い食べ物、頭脳の発達に良いと言われている物を選んで食べたそうだ。そのように育てると、この子も天才と認められただけでなく、その下に生まれた弟たちも天才と言われたそうだ。

また、ユダヤ人はどうだろうか？ たとえ旧約の律法ではあっても、神の戒めを徹底的に守り行うユダヤ人は、世界的に賢くて優れた民族である。歴代のノーベル賞受賞者だけでも、ユダヤ人から一番たくさん出たと言われている。

このようなことを考えると、子育てをする時も、みごもって養育するすべての過程で、

肉の性質を避けるほど、優れた子どもになることがわかるだろう。それには、食べ物だけ肉の性質が少ないものを食べさせればよいのではない。

さらに重要なことは、子どもが育ちながら見聞きして学ぶものも、悪くて醜いものでなく、善で美しいものに接するようにしなければならない、ということである。子どものからだと思いと心、あらゆる分野を肉の性質から最大限守ってあげれば、優れた子に育てることができる。真理にあって神の恵みで育てれば最も良いのだが、世の中からも肉の性質を受け入れないほど、善良で賢い子どもになるのである。

先に、人が肉の存在に変わったので、肉の食物を取ってはじめてエネルギーが供給され、時間が経つにつれてだんだん肉の性質の強い食物がほしくなると述べた。ところで、このように肉が肉を必要として、ますます肉に染まっていくことは、人と食物の関係だけではない。人がこの地上で生きていくためには、精神的にも肉の性質を追い求めて、そうしながら、だんだん肉的な姿に堕落するのである。

人類の歴史で「文明」について考えると、このような事実がよくわかる。人は理性的な能力を働かせて、必要なものを発明して発見してきた。人と人が交わるために言語と文字を作り出したし、必要な技術と知識、文化を発達させていった。

そして、言語と文字を通して自分が作り出した技術と文化を分かち合って、後代に伝えることができた。だんだんと高い水準の文明が発達してきたのだ。

ところが、人の理性も、人の言語も、結局は肉であり、人が発達させた文明の産物も、すべて肉である。人そのものが肉的な存在なので、人が作り出す産物も、結局肉にすぎない。

肉の人が文明を発達させながら追い求めるものは何だろうか？ それは肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢である。

〈第一ヨハネ2:16-17〉に「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」とある。

人間が作り出した文明は結局、五感を満足させるために快樂を求めて、名誉と権勢、知識を求めて達成感を味わおうとするものにならざるをえない。しかも、時間が過ぎるほど、ますます感覚的で刺激的なものを求めていこうとする。

だから、文明の発達につれて、世の風潮はますます肉の性質を追い求めていくので、情欲的になり、放蕩に堕落していくのである。そうするうちについにその惡が満ちて、神の公義に従ってさばきが臨み、文明 자체が滅びる場合もある。

歴史的に強大国を見てもそうである。初めは健全で、偉大な理想と目標をもって建てられた国だったとしても、強大になり、富と権勢が大きくなると、だんだん腐っていき、堕落するようになる。

〈ヤコブ1:15〉に「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」とあるように、肉に属することを手に入れようとする欲が肉の性質に働きかけ、罪を犯すようになり、それが満ちると最後には死を招く。

このように肉は朽ちて変わるものであり、むなしくて何の役にも立たないだけでなく、

肉の性質が必要としているものも、肉の性質によって作られるものも、結局はすべて肉である。肉の人が摂る食物も朽ちて変わる肉であり、肉の人が見て聞いて味わうものも肉であり、肉の人が作り出すものもみな肉である。

〈ヨハネ 3:6〉に「肉によって生まれた者は肉です。御靈によって生まれた者は靈です。」というイエス様のことばのように、肉によって生まれたすべてが、結局むなしい肉であるだけである。

しかし、「御靈によって生まれた者は靈」と書いてある。人が聖靈を受けて新しく生まれると、その時からは聖靈の働きに従って靈を生んでいく。このように靈を生んでいく人は、御靈に属して、永遠の天国で生きる資格を得るようになる。永遠のいのちを得るのである。

病気にかかって、老いて死んで朽ちるからだが、神の恵みと力で剛健なからだになる。罪と惡と真理に逆らうものでいっぱいだった心が、善と光と愛で満たされた心に変わる。

言葉も、肉の人が使う言葉でなくなる。肉の人が使う言葉は、時間が経つにつれて変わってしまい、互いに刺して、さばいて、傷つける言葉であり、互いに誤解が生じやすい不完全な言葉である。しかし、御靈によって靈を生んでいく人は、悪くて偽って変わる言葉でなく、聖なる真実で美しい言葉を使うようになる。

このように聖靈の働きを慕う人は、御靈に属するものを追い求めていくので、「御靈によって生まれた者は靈」だと書かれているのである。考えること、心にいだくこと、話すこと、行うことなど、あらゆる分野において、真理で満たしていくので、御靈の人に変わっていく。

このように御靈によって靈を生んでいき、将来、天国に行けば、私たちは完全になる。からだは重さがあるようないようで、美しい完全な御靈のからだになり、心はいつも幸せと喜び、感謝と愛があふれる。

天国の言葉は新しい言葉で、互いに話をするだけでもとても幸せで、恵みがあふれる。また、天国では、心にあることを表現する力が足りなくて、間違って伝えたり、誤解を招いたりすることもない。実際、天国では互いの心がそのまま伝わるので、あえて言葉で表現しなくとも、交わることができるのである。

3. 神はなぜ土で人を造られたのか

アダムが初めに「土地のちり」で造られたので、人は自分の中に肉の性質を受け入れるほど、その気質がだんだん肉に変わってしまうと説明した。それでは、なぜ神はアダムを土で造られたのだろうか？

神は靈であられるので、血肉のからだがなく、天の軍勢と御使いも神のように靈だけである。ところが、アダムを造られる時は、神のかたちに造られたが、ただ靈だけで造られたのではない。あえて土でからだを造られて、その中にいのちの息を吹き込まれた。

御使いのように靈だけで造ればもっと簡単だし、からだを造っても、加える成分によって変わる土よりは、あまり変わらない金や鉄のような成分で造ってもよかつたのではないだろうか？

しかし、このようにアダムを土で造ったのは、人間耕作の目的を果たされるためである。神が人間を耕される理由は、神の心を理解して愛を分かち合う、まことの子どもを得るためにある。

ところが、アダムが初めに造られてエデンの園に住んでいた時は、まことの子どもと言えなかつたのだ。神は、アダムにただ善と真理だけを教えられたので、エデンに住んでいた時のアダムは、罪と悪が何か、不幸と苦しみが何かがわからなかつた。エデンには朽ちたり変わつたりするものがなかつたので、アダムは死の意味もよく知らなかつた。だから、これと反対になる善や幸せ、愛、永遠のいのちなどもよく悟れなかつたのである。

たとえば、食べ物がなくて飢えたことがある人でこそ、食べ物があることに感謝する。いつもおいしい物を食べていると、それが当然だと思って、特に感謝することができない。悲しみがどんなものなのかを体験した人だけが、喜びが良いものだと知って、病氣で苦しんだ後に、健康の大切さを悟る。

アダムも安らかに生きてはいたが、反対になるものがわからなかつた分、まことの幸せも、喜びも感謝も感じることができなくて、まことの愛も感じられなかつたのだ。

もちろん、創造主の神は、初めから善と悪、幸せと不幸、喜びと悲しみなど、すべてをご存じである。しかし、人は限界がある被造物なので、相対的なことを体験してみてこそ、まことの幸せと感謝が悟れる。

赤ちゃんがお母さんの胸でにこにこと笑うとき、幸せがわかって笑うのではない。かわいい仕草をする時も、親に感謝してそうするのではない。この時、親の立場からは、自分の子が何も知らない状態でいつまでもいてほしいと思わないだろう。たとえ世の悲しみと苦しみを体験しなければならないとしても、大きくなつてまことの幸せと喜びを知って、親の心を理解して、愛を分かち合いたいと願う。

神も同じように、アダムがまことの幸せも知らなくて、まことの喜びと感謝も、愛も知らないまま永遠に生きることを願われなかつた。それで、善惡の知識の木を置かれたのであり、アダムが肉に属するすべてを体験するようにされたのである。肉の世で悲しみ、痛み、死などの不幸を体験した後に、再び神と交わる存在に帰り、靈がどれほど良いものなのか、心から悟れるようにされたのだ。

アダムが御使いのように靈だけで造られたなら、肉に属することが体験できなかつただろう。したがつて、肉がどんなものなのか、さまざまな体験をした後に、再び神と交わる存在に変えられるためには、加えられる成分によって性質が変わる土で造らなければならなかつたのである。

これで私たちはなぜ人が土で造られたのか、なぜ私たちがこの地上で肉を経験した後に御靈の歩みに入らなければならないのかが悟れた。

親が子どもに勉強をたくさんさせて、いくつも塾に通わせると、子どものほうでは大変つらく思える時もある。「どうしてお母さんは、こんなふうに苦しめるんだろうか?」と恨めしく思うかもしれない。しかし、物事をわきまえるようになって、親の心がわかる子ど

もは「自分のためなんだな」と悟るので、感謝の心で言うことを聞く。

そのように人が神の心を悟ると、「どうして善惡の知識の木を造って、人が苦しむようにさせられたんだろうか」と神を恨むのではない。かえって私たちが人間耕作の過程を通るようになって、肉に変わってしまった人を救うためにひとり子まで渡してくださった神に、心から感謝するようになる。

また、生きていく間にどんな訓練を受けても、「生きるのがどうしてこんなにつらいのだろうか」とつぶやくのではない。この地上の耕作をよく受けて、まことの子どもに変えられると、永遠の天国の幸せが味わえることがわかるので、どんな苦しみにあっても、善と真理を追い求めて勝ち抜いていくのである。

ところが、神を信じているという人も、皆がこのように御靈の人にすみやかに変えられていくのではない。ある人は、主を受け入れて聖靈を受ければ、その時からこまめにみことばを学んでそれに聞き従い、罪と惡を捨てていく。

しかし、ある人は、聖靈を受けて同じようにみことばを学んでいるのに、直ちに聞き従わないので、信仰の成長が遅れる場合がある。本人も早く御靈の歩みに入りたいけれど、うまくいかないということである。

それでは、こういう違いがどこから出てくるのか、今から調べていく。

4. 良心の違いはどこから來るのか

動物とは違って、人には心がある。もともと神から造られたアダムの心は、真理だけで満たされている御靈に属する心だった。それで、心そのものが靈だった。

アダムが罪を犯してからは、人の靈が死んでしまい、人の心には真理に逆らうものがどんどん入っていくようになった。この真理に逆らうものが、もともとあった真理の心と混ざって、新しい心を作る。そのうちに、それなりに正しいか正しくないかをわきまえて、正しいと思うことを追って生きようとする「良心」というものが生まれた。

この良心は人によって違う。ある人は良心が正しくて、真理のとおり生きようとする心が強いけれど、ある人は良心が悪くて、真理を追い求めるよりは、自分の利益を追って生きるのである。

たとえ主を知らない世の人であっても、良心が正しい人は人の道に従って生きようと努める。人間らしく価値ある生き方を追い求めていく。

小さい子どもでも、ある子どもは、自分がすべきことをしっかりしようと努力する。学校生活も誠実にして、勉強も一生懸命にして、行いと容姿も正しいのである。

このような子どもは、自分の心とからだを支配する力がそれだけ強く、おとなになっても自分を治めることができる。

ところが、ある子どもは良心の声を無視して、肉の願うことに従っていく。「怠けたい」「学校に行かないで遊びたい」「眠りたい」「食べたい」「異性とつき合いたい」「見てはい

けないものを見たい」「飲んではいけないものを飲みたい」、このように肉の願うことを求めていくのだ。

もちろん、この子どもの心にも、初めは「こうしたらいけない」という良心の声がある。勉強を一生懸命したい、まじめな子になりたい、良い生徒になりたいなど、このように善を追おうとする心がなかったのではない。しかし、良心の声に従って自分を治める力がすぐつかないので、ただ肉の願うことに自分を任せてしまうのだ。

このように肉の願うことに従っていく子どもは、将来どうなるだろうか？　人の道と本分からますます遠ざかって、他の人から後ろ指を指される恥ずかしい人生を送るようになる。情欲を追って、本能を追って、人の価値や本分とはかけ離れた、獸にすぎない生き方をするのだ。このように、良心に従って自分を治めることのできる力、自分の人生を価値あるものにしていける力には、人によって差がある。

それでは、このような違いは、どこから来るのだろうか？

1) 親から

人の精子と卵子には、親の気が全部入っていて、子どもは親の気をそのまま受け継ぐと述べた。

良心も同じである。親が善を追い求めて生きていて、心の地が良い人ならば、子どもも良心が正しい子に生まれる確率が高い。このように「どんな親から生まれたのか」「どんな気を受け継いで生まれたのか」が、人の良心の最も基本的な条件になる。

2) 環境から

たとえ良い気を受け継いで生まれても、劣悪な環境で育ち、その中で悪いものを見聞きして入力するようになったなら、それだけ良心が汚れやすい。一方、善なるものを見聞きして良い環境で育った人は、比較的正しい良心を持つ。

したがって、ひょっとして言うことを聞かないでぐれしていく子を持った親がいたとすれば、親は子どものせいにする前に、まず自分を顧みなければならない。「はたして私はどんな心だったのか」「この子にどんな心を伝えたのか」「この子が育つとき、どんな手本を見せたのか」など振り返って、悔い改めなければならない。

しかし、子どもの良心が全面的に親のせいだけなのではない。同じ親のもと、同じ環境で育っても、自分がどのように努力してきたかによって、人の道が完全に違ったりもするからである。

3) 自分の努力

どんな親から生まれて、どんな環境で何を見聞きして学んだのか、そして、どのように努力してきたのか、このような条件がみな合わさって、人の良心を作る。その良心によって、人が自分のからだと心を従わせて、人の道にかなって生きる力が違ってくる。このように、自分の努力が良心を作る三番目の条件になる。

「自分の良心をどう作ってきたのか」、これは信仰生活にも、大きな影響を与える。みことばを学んで、罪と惡を捨てようとしても、自分を真理に従わせようとしても、過去に自

分をどのように作ってきたのかによって、それが簡単にできる人もいて、難しい人もいる。

神を信じる前、意志が弱くてよく心が移り変わった人は、信仰生活も似ている。無気力で、怠けて無秩序な生き方をしていた人が、主を信じて聖霊を受けたからといって、突然180度変わって勤勉な人になるのではない。

学校に通っていたとき、勉強しなければならないのに、遊びたくて休みたい肉の願いに従っていったり、無節制で義務を果たさなかつたりした人は、信仰を持ってもそのような姿になりやすい。他の人はより高い信仰に向かって熱心に進んでいくのに、いつも入り口で止まっていて、恵みを受けてちょっと満たされて走って行くかと思つても、何かあればまた座り込んでしまう。

しかし、世で自分がすべき道理をわきまえて自分を治めていった人は、真理にあっても心を守ることがそれだけやさしい。みことばを聞いたら何でも心に留め、自分をそのみことばに従わせていくことが、そんなに難しいとは感じられない。

神を信じる前の自分のことを考えてみよう。良い親から生まれて、良い環境で育つて、自分をよく従える努力をしてきたならば、とても感謝なことである。それだけすみやかに真理に変えられやすい

しかし、もしそうでないならば、どうすべきだろうか？ 「主を受け入れる前に、正しい良心を追つて生きられなかつたので、私は信仰生活をしても、どうせちゃんとするのは難しいだろう」とあきらめてしまうべきだろうか？ そうではない。なぜなら、神の子どもたちは聖霊の力を受けることができるからだ。

〈マルコ9:23〉に「するとイエスは言われた。『できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。』」とある。また、〈ピリピ4:13〉には「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」とある。

人には自分で自分を変える力がないとしても、神には何でもおできになる。私たちが自分に欠けているところが何か発見して、信仰で神の御前に祈り求めながら努力するなら、神がその信仰と行いをご覧になり、恵みを与えてくださる。

意志が弱くてよく変わる人を真実の人に、怠けて弱気な人を勤勉で熱心な人に変えてくださる。悟ったみことばを心に留めないで聞き流してしまう人も、聖霊の力で心に留めるようにされ、みことばどおり行えるように導いていかれる。

それで、〈第二コリント5:17〉にも「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とあるのだ。

それまで自分がどんな姿であったとしても、これからは神の恵みと力によって、自分を新しく作り出していく。肉に負けて肉の願うことに従つて生きるのではなく、靈を追い求めて自分を変えていかなければならない。万物を新しくする主の力によって変えられて、すみやかに御靈に導かれなければならない。

5. からだの発達段階：見て、感じて、行う

人は初めからおとなとして生まれるのではない。赤ちゃんで生まれて、幼児期、児童期、

少年期、青年期を経て、ついにおとなになる。私たちが一人前のおとなになるためには、このような成長段階で、肉の秩序に従って体験しなければならない過程がある。

精神的や肉体的にも、それぞれの年齢に応じて適切な体験と訓練をしなければならないのだ。乳飲み子に少年期の体験をさせることもできないし、少年がおとなのような教育を受けることもできない。

一方、幼児期に習得していなければならないことが習得できなくて、時間が経って青年になったとき、はじめて幼児期の体験をするのもやさしいことではない。

成長の段階で、精神と肉体の各分野が発達する時期が決められているからである。成長段階は、大きく三つの段階に分けられる。

最初の段階は「見る段階」である。

目で見るものを見はじめ、におい、音、味など五感を通したすべての刺激を、本能的に単純に受け入れるだけの段階である。赤ちゃんを見れば、刺激が与えられるとき、その刺激に対して何かを感じたり、考えて反応したりするのではない。ただ反射的に反応する。

たとえば、赤ちゃんが消化不良で具合が悪くなったとしよう。すると「ああ、僕が今、いたんだミルクを飲んでこうなったんだな。次からは注意しなくちゃ」と思ったり、「ママはどうして僕にいたんだミルクを飲ませたんだろう。腹が立つ」と恨んだりしながら泣くだろうか？　ただ痛みがあるから、その苦しみに反応して泣くだけである。

そのほかにも、熱さと冷たさ、不快感と痛み、空腹と渴き、暖かさと安楽さ、このようなことに一つ一つ接しながら、本能的に反応する。

見る段階を過ぎれば、次は「感じる段階」に入る。

五感を通して体験したものについて、自分なりの感じを持ち、その体験と感じを記憶の中に入れていくのである。

感じる段階の後は「行う段階」がある。

見て聞いて、体験して感じたものを土台に、考えて、意志を働かして、いろいろなことを決定していくのだ。

たとえば、熱いアイロンでやけどをした子どもは、「あんなものを触ったら熱かった」という記憶と感覚が同時に働き、次はアイロンに触らないで避ける。

ところで、このような段階はスパッと正確に分けられるのではない。感じる段階でも見ることができるし、行う段階でも見て感じられるのである。

このそれぞれの段階で、どのように見て感じたのかが、どのように行うかを決定する。これについては「たましい」を説明するとき、詳しく説明する。ここでは、私たちが人の成長過程に合わせて、見るべきこと、感じるべきこと、行うべきことを、その時期に必ず体験しなければならないことだけを覚えておけばよいだろう。

6. 肉の欠如

このような人の成長過程には、それぞれ経なければならない段階があって、その段階に

最も適した環境で体験し、訓練を受けていかなければならない。ところが、時には経なければならぬ段階を飛び越えてしまう場合がある。

見る段階で当然体験すべきことが体験できなかつたり、感じる段階で他の人がみな感じたことを自分だけが感じられなかつたりして成長した場合があるのだ。

こうなると、おとなになっても問題が現れるようになる。他の人に比べて何かが欠けている面が現れるのだ。人が誰でも備えるべき知的な力、肉体的な力などが欠けていたり、情緒的にふつうの人とはかけ離れた感情を持ったりする。これらをまとめて「肉の欠如」と言う。

たとえば、母親に愛されて、細やかに世話をされて育つべきだった年齢で、それができなかつた人は、情緒的に神経質で不安定なことが多い。不遇な環境で虐待されて育った人は、後で残忍な性格になり、生き物を虐待したり、自分を虐待したりする。

また、子どもの時は、同じ年頃の友だちと交わって、時には葛藤を経ながら社会性を育てていかなければならない。この時、過保護のため適切な体験ができなかつた人は、後で人間関係がうまくいかない場合が多い。自己中心的な思考や利己的な性格に固まって、他の人から除け者にされたり、社会生活に適応する能力が劣つたりする。

また、愛情過多のゆえ、肉の欠如がある場合もある。自分の力ですべき年齢に親が体を洗ってあげて、着せて食べさせてあげながら、「よし、よし」と育てた子は、柔弱で依存的な性格に育つ。それで、当然自分ですべきことも、他の誰かが代わりにしてほしいと思うのだ。

このように育ち、肉の欠如がある人は、世で成功したり認められたりすることも難しい。たとえば、他の人はみな時間に合わせて学校や職場に行くのに、肉の欠如があるなら、少し疲れると、すぐ遅刻したり欠席したりする。

他の人は、何としてでも自分を打ちたたいて従わせて、認められるほどの実力を積み上げていくのに、遊びたくて、眠たくて、我慢できない。自分をだまして害を与えようとする悪い人々に会っても、対処する能力がない場合もある。肉の欠如を自分でも感じるので、すべてのことに対する自信がなくて大胆になれない。このような人がどうして世で認められて成功できるだろうか？

だから、このように適切な成長過程を踏まなかつたので肉の欠如ができる時は、その人の人生に深刻な結果を招くこともあるのだ。幼い時は飛び抜けていた子どもが、成長しながら肉の欠如が生じて、飛び抜けた資質を失う残念なケースもある。

韓国に有名な天才少年がひとりいた。1歳で千字文をマスターして、英会話ができた。3歳で大学の数学を勉強した。すると両親はこの子を同じ年頃の子どもとつき合わせずに、高校生、大学生とつき合わせた。子どもとして体験しなければならない環境でなく、おとの環境で育つようにしたのである。

しかし、この子がいくら賢かったとしても、肉体的な力や感性的な面までおとの水準になつたのではない。単に知的な能力が優れていただけである。ところが、両親はこの子を単に賢いという理由だけで、おとの環境にいるようにしたのである。子どもが自分の年齢で経験すべき段階を踏まないようにしたのだ。

その結果はどうなっただろうか？人々はその子が世界的な人物になって、国を輝かせるだろうと期待したが、結果は全然そうではなかった。時間が経つにつれて、天才少年についての記憶は人々の脳裏から消えていった。

もし両親が肉の秩序についての知識があったなら、その子の知能を最大限、啓発しながらも、成長しながら体験すべき過程を全部体験するようにしただろう。そうしたなら、人々の期待のように世界的な人物に育つこともできたのに、まことに残念なことである。

人が見る段階、感じる段階、行う段階を正常に歩んできた時は、それだけ正しいか正しくないかをわきまえて、自分を治める力がある。正しいことが何かを学ぶと、自分の思いと行いをコントロールして、正しいほうを選んで行える能力を持つようになる。

ところが、正常な段階を踏まなかつたので、肉の欠如がある人は、それだけ御靈の歩みに入るのにも差し支える。肉の欠如があるだけに、人が靈に支配されるのではなく、たましいに支配されるからである。

これから「たましいの分野」で詳しく説明するが、たましいを支配する存在は、まさに敵である悪魔・サタンである。肉の欠如があるだけに、たましいに強く支配されるので、それだけサタンのしわざを受けることになり、サタンは御靈の歩みに入るために行うべきことを行わないように働きかける。

たとえば、祈らなければならないことがわかったとする。それまで自分をよく治めてきた人は、「何時に祈りに行こう」と決心すれば、ちょうどその時間に決心したとおり行う。主を呼んで祈りながら、集中しようとすればすぐ集中できて、御靈に導かれて祈ることができる。

ところが、肉の欠如がある人は、自分が決めた時間になんて、祈りに行くのがいやになる。テレビを見ていたなら、ずっと見ていたくなるし、家で横になってちょっと休みたくて、祈ろうと定めた時間になんて、後に延ばすばかりである。また、祈るために集中しようとしても、雑念が次々浮かんで制しにくい。

その他のことも同じである。聖書を読んで礼拝をささげることも、みことばどおり聞き従って変えられることも、肉の欠如のない人は心に決めたとおり行うことが比較的やさしい。憎んではならない、高慢になってはいけない、失望してはならない、謙遜でありなさい、喜んで感謝しなさい、このようなみことばを学ぶと、ただ「アーメン」と聞き従うなら、すみやかに御靈の歩みに入る。ところが、肉の欠如がある人は、昔の習慣のように楽に生きたがるので、「アーメン」と言うことが難しい。

今まで自分をどのように作ってきたのか、これで照らすことができただろうか？もし、何か肉の欠如があつて、これまでみことばどおり行うのに差し支えていたことがわかつたなら、これからどうすべきだろうか？「私には肉の欠如があつて、御靈の歩みに入るのが難しい」とそのままあきらめてはいけない。

今からでも欠けている部分を満たしていかなければならない。最も大切なことは、火のように祈って、神の恵みと力を受けることである。そして、ささいなこと一つからでも、御靈の願うことに聞き従って行えるように努力していくことが、非常に大切である。

このように努力していくと、初めは変化が遅いように見えるかもしれない。それでも気を落としたり、あきらめたりせずに、また祈って再び努力すれば、時間が過ぎるとだんだん変えられていく。からだがたましいに支配されて、サタンが願うとおりに行うのではなく、たましいとからだがどちらも靈に支配されて、神の願われるとおりに行えるようになる。

私たちが過去にどんな環境にいたとしても、それによって何か肉の欠如ができたとしても、今から努力して変えられればよいのである。神の恵みと力で、聖靈に助けられて、そして、私たちの意志で努力していくと、欠けている部分が十分に満たせる。

〈マルコ 10:27〉に「イエスは、彼らをじっと見て言われた。『それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。』」とあるとおりである。

先に説明した良心の形成や、ここで肉の欠如を説明したのは、ただ私たちに欠けていることを発見して終わりにするためではない。たとえば、学生が成績を上げるために、今までどおり一生懸命に勉強するだけでなく、特にどの科目が弱いのかを知って、それを集中的に攻略することが必要である。成績が良くない科目を得意な科目ほどに成績を上げれば、全体の順位も上がる。

靈的にも、自分に欠けている部分を発見したなら、その部分を神の力によって完全にして、御靈の歩みに入る近道を手にするようになる。さらには「全く聖なるもの」とされるのに、大きな力になれるのである。

第3章

肉に関する用語

ここでは真理に逆らう肉をすべて脱ぎ捨てて、御靈に属する人になる方法について学ぶ。ところで、脱ぎ捨てるべき肉について理解するためには、今から新しい用語を学ばなければならない。からだ、からだの行い、肉、肉的なこと、肉の行い、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢など、さまざまな用語を知らなければならないのである。

靈的な意味を学ぶ前は、からだと肉が似ているようであり、また、からだの行い、肉的なこと、肉の行いなどもあまり違わないように思われる。しかし、このような用語には確かにそれぞれ意味があって、私たちがその意味を正確に知って聖書を読むと、救いに関する概念ももっと正確にわかって、聖められる方法ももっと具体的にわかるのである。

1. からだ / からだの行い

まず、からだとからだの行いについて調べてみる。

〈ローマ 8:13〉に「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御靈によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とある。「御靈によって、からだの行いを殺すなら、生きる」というとき、「生きる」とは、救われることを意味している。

からだの行いが何かを知ってこそ、からだの行いを殺すことができる。私たちが座ったり横になったりすること、歩いて食べたりすることなど、からだでする行いをやめなさい、という意味だろうか？ そうではない。

ここで「からだ」とは、私たちの身体を意味するのではなく、「神が人に植えつけられた靈の知識が抜けていった後に残された、肉に属するからだ」のことである。

このような「からだ」の靈的な意味を理解するためには、最初の人アダムまでさかのばらなければならない。神は最初の人アダムを造って、彼にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は「生きもの」となった。赤ちゃんが生まれたばかりの時は、頭脳があってもその中には何の知識もないように、造られたばかりの時のアダムの心も、何の知識もない白紙のようだった。

ただいのちの種と靈そのものがあつただけで、そこに神が真理の知識を一つ一つ植えつけられた。それでは「真理の知識」とは何だろうか？ これは「光と愛、善、真実、義、知恵など、神の心に似せられたさまざまな知識」のことである。アダムに真理の知識が満たされたということは、すらすら覚えて頭だけで知っているという意味ではない。

真理そのものがその中に完全に満たされて、心と思いと行いが全部真理であるとき、これを「真理の知識を所有している」と言えるだろう。アダムの心には、このように真理の知識が植えつけられて、彼は神のかたちに似せられた万物の靈長として、地球の万物だけでなく、第二の天のエデンまでも治めて守ることができた。

ところが、人が想像できないほど非常に長い歳月が過ぎると、アダムは神が言わされたことを心に留めずに、不順従の罪を犯してしまった。神が禁じられた善惡の知識の木の実を取って食べたのである。

「罪から来る報酬は死」という靈の世界の法則に従って、罪を犯したアダムの靈は死ぬようになり、その後、アダムの心からは、だんだん神が植えつけてくださった真理の知識が抜けていった。真理の知識を与え続けてくださった神との関係が断ち切られると、アダムがもともと持っていた真理の知識までも、だんだん抜けていくようになったのである。神が下さった真理の知識が抜けていくと、アダムの心には、真理の知識の代わりに、敵である悪魔・サタンが植えつける真理に逆らうものが入ってくるようになった。

ふつう「からだ」と言うと、人の身体のことを思う。ところが、「もし御靈によって、からだの行いを殺すなら、」というみことばの「からだ」とは、靈的な意味で、真理の知識が抜けてしまった状態の人のからだ、真理に逆らうものに染まってしまった、肉に属するからだのことである。

たとえば、ある液体が入ったコップがあるとしよう。これを人にたとえると、コップは私たちのからだで、コップの中にある液体は靈と言える。同じコップであっても、その中の内容物によってコップの価値が変わる。もしコップの中にきれいな水や飲み物が入っているなら、このコップは価値あるコップだが、汚物が入っているなら、汚いコップになる。

同じようにアダムのからだも、真理の知識が入っていた時は、価値あるからだで、不滅のからだだった。老いることも、死ぬこともなく、朽ちることのない、美しく輝くからだだったのである。その行いも、この地上のどんな王族とも比べられないほど高貴で、気品ある行いだった。

しかし、アダムの心から真理の知識が抜けてしまい、その中に真理に逆らうものが吹き込まれたとき、人のからだはひどく価値のないものになってしまった。肉に属するすべてがそうであるように、真理に逆らうものと結びついた人のからだも、老いて、病気にかかって、死んで、朽ちて消滅するからだになってしまったのである。

また、このように肉に変わってしまった後に現れるからだの行いは、からだの中にある真理に逆らうものから出る行いである。たとえば、怒るとげんこつを振り上げたり、ドアをバーンと閉めて、物を投げたりする人もいる。話をするたびに悪口を言う人もいて、異性に対するとき、端正にではなく、情欲的な目つきと表情、身振りをする人もいる。

ある人は、目下の人に対するとき、肩をそびやかして、命令して指示する横柄な口調でものを言う。これらもすべて、自分の中に真理に逆らうものが詰まっているので、その結果として出てくるからだの行いである。

ところで、からだの行いには、明白な罪の行いだけでなく、神の御前にふさわしくないすべての行いも含まれる。ある人は、話をしながら習慣的に相手をパンパンたいたいたり、無意識のうちに人に向かって指を差したりする。熱中して話をしていると、声が高くなつて、まるでけんかしているように聞こえる人もいる。

这样的なことは、ある面ではささいなことのようであり、これらのことを持てないからといって、死の道へ向かうのではない。しかし、根本的には、このようなこともみな真理に逆らうものがからだに結びついて、行いに現れた結果である。

ただ真理の知識だけで満たされていたイエス様は、この地上におられたとき、どんな行いを見せられただろうか？ また、昔の信仰の人々はどんな姿だったただろうか？ その心が真理の知識だけで満たされると、惡はどんな惡でも現れないことはもちろん、品があつて完全な行いが現れるのである。座る姿、歩き振り、話し方や表情さえも、真理によって美しく整えられていて、毎瞬その生き方そのものが神に喜ばれるほどの香になり、御前に立ち上るのである。

〈第一ペテロ 1:15〉に「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。」とあり、〈ピリピ 4:8〉には「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」とあるとおりである。

2. 肉 / 肉的なこと

アダムの心からいのちの知識である真理が抜けてしまったので、その時から人のからだは肉に属するからだになってしまった。このように、肉に属するからだになったので、このからだの中に罪の性質が入り、それが行いとして現れるのである。それで、罪を犯すようになる。

〈ローマ 8:13〉を見ると、「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御靈によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とある。ここで「死ぬ」とは、永遠の死、つまり、地獄を意味する。

もし、ここで言う「肉」が私たちの血肉のからだを意味するとしたら、主を信じる聖徒も血肉のからだを持って生きているので、皆が地獄に行くはずだという意味になる。だから、ここで「肉」とは、単に身体を意味するのではなく、靈的な意味があるのである。

また、〈ローマ 9:8〉には「すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。」とある。この時も、「肉」が血肉のからだを意味するなら、私たちも神の子どもでないという意味になる。だから、ここでも「肉」という単語が靈的にどんな意味なのかを悟らなければならない。

聖書を見ると、このように靈的な意味の「肉」という言葉がたくさんある。

〈第一コリント 3:1〉には「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御靈に属する人に対するように話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。」とあり、続く〈第一コリント 3:3〉には「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではあ

りませんか。」とある。ここで「肉に属する人」とは、その心にねたみや争いがある人、キリストにある幼子のようだと書いてある。これは、信仰が少ないことを意味する。

この時の「肉」の靈的な意味は、「真理が抜けてしまった人のからだと、罪の性質が結びついたもの」である。敵である悪魔・サタンがさまざまな罪の性質を人に植えつけると、この罪の性質がからだに結びつくのである。

次に、〈ローマ 8:5〉には「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御靈に従う者は御靈に属することをひたすら考えます。」とある。ここで「肉的なこと」とは、「からだに結びついた罪の性質の一つ一つ」である。

たとえば、憎しみ、争い、そねみ、ねたみ、偽り、ずるがしこさ、高ぶり、憤り、さばき、罪に定めること、姦淫、欲などを「肉的なこと」と言う。

ところで、聖書で「肉」という単語がいつもこのように靈的な意味だけで使われているのではない。〈第一コリント 15:39〉「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。」とある。この時の「肉」とは、罪の性質とからだが結びついたものではなく、人の血肉のからだを意味している。

このように、同じ「肉」という単語で、ただの人の身体を意味する時もあるので、聖書を読むとき、靈的な意味の「肉」なのか、でなければ、身体を意味している「肉」なのか、文脈によって見分けなければならない。

からだに罪の性質が結びついていると、人は思いと心で罪を犯すだけでなく、結果的に行いとして現れて罪を犯すようになる。たとえば、心に偽りの属性があれば、それが現れるような状況になると、相手をだます言葉と行いが出てくる。

ところで、〈ローマ 8:5〉の「肉的なことをもっぱら考えます。」とは、人が行いで罪を犯すのではなく、心の中だけで罪を犯すことである。たとえば、他の人が持った宝石を見て、実際に盗むのではなく、「あれがほしい、こっそりと持ってきてたい」と思って、むさぼりを心にいだいたら、すでに罪を犯したのである。

世の人々はこのように心だけで罪を犯したことは罪だと思わないし、処罰されることもない。しかし、神はうわべではなく心をご覧になる。敵である悪魔も、肉の人の心がわかるので、肉的なことに関しても訴えることがある。

〈マタイ5:28〉で、イエス様も「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」と言われた。〈第一ヨハネ3:15〉には「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者の中に、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」とある。

このように、心で罪を犯すということは、すでに行いに現れる土台を作った、ということであり、心で罪を犯す人は、行いで罪を犯す人と同じように罪人なのである。イエス様が十字架を負わされたとき、いばらの冠をかぶって、血を注ぎ出してくださったのは、まさにこの肉的なことを贖ってくださるためだった。

だから、私たちが聖められて完全な者になるためには、肉的なことを捨てて、思いでも罪を犯してはいけないし、究極的には、すべての罪の性質そのものを引き抜かなければな

らない。

ところで、「肉」とは、からだと罪の性質が「結びついた」ものだと述べた。アダム以来、先祖から受け継いだものと、自分が受け入れた罪の性質が、心の奥まで入っていて、からだと結びついているので、これを引き抜くのは、人の力だけでできるのではない。

憎しみ、そねみ、欲、姦淫、これらのものが度々思い浮かぶとき、これらを自分の力で捨てることはやさしくないのである。本人が努力するだけでなく、神の恵みと力、そして、聖霊の助けがなければならない。

断食して、徹夜して、火のように祈って、罪の性質を捨てようと、いのちを尽くして努力するとき、私たちの中におられる聖霊が助けてくださり、神が恵みと力を与えられるので、ついに心から罪の性質が抜けていくのである。

ところで、私たちが祈りと断食などをささげるとき、必ず覚えなければならないことは、どんな心で行うのかということである。「真理に逆らうものを捨てるようにしてください」と声を上げて祈って、三日、七日、あるいはそれ以上、何度も断食するからといって、それがすべてではない。

罪を嫌われる神の心を悟って、神の助けを切に求める心でしなければならない。まことに心と思いと最善を尽くしてささげながら、神に恵みと力を求めなければならないのである。そうでないなら、ただ習慣のようになることもあり、空を打つように無に帰すこともある。

父なる神の御前で何かをする時も、心を尽くしてして、また、すべてのことに父の心を感じながらしなければならない。神の愛を切に感じるとき、そして、神が罪と悪をどれほど嫌われるのか感じるとき、罪をいやいやながらつらそうに捨てるのではなく、変化が遅いのでもなく、やさしくすみやかに罪の性質が捨てられるのである。

3. 肉の行い

肉的なことが行いとして現れると、それを「肉の行い」と言う。たとえば、誰かを心で憎んだなら、ここまでは「肉的なこと」になる。しかし、あまりにも憎くて、手で一度たたいたとしよう。このように暴力に現れた行いが「肉の行い」である。他人の物をほしがることは「肉的なこと」だが、実際に盗んだなら、これは「肉の行い」である。

それでは、肉的なことと肉の行いとでは、どちらの罪が重いだろうか？ 心にある罪の性質が明らかに現れたので、当然、肉の行いのほうが重い。

〈ガラテヤ5:19-21〉を見ると、肉の行いをする者は救われないと書いてある。「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」

「神の国を相続することはありません。」ということは、結局、地獄に行くということで

ある。

同じように、〈第一コリント6:9-10〉に「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そして者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。」とある。

また、〈創世記 6:3〉には「そこで、【主】は、『わたしの靈は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう』と仰せられた。」とある。「肉にすぎない人」とは、すなわち、神がともにおられないという意味である。

私たちがイエス・キリストを受け入れて、罪を悔い改めると、神の御靈、すなわち、聖靈が心に来られて、私たちとともにおられる。聖靈を受けた後に、肉的なことを考えたとしても、捨てるために努力していく人には、聖靈がともにおられる。

しかし、聖靈を受けた後も、肉の行いを捨てないでいる人には、聖靈がともにおられない。だんだん聖靈に満たされなくなり、結局は御靈が消されてしまう。私たちは、このみことばを心に刻みに刻まなければならない。肉的なことを捨てるのは、自分の意志だけでは難しいとしても、行いで罪を犯すことは、自分の意志で十分に制することができる。

何かの物を見てむさぼりの心が起きて、「あれをさっと持って行こうか?」という思いがするとき、「いけない」と自制すればよい。怒って殴ろうとこぶしを振り上げても、「こうしたらいけない」とすばやく手を下げればよい。

しかし、罪だと知っているながら、自制せずに肉の行いを犯し続ける時は、これは神の御前でことさらに罪を犯していくことになる。もちろん、信仰の一段階の初心の者ならば、肉の行いを一気に捨てられないかもしれない。かと言って、その状態にとどまっているのではなく、10回から9回、8回、このように減らしていって、結局は肉の行いとはかかわりのない人にならなければならない。しかも初心の者でもなく、ある程度信仰がある人ならば、当然肉の行いは捨てなければならない。

〈ヘブル10:26-27〉に「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」とある。

信仰があると言いかながら、ことさらに肉の行いをしていくなら、結局、これが大きい罪の壁となり、悔い改めようとしても、悔い改めることができなくなる。聖靈にも働きかけられないし、神が恐ろしい神のように思えて、救いの確信さえあやふやになる。

ところが、今日、肉の行いをしてはならないとしっかり教えている教会があまりにも少ない。だから、聖徒が10年、20年と信仰生活をして、執事、勧士、長老の務めを受けても、相変わらず肉の行いを捨てないのである。このような教会にどうして救いがあって、キリストのいのちが生きて働くだろうか? リバイバルがやんで、かえって神の栄光をさ

えぎるようなことが起こるのである。

肉の行いは、あまりにも汚れていて害になるものである。もし「汚物でいっぱいの便器に手をつけていなさい」と言われたなら、どれほどいやだろうか？ その中にあるものが少しでも手についたなら、びっくりして、洗ってはまた洗うのではないだろうか？ 肉の行いは、それよりさらに汚れていて忌むべきものであり、靈とたましいに害悪を及ぼすのである。

このように害になる肉の行いを、今から一つ一つ分析していく。ひょっとしてでもまだ捨てられなかつたことがあるならば、徹底的にたましいを碎いて罪を告白して、すべて捨てなければならない。

1) 不品行

まず、〈ガラテヤ 5:19〉に「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、」とあり、一番先に出てくるのが、不品行、汚れ、好色である。ここで「不品行」とは、結婚していない男女が肉体的な関係を持つことである。

これから結婚するからといつても、例外ではない。いくら互いに熱く愛し合って、将来を約束したとしても、結果を見ると、心が変わってしまい、別れる場合もよくある。配偶者がいるのに他の人を求めるなら、これも当然、不品行である。

ひと昔前は、不品行がわかつたなら、隣人から顔を背けられて、ひどい場合は、村から追い出されることもあった。ところが、今日は世があまりにも罪に満ちていて、不品行があまりにもはびこっている。しかも多くの小説、映画、ドラマなどで、さまざまな不品行をとても自然なことのように描いて、美化する場合まである。不正な関係を持つ人々について、切ない愛のように描いて、美しい愛のように入力させるのである。

人がこういう内容をおもしろいと思って見るようになり、心に受け入れるほど、罪に対してもわきまえる力が弱くなつて、無感覚になっていく。しかも、以前にはなかつたインターネットまで、人々の不品行をそそのかしている。インターネットで見てはいけないものを見て、不品行や汚れと好色なものまでも、もっと追い求めていくようになるのだ。

このようなことがあるならば、みことばで心が刺されて苦しいというのではなく、喜んでその道から立ち返らなければならない。聖書には、不品行を警告するみことばがとてもたくさん記されている。

〈エペソ 5:5〉に「あなたがたがよく見て知つているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です、——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」とあり、〈ヘブル 13:4〉に「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。」とある。

いくら世代が悪くても、主を信じる私たちは決して悪い世代に染まってはいけないし、キリストのきよい花嫁として、からだと心をきよく守らなければならない。

ところで、不品行には、人との間の肉的な不品行のほかにも、靈的な不品行がある。「神

の子どもだ」「主を信じている」と言いながら、占いをしたり、お守りを持ったりなどすることである。これはすなわち、悪い靈を拝んで、惡靈に仕えることである。

〈第一コ林ント 10:21〉に「あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに惡靈の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあづかったうえ、さらに惡靈の食卓にあづかることはできないことです。」とある。

〈第二列王 1 章〉を見ると、イスラエルの王アハズヤが病気になると、異国の神に使者を遣わして、自分の病気が直るかどうか伺いを立てようとした。この時、神は怒られて、「あなたが人をやって、エクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てるのは、イスラエルに神がいないためか。」と言われ、王には「あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。」と仰せられた（第二列王 1:6）。そのみことばどおり、アハズヤは病床から回復できなくて、そのまま死んでしまった。

ユダのヒゼキヤ王は、死を宣告された時も、神に祈り求めて、いのちを十五年も加えていただいた。それとはあまりにも対照的な結末である。

今日、神の子どもだ、主を信じていると言いながら、生死禍福をつかさどられる神に頼らないで、偶像と惡靈に頼ることがある。これがまさに不品行であり、これは神を裏切る行為と同じなのである。

2) 汚れ

「汚れ」とは、肉的に汚れがついているという意味ではなく、靈的に汚れているという意味である。これは特定の罪を指すのではなく、どんな罪の性質でも、それが一般の水準を超えてひどい場合を「汚れ」と言う。

人には先祖から受け継いだ罪の性質があつて、憎しみやそねみ、姦淫などがある。人が主を受け入れて聖靈を受ける前は、世の罪と惡に染まつたまま生きていくので、特に度を超えた悪い人でなくとも、思いと行いで罪を犯すことはありえる。

ところが「汚れ」とは、一般の水準を超えて、人の道から外れる罪である。人が眉をひそめるほど理解できないことと、苦しみを与えるような犯罪が起きるとき、これが「汚れ」なのである。

たとえば「不品行」だけを見ても、一般の水準を超えて、人々の眉をひそめさせる衝撃的な事件がある。例を挙げれば、強盗が、家族の前で妻と娘を暴行したり、男女が集団で乱交をしたりする場合がある。

〈レビ18:6〉を見ると、「あなたがたのうち、だれも、自分の肉親の女に近づいて、これを犯してはならない。わたしは【主】である。」とあり、その次の節からは、義理の母や実の母、実の姉妹や義理の姉妹、孫娘、父の姉妹、母の姉妹、父の兄弟の妻などを犯してはならない、と書いてある。

また、〈レビ20:15-16〉には「人がもし、動物と寝れば、その者は必ず殺されなければならない。あなたがたはその動物も殺さなければならない。女がもし、どんな動物にでも、近づいて、それとともに臥すなら、あなたはその女と動物を殺さなければならない。彼ら

は必ず殺されなければならない。その血の責任は彼らにある。」とある。

このように、一般的な水準を超えて人の道に外れること、口にするのも恥ずかしいことが、すべて「汚れ」になるのだ。このようにすべてを禁じるみことばの後、〈レビ 18:29〉に「これらの忌みきらうべきことの一つでも行う者はだれであろうと、それを行う者は、その民の間から断たれる。」とある。

また、新約でも〈第一コリント5:4-5〉に、父の妻を妻にしている者について、「あなたがたが集まったときに、私も、靈においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の靈が主の日に救われるためです。」とある。旧約だけでなく新約でも、神はこのような行いを、はつきりと禁じておられるのだ。

他の例として、そねみの場合も、その程度が過ぎると「汚れ」になる。人は、自分が他の人より劣っていると感じるとき、そねみが出てくる。このそねむ心は一般的に多くの人が持っている。

ところが、時々、時代劇などを見ていると、他の人をひどくそねんでねたみ、相手に害を加える呪術を研究して、相手の肖像画を描いて矢を射たり、相手の姿の人形を作つて釘で打ったりなど、怖い行動が出てくる。

このように呪う行いがまさに、そねみの程度を過ぎて「汚れ」になるのである。悪が度を超えると、一般の人の良心では受け入れにくい行いが出てくるのだ。

3) 好色

好色を辞書で見れば、「色事の好きなこと。また、そのまま。色好み。」とあるが、聖書にある「好色」もこのような意味である。すなわち「色事を追い求めて、さまざまな正しくない行いをすること」であり、生活態度全部が乱れていて、そのような思いと言葉、行いをもつて生きることである。

このように色事を追い求めていくと、一般的な水準を超えた不品行にもなる。「汚れ」でも説明したように、動物と寝ること、集団で色欲を追い求めていくこと、同性間で寝ること、器具を使うことなど、さまざまな場合がある。ところが、世がますます罪に染まっていくだけに、このような好色に対して、人々の罪の意識がだんだん鈍くなっていくのだ。

たとえば、〈レビ 18:22〉には「あなたは女と寝るように、男と寝てはならない。これは忌みきらうべきことである。」とある。また、〈レビ 20:13〉には「男がもし、女と寝るように男と寝るなら、ふたりは忌みきらうべきことをしたのである。彼らは必ず殺されなければならない。その血の責任は彼らにある。」とある。

神がこのように断固として禁じられたことを、世ではだんだん認めてきているのだ。たとえば、同性愛者を擁護する団体を作つて、それは人の道に逆らうことではなく天性のものだと、「罪と惡のように見るのではなく、単に性的傾向が違うものと思って、彼らの人権を尊重しなければならない」と主張する。

はなはだしきは、教会の中でも同性愛を受け入れる風潮が生じている。アメリカやヨーロッパの教会では、同性愛者を聖職者に任命する所も出てきて、同性間の結婚を教会で認

める場合まである。

しかし、これは確かに神に敵対して聖書に逆らうことであることを、私たちは悟らなければならぬ。〈ローマ1:26-27〉に「こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行うようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。」とある。これは、明らかに自然な用を捨てた恥ずかしいことであり、それに対する当然の報いを受けるのである。

また、〈第一コリント 6:9〉には「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、」とあり、このような人は、神の国を相続できない、すなわち救われない、と書いてある。

また、〈申命記 23:18〉に「どんな誓願のためでも、遊女のもうけや犬のかせぎをあなたの神、【主】の家に持って行ってはならない。これはどちらも、あなたの神、【主】の忌みきらわれるものである。」とある。このように不品行を行って好色の罪を犯した者が、神に何かをささげても、神は受けられるのではなく、かえってそのささげ物でさえ忌み嫌われるものだということである。

世の人がもっともらしい言葉で惑わしても、聖徒は、聖書に記されたみことばを正確に心に留めて、決して世に惑わされず、罪に染まってはいけない。

参考までに、自分の生まれついた性を変えることも、神の御前では受け入れられないことである。すなわち、からだは女なのに、自分を男だと思っていたり、からだは男なのに、女だと思っていたりすることも、神の御前にふさわしくない。

〈申命記22:5〉に「女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなたの神、【主】は忌みきらわれる。」とあるように、これは創造の摂理に逆らうことである。

これまで説明した不品行、汚れ、好色、このようなものは、「肉の行いは明白であって」とあるように、世が罪と悪にはびこるにつれて、最も目立つことである。聖書でソドムが滅びる時もそうだったし、ローマが滅びた時にどれほど堕落していたのか、よく知られている。火山の爆発でさばかれたポンペイの遺跡を見ても、彼らが滅びる頃、不品行と汚れと好色がどれほどはびこっていたのかわかる。

ところが、今日は不品行があまりにも目につくのに、世の中に罪がはびこっていて、それがどれほど恥かしくて神のみこころに逆らうことなのか、認識さえできない。このようなことを見ても、私たちはそれだけさばきの時が近づいていることを悟らなければならぬ。

4) 偶像礼拝

次は「偶像礼拝」である。「偶像礼拝」とは、人が神を捜さないで、木や石や金属で形を造って、その前に拝んで仕えることである。このような偶像礼拝は、神が最も嫌われる罪の一つである。

〈出エジプト記20:4-6〉に「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、

【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」とある。

偶像礼拝の咎を子孫の三代、四代にまで及ぼす、ということは、結局、その家が完全に没落してしまうという意味になる。三代だけさまざまな試練、患難が重なっても、その家はほとんど不幸になるのだ。実際、代々偶像をひどく拝んできた家庭を見ると、いつも敵である悪魔が試練、患難をもたらして、その子孫の中に憂いと病苦が絶えないことが見られる。特に、悪霊につかれている人、精神異常者、アルコール依存症などが多い。その子孫が主を受け入れて、神を信じようとしても、敵である悪魔が妨げ続けるので、信仰生活をすることにおいて、他の人より難しいのだ。

運勢を占うなど、呪術的なことに頼ることも、結局、偶像礼拝の一つであり、特に神を信じる人々がこういうことをするなら、靈的な不品行であり、神に対して大変申し訳ないことになるのである。

ところで、偶像礼拝にも、肉的な偶像礼拝だけでなく、靈的な偶像礼拝がある。すなわち、まことの神である私たちの神を知らなくて、偽りの神を拝んで仕えることだけが偶像礼拝でなく、まことの主である神を知っていて信じていると言う人に、神より愛するものがあると、その対象が靈的には「偶像」になる。神を信じるなら、当然、神を一番に愛するべきなのに、そこから外れて、人としての道にもとることである。

私たちはどうして神を一番に愛さなければならぬのだろうか？　私たちが神を一番に愛する時でこそ、完全にみことばどおり生きることができるし、神を愛する時こそ救われて、よりすばらしい天国を激しく攻めて行くことができるからである。

「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。」というみことばのように、世のことに心を寄せて慕うなら、それだけ神の愛がその中にはないということであり、靈の世界を慕い求めていくよりは、肉の世界を喜んで追いかけていくようになる。

〈使徒の働き〉に出てくるアナニヤとサッピラ夫婦は、初めは神に対して熱心で、自分の持ち物を売った。ところが、いざお金を見たらむさぼりが生じて、その代金の一部を残しておき、結局、聖靈を欺いた罪で呪われて、彼らは息が絶えてしまった。神に仕えると言ひながらも、神より物質のほうを愛すると、結局、滅んでしまったのである。

それで、〈コロサイ3:5〉に「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」とあるのだ。

むさぼりのほかにも、神より家族を愛すること、娯楽や贅沢を楽しむこと、名誉、権勢なども靈的な偶像になることもある。

たとえば、ある親は信仰があると言いながら、子どもの試験の時は「勉強しなさい」と主日を守らないようにさせたり、塾に行かなければならぬから、祈祷会や教会の集いに行かせないようにしたりする。それでは、たとえ子どもの成績は上がったとしても、靈的にはどんな結果を生むだろうか？　これは結局、子どもに勉強を偶像にして神を遠ざけるように教えることであり、子どもを滅びの道に導くことである。

また、ある人は好きなテレビ番組やスポーツの試合、趣味などのために主日を守らなかつたり、信仰生活を正しくしていた人が、異性とつき合い始めてから、その人と会うために信仰生活をおざなりにしたりする場合もある。これらのすべてが神より世にあるものを愛することであり、結局は偶像礼拝になる。

5) 魔術

ここで「魔術」とは、マジックという意味ではなく、人の心を惑わす不思議な術という意味である。巫女の儀式や占いなどで行われるものである。

世の中には靈媒をする者、すなわち、悪い靈の力を借りて福をもたらすとか、将来のことがわかると言う人々がいる。このような人を訪ねて、呪術的な方法で願いをかなえようとする人もたくさんいる。

たとえば、大学入試や就職を前にした子どもや結婚相手について吉凶を占ったり、家の中に憂いがあると原因を尋ねに行ったりするのだ。それで、何か良くないことがあるはずだと言われると、これを避けるためにお守りや何かの秘法を使う。自分の競争者を呪って害を加えるために、自分の願いをかなえるために、ご利益があるというお守りを持ったり、巫女の儀式をしたりなど、いろいろな方法を使う人もいる。

しかし、神の子どもたちは、決してこのようなことをしてはいけない。〈レビ 19:26〉に「あなたがたは血のついたままで何も食べてはならない。まじないをしてはならない。卜占をしてはならない。」とある。主を信じていると言いながら、このようなことに惑わされると、これは神の敵である悪い靈を求める事なので、神を裏切って立ち向かう、大きい罪になる。

また、神を信じない人であっても、このようなことをすると、何の益もたらさず、むしろ悪い靈を呼び込むことになって、もっと大きい災いを招くだけである。以前、悪い靈どものしわぎで災いにあった家が巫女の儀式をすることがたびたび見られたが、このような家は災いがなくなるのではなく、いつも巫女の儀式をしなければばかり起こる。

ひとまず儀式を終えれば、しばらくの間はその家に働いていた悪い靈どもが鎮まり、安らかなように見える。しかし、時間が少し経つと、以前の災いが再びやって来たり、もっと深刻なことが起こったりする。悪い靈どもが再び仕えられるために、このような災いをもたらすのである。だから、このような家はいつもこの繰り返しで、災いから抜け出すこともできなくて、闇の勢力に縛られているのだ。

また、靈の目が開かれると、お守りを持っている人や、お守りが貼ってある家には、悪い靈どもが離れるのではなく、かえって集まってくるのが見える。

また、占いをしても、悪い靈どもに将来の事がわかるのでもない。悪い靈どもも、靈の世界に属しているので、肉の人の心はある程度読めて、それをもって、まるで未来まで知っているかのようにだますのだ。ただしばらくの間、人の目を欺いて、トリックを使って、もっともらしく惑わし、人々に捕まれて仕えられようとするのが、まさに悪い靈どもの計略である。

ただ生きておられる神、全知全能であり、人生の生死禍福をつかさどられる神だけが、将来の事とすべてをご存じで、人に祝福を与えることのできる方である。人が神に頼らなくては、どんなことをしても祝福されることができないし、逆に災いを招くだけである。私たちは、ただ神に頼って、神がその子どもたちのために備えられたすべての祝福を味わわなければならない。

ところで、今まで説明した「魔術」とは、単に悪い靈に接する行いだけを言うのではない。より広い意味では、策略を用いて巧みに偽りで相手を誘っていくことも含まれる。

〈エステル書〉に出てくるハマンという人は、ユダヤ人モルデカイが自分にひれ伏さなかつたといって、モルデカイを殺そうとするだけでなく、その民族全体を根絶やしにしようと策略をめぐらす。また、ダニエルが王の恩寵を大いに受けると、これをそねんだ臣下たちが策略を企てて、ダニエルを獅子の穴に投げ込む。

しかし、その結果はどうなっただろうか？ 神がその民、ユダヤ民族を守られたので、モルデカイとユダヤ民族は救われて、むしろ悪いハマンが王の命令によって殺された。また、ダニエルが獅子の穴に投げ込まれても、神が守られるとダニエルは無事だったし、かえって彼を謀略した臣下たちが獅子の餌食になった。

〈箴言 26:27〉に「穴を掘る者は、自分がその穴に陥り、石をころがす者は、自分の上にそれをころがす。」とある。悪い策略をめぐらし、人を害そうとすることは、明白な肉の行いであり、滅びを自ら招くことであり、しかも正しいお方である神にさばかれるようになることを心に留めなければならない。

ここでもう一つ覚えることは、神の子どもたちが正しい道を歩む時は、悪い人々が策略を使って欺こうとしても、それに惑わされないとすることである。主を信じる聖徒の中でも、だまされて詐欺にあうなど、大きい被害をこうむることがたびたびある。

ところが、この根本的な原因是、欲が働き、真理に従わずに入道から外れたからである。自分の中に真理に逆らうものがあるだけに、相手の偽りに心が動くのだ。もし聖徒が欲を追わないで、正しい道を歩むなら、相手がいくらもっともらしい話をしても、だまされない。また、悪い人々が策略を用いて聖徒に害を与えようとしても、聖徒が正しい道を歩んでいる時は、神が守ってくださるので、被害を防いですべてのことを働かせて益としてくださる。

6) 敵意

「敵意」とは、敵対しようとする心、相手を敵として憎む気持ちのことである。人が自分の心に合わない相手に対して悪い感情をいだくと、相手を遠ざけて、さらには憎むよう

になる。その程度が度を超えると、感情が爆発して、害を与えようとまでするのだ。

世の人はほとんど、敵意を持つことを悪とは思わない。相手が悪を行ったら、自分も悪で報いることが正しいと思う。しかし、神は、敵をも愛しなさい、善をもって悪に打ち勝ちなさいと言われた。相手が自分に対していくら大きな過ちを犯したとしても、罪のために十字架につけられて、自分を救ってくださった主の愛を思えば、いくらでも赦すことができる。

韓国には「愛の原子爆弾」と呼ばれた人がいる。これは、日本の植民地時代に神社参拝を拒んだため投獄され、朝鮮戦争の時、主の御名によって殉教したソン・ヤンウン牧師のニックネームである。このようなニックネームを持つようになった理由は、普通の人としてはとうてい理解もできない愛を敵に示したからだ。

1948年、左翼系の軍人が起こした韓国のヨス・スンチョン事件の時、ソン・ヤンウン牧師のふたりの息子が、反乱軍に捕えられて、主の御名を否認するように強いられた。しかし、このふたりの息子が最後まで否認しなかったので、結局、銃殺された。

リババード聖会を導いているうち、息子たちの殉教の知らせに接した牧師は、全く動搖せずに説教を終わらせたそうである。成長したふたりの息子が同時に亡くなったということを聞いても、ただ神に感謝しただけだったそうだ。

しばらく経って反乱が鎮圧され、息子たちを殺した犯人のうち、ひとりの青年が捕えられて、死刑になることになった。この時、ソン牧師は軍司令官を訪ねて、その殺人者を釈放してほしいと嘆願した。

その殺人者を生かすべきだという理由は、自分の息子たちは殉教して天国に行ったけれど、息子を殺したこの青年は、死ねば地獄に行くので、彼を生かして救いの道に導かなければならぬということだった。

また、牧師自身が、日本の植民地時代に獄でひどく苦しみながらも、神社参拝を拒んだのは、偶像礼拝を禁じられた戒めを守るためだったよう、「敵をも愛しなさい」というのも神の命令なので、この命令も守らなければならないということだった。

そして、その殺人者を赦しただけでなく、死んだ息子たちの代わりに養子にまでした。自分の息子たちを殺した敵でさえ赦して、養子にすることができるならば、世で敵意を持つ理由がどこにあるだろうか？

ソン・ヤンウン牧師は、ふたりの息子が殉教したとき、悲しんで嘆いたのでなく、かえつて十の感謝の祈りをささげたそうだ。その感謝の祈りを見れば、敵までも愛するキリストの愛を実現するまで、この牧師がどんな信仰を持ったのかがよく感じられる。その内容を読みながら、私たちの心を顧みてみよう。

「第一は、私のように過ちの多い人の血統から、殉教する息子が出てきたということに感謝いたします。」

「第二は、このような宝を、数多くの聖徒の中でも、何でもないわが家に与えられたことに感謝いたします。」

「第三は、三男三女のうち、最も美しい長男と次男を神の御前にささげるようになって、

感謝いたします。」

「第四は、ひとりの息子が殉教することも難しいのに、ましてふたりの息子が殉教したので、感謝いたします。」

「第五は、主イエス様を信じて安らかに死ぬのも大きい祝福なのに、福音を伝えて、銃に撃たれて殉教する栄光を受けるようにされ、感謝いたします。」

「第六は、彼らはアメリカ留学に備えていましたが、アメリカよりもっとすばらしい天国に行くようになったので、私の心が安らかになって感謝いたします。」

「第七は、ふたりの息子を銃殺にさせたその敵を私の息子とする心を下さって、感謝いたします。」

「第八は、私の息子たちの殉教によって、数え切れない天国の実が結ばれることを信じますので、感謝いたします。」

「第九は、このような逆境の中でも、神の愛を悟って喜べる信仰を下さり、感謝いたします。」

「第十は、このようにあふれるすべての祝福を味わわせてください、感謝いたします。」

このような祈りをしただけでなく、当時、1ヶ月に80ウォンを牧会費として受け取っていたところ、1万ウォンの感謝献金をささげたそうだ。

私たちはどうだろうか？ ひょっとして自分に過ちを犯した人に対してわだかまりをいだいて、敵と思って、悪をもって悪に報いようとしなかつただろうか？ 自分に過ちを犯したこともないのに、自分の心にちょっと合わないだけで、相手を見ると顔をこわばらせて、冷たく無視して、背を向けたことはないだろうか？

でなければ、かえって自分に対して相手が過ちを犯して、申し訳ない気持ちになっているかと思って、その手でももう一度取って、暖かいひと言でもかけただろうか？

主の祈りを見ると、「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」とある。この祈りのように、私たちはどんな人にも敵意を持つのではなく、この世で見られないキリストの愛によって、多くのたましいを変えていかなければならない。

7) 爭い

「争い」とは、自分の利益と自分の権利を優先にして、これを得るために争うことである。自己中心に自分が主張するとおりに他の人が従ってほしいと願って、他の人を犠牲にしても自分の欲を満たそうとするので、争いが起きるのだ。

親子の間でも、自分の我を張るので、ひどく争って縁を切る場合がある。夫婦の間も、互いに仕え合えばよいのに、そうできなく、仕えられようとして、自分の思いが正しいと言い張るから、争うようになる。仲が良かった兄弟の間も、遺産相続について意見がくい違ったり、保証人になって困ると、はなはだ争い、敵のようになったりする場合もよくある。

隣人との間にも、自分の利益を追い、争う。たとえば、家を建て替えたり、補修したりすると、「うるさい。ホコリが立つ。通行の邪魔になる」など、あれこれの理由で争いを起こすのが見られる。以前なら、それでも同じ地域の人だし、隣人なので、ただ我慢していくことも、最近は、少しでも損害をこうむりそうだったら、すぐに訪ねて行き、抗議

して争いを起こすのだ。

終わりの時になるほど、世では愛が冷たくなり、もっと自分の利益を求めるから、時間が経つにつれて争いが多くなり、個人の間はもちろん、民族の間にも、国家の間にも、戦争と不和が多くなる。

しかし、主を信じる聖徒は、ただ聖霊の帶で、愛の帶で一つにならなければならない。しかも教会の中では、どんな争いもなく、完全に一つにならなければならぬのだ。教会の中で議論と争いが起こるなら、そこには必ずサタンのしわざが伴い、教会と神との間に隔ての壁ができるのだ。するとリバイバルがやむだけでなく、聖徒ひとりひとりの祝福までも妨げられるのである。

だから、〈第一コリント 1:10〉に「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」とあるのだ。

8) そねみ

「そねみ」とは、自分より他人が優れていると思うとき、心が揺れ動き、しゃくに障り、相手を遠ざけて憎むことである。これがもっと深刻になると、ねたみになる。このようなそねみとねたみのために、相手に害を及ぼすいろいろな行いが出てくる。

悪意に満ちた憤りが出てきたり、争って党派を作つて殺人も出てきたりする。そねみという一つの根から、ねたみとその他のいろいろな肉の行いが派生して現れるのだ。そねみは自分の靈とたましいをむしばむ、本当に醜い罪と惡である。

〈箴言14:30〉に「穏やかな心は、からだのいのち。激しい思いは骨をむしばむ。」とあるように、そねむ人は、他人がうまくいくと、激しい思いによって自分の骨がむしばまれるようになる。

聖書を見れば、レアとラケルは姉妹なのに、互いにそねんで争つて、夫のヤコブまで苦しめる。〈創世記30:1〉に「ラケルは自分がヤコブに子を産んでいないのを見て、姉を嫉妬し、ヤコブに言った。『私に子どもを下さい。でなければ、私は死んでしまいます。』」とあるように、ヤコブにとんでもない不平を言う。

このような争いが、後には子どもたちにまで影響を与える。すなわち、ラケルの子ヨセフが父に特別に愛されると、他の十人の兄たちがヨセフをそねんで、殺そうとする心までいたいたのである。それで、結局は幼い弟を異国の商人に奴隸として売ってしまったのだ。同じ血を引く弟さえも憐れまずに、金を受け取つて売ってしまう無情さが、まさにそねみという根から出てきたことなのである。

また、カインが弟アベルを殺して人類最初の殺人者になったのも、結局、根本の原因是そねみだった。〈第一ヨハネ 3:15〉に「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」とあるが、そねみが憎しみを引き起こして、結局殺人まで起こすことが、昔も今もめずらしくないのである。

私たちは自分を顧みるとき、ねたんで殺人や何かの悪を行ったことはなかったとしても、まだそねみという罪の性質が残っているならば、徹底的にその根まで引き抜かなければならない。

簡単に発見できるそねみの属性は、他の人がうまくいくのを見るといやな気がすることである。「あの人はこういう短所があって、欠けているところがあるのに、なぜあの人はうまくいって、愛されているのだろうか?」など、いろいろな思いが浮かぶのだ。さらに進んで、相手が嫌になって、その人が持っているものを奪いたくなり、その幸せを踏みにじりたくなるのだ。

相手の幸せを自分と比べて心が傷つくのも、その根はそねみから始まる。「あの人はあんに認められているのに、あんなに幸せそうなのに、私は何なんだろう? 私はどうしてこうなんだろうか、このくらいにしかならないんだろうか」と絶望したり、自分に対して自信を失ったりする。特に、年齢や信仰歴が似ていたり、似た使命を持っているなど、自分と似た対象には、さらにそうなりやすい。

しかし、そねみがないならば、他の人がほめられると、まるで自分のことのように幸せで喜ぶ。

もし誰かが自分の子どもをほめてくれたとしたら、気に障る人がいるだろうか? 「うちの子にはこんな欠点があるのに、の方はそれも知らないでほめてくださるんだ」と感謝するだろう。そうではなく、「うちの子はあんなにほめられているのに、私はほめられない」と心が傷つくだろうか? そうではなく、うれしくて幸せだろう。

たとえ自分の子どもに何か欠けているところがあっても、それにもかかわらず愛されると、もっと深く感謝するのだ。一歩進んで、ほめられた人が自分の子どもや家族でなく誰であっても、同じように感謝するのが御靈に属する心である。

また、教会組織の中で、自分の下にいた人が認められて愛されてリーダーになり、むしろ自己より上になれば、自分が認められたように感謝して、その相手にもっと仕えなければならない。

また、店を経営している場合、隣の店がはやっているからといって、「あの店にお客さんを奪われた」と腹を立てるのではない。隣の店がはやっていることも素直に喜んで、同時に自分も祝福されて、繁盛するように祈るのが良い心である。

イスラエルのサウル王には、ヨナタンという息子がいた。ヨナタンはダビデと初めて会った時から気が合い、互いに真実の愛を分かち合った。実際、肉的に見ると、ヨナタンはダビデを敵とみなすこともできる。父サウルの王位が自分に受け継がれるべきなのに、神はダビデを王に立てられたので、自分の王位が奪われたと思うこともありえる。

しかし、ヨナタンはむしろダビデを助けて、ダビデがサウルに追いかけられる時も、ダビデを励ます。〈第一サムエル23:16-17〉に「サウルの子ヨナタンは、ホレシュのダビデのところに来て、神の御名によってダビデを力づけた。彼はダビデに言った。『恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルもまた、そういうことを確かに知っているのです。』」とある。

まさにこれが御靈に属する心であり、真理の心である。他人が良いものを手に入れると、自分のことのように喜んで幸せであり、他人が苦しめば、自分もつらくてやるせないので。

9) 憤り

ある人は憤ると声が高くなり、相手に呪いを浴びせかけて、暴力を振るったりもする。時には、相手を殺すまでする場合もある。先にも述べたように、イスラエルの初代王サウルは、ダビデをひどくそねんで憎んだ。それで、絶えずダビデを殺そうとした。

しかし、反対に、サウルの息子ヨナタンはダビデをとても愛して、何としてでも生かそうと努めた。ある日、ヨナタンがサウルの手からダビデを逃したが、これを知ってサウルは大変怒り、ヨナタンに悪を行う。

〈第一サムエル 20:30〉に「サウルはヨナタンに怒りを燃やして言った。『このばいたの息子め。おまえがエッサイの子にえこひいきをして、自分をはずかしめ、自分の母親の恥をさらしているのを、この私が知らないとでも思っているのか。』」とある。それでもヨナタンがダビデをかばうと、今度はもっと激しく憤って、ヨナタンに槍を投げつけたのだ。自分の妻と自分の跡を継ぐ息子を、ひねくれた言葉で悪口を言って、息子に槍を投げつけて打ち殺そうまでしたのだから、これだけ見てもサウルは救われにくい人なのがわかる。

世の人の中で、憤りがない人を見つけるのは大変難しい。内気な性格で柔軟に見える人も、憤りがないのではなく、ただ心の中にぎゅっと抑えて我慢している場合がよくある。それで、酒を飲んだり、何かの状況になると心の中に積もっていた感情が爆発したりすることもある。

このように、人それぞれに憤りの根があるから、主を信じて神の子どもとされても、相変わらず憤りが残っている場合もよくある。しかし、聖徒がちょっと癪を起こして、憤ったからといって、救われないという意味ではない。たとえしばらく憤ったとしても、心から悔い改めて憤りを捨てて、変えられていけばよいのだ。

それでも、大きかろうが小さかろうが、「憤り」という罪の性質があつて、そのために死へ向かう明白な肉の行いをすることがあるので、憤りの根の根まで引き抜かなければならない。憤りもだんだん程度がひどくなり、また、サウル王のように権勢があつて、思いのままに憤ることができる環境になると、結局、サウルのような悪を行うこともあるのだ。

今日、新聞やテレビを見ると、憤りによって起きる怖い事件がよく報道される。何でもないことで憤りを抑えきれずに殺したり、自分を無視するからといって、衝動的に殺したりする人もいる。

こういう事件があった。幼い時に親を失った兄弟がいた。兄が一生弟のために犠牲になって、学費も出して、結婚する時まで世話をした。それほど仲の良い兄弟だったのに、ささいな言い争いのあぐく、弟が兄を無視するようなことを言うと、一瞬兄が理性を失ってしまい、弟を殴り殺したのだ。すぐ次の瞬間、兄がすさまじく後悔したが、すでに手遅れだった。

このような悪を行った人も、まさか自分が憤りのためにこのように大きな悪を行いうるとは、ふだんは考えられなかっただろう。だから、罪はいくらささいなことだからといつ

て、そのまま持っていてはいけないので。

人はみな、憤るにはそれなりの理由があると言い訳をする。相手が自分を苦しめて、自分が理解できない行動をして、自分のしてほしいことをしてくれないというのだ。しかし結局は、相手が何かをしたから怒るのではなく、自分の中に悪があって、憤りがあるから怒るのである。心に悪がなくて柔軟な人は、相手が原因を作るからといって、そのために怒らないのである。

ここで参考までに、主にあっての義憤は、肉の行いである憤りとは違うことに触れておこう。

イエス様は、当時の律法学者やパリサイ人に、「おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。」と怖い言葉で叱られたり、神の宮で商売をする人々の台を倒されたりしたことがある。これは、悪から出る憤りではない。神の公義に基づく、正しいことのための御怒りである。

また、親が子どもを叱るとき、ある人は自分の怒りに勝てなくて、子どもに大声を上げてたたく場合がある。これは、確かに憤りであって、神の御前でもふさわしくない。しかし、自分の感情で叱るのではなく、子どもが間違った道に行ってはいけないので、わざと厳しく叱ることは、肉の行いとは違う。〈箴言13:24〉に「むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。」とあるように、神の御前でもふさわしいのである。

10) 党派心と分裂

「党派心」とは、全体の流れが自分の心に合わないからといって、分かれて自分の仲間にかたよる心である。仲間にかたよるとは、単にある人どうしがもっと親しいとか、よく集まって交わることを意味するのではない。

意見と立場が似た人どうしはもっと親しくなりやすいし、しばしば集まることはむしろ自然である。しかし、党派心を持っていると、自分と意見が違う人を疎外したり、自分の目的を遂げるために、他の人に害を及ぼしたりすることもある。こうなると、肉の行いになる。

自分の利益を求めて群れを作り、他の人を非難して、攻撃したりもする。ひそひそ悪口を言って、罪に定めたりもする。そのうち互いに感情の溝が深くなり、激しく争って排斥することもある。

〈箴言18:1〉に「おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいする。」とあるように、真理に逆らうようになる。

聖書では、ダビデの子アブシャロムが自分の利益を求めて党派心を持って、分裂を起こしたことが見られる。アブシャロムは父の王位を奪おうと決心した瞬間から、徐々に民の心を盗み始める。ダビデが民を顧みていないように偽りを言って、アブシャロム自身は民の立場を十分に理解して、問題を解決してあげられるように思わせたのだ。ある程度民の心を買うと、アブシャロムはついに自分のほうに抱き込んだ人々を率いて、反乱を起こした。

しかし、このように策略をめぐらして、党派心から分裂を起こしたアブシャロムは、結局、彼の願うものが得られなかった。初めは成功したように見えたが、逆転して悲惨な死を迎えたのである。神が彼に御顔を背けられると、いくら綿密に計画を立てても成功しなかったのだ。

今日の教会を見ると、主の御名によって集まった聖徒の中でも、党派を作ることがある。すべての教会のかしらはイエス・キリストであり、各教会には実際に管理している主のしもべがいる。

ところが、教会を導いている主のしもべと違った方針や意見を持った人が、似た人々を集めて、サタンの会衆を作るのだ。誰々派、誰々派と、党派心をもって争い、主のしもべと他の聖徒をさばいて罪に定める。こうなると、後には分裂したりもする。

もし教会を導いている主のしもべが真理を知らなくて、真理に外れた方向に羊の群れを導いているなら、当然正さなければならない。しかし、主のしもべが真理に逆らうことを行ってもいないので、自分の主張、自分の欲望を追って分裂していくと、いろいろな悪を行うようになり、神とはかかわりのない道を行くのである。

その他の教会の組織でもみな同じである。何人かの人が主の御名によって選んで、リーダーとして立てたなら、その人が少しおけているところがある、考え方や、とりあえず一つになって、神の国を実現しなければならない。

11) 分派

「分派」とは「主となる勢力から分かれて別に一派をなすこと、また、その一派」という意味である。ここでは、キリスト教の中で、主となる勢力から分かれて別に一派をなした集団のことを指す。例をいくつか挙げてみれば、統一協会や、エホバの証人、モルモン教、すなわち、末日聖徒イエス・キリスト教などがある。このほかにも、世界には数多くのキリスト教の分派がある。

私たちがこのような分派について正しく知ることは、とても大切である。彼らも神を信じていると言つて、教会と似た形を備えているので、まかり間違えば聖徒が惑わされることもあるからだ。しかし、いくら似ているように見えても、実際には決して救いとはかかわりのない、間違った教理を持っている。

〈ガラテヤ 1:8〉に「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。」とある。分派は私たちの福音とは違う教えであり、これを宣べ伝える者や受け入れる者は、必ず滅びの道に向かうのである。

それで、〈テトス 3:10〉には「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。」とあるのだ。分派を起こす者に惑わされないように、彼らに近づくこともしないように、と教えている。

ところが、これとは反対に、福音に反することを宣べ伝えていないのに、分派を起こしたと罪に定める時も、大きい罪になる。しかも、聖霊の働きによって神の力が現れている教会や、その力あるわざを行う神のしもべを、分派を起こしたと罪に定めると、これは神

に敵対することであり、聖霊を冒涜してけがすことになり、罪が赦されない。

今日、あまりにも多くの人が福音に反することが何か正確に知らないまま、自分の意見と少しでも違うと罪に定める。私たちは、キリスト教の福音について正しく知って、惑わされることもなく、反対に、よく知らないのに罪に定めて、神に敵対してもならない。

それでは、分派の教えとは何か調べてみよう。

〈第二ペテロ 2:1〉には「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者もいました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」とある。このように、キリスト教の分派の教えは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定する、すなわち、救い主イエス・キリストを否定するのだ。

ある分派では、イエス様が神の御子でないと言っている。あるいは、イエス様が十字架で死なれたので、救い主になるのに失敗したと主張したり、救いの働きを完全に全うされなかつたので、もうひとりの救い主が必要だと言ったりする分派もある。そう言いながら、教祖が自ら救い主だと言ったり、神だと主張したりする。

私たちは『十字架のことば』をよく靈の糧としただけでも、このような分派に惑わされる理由が全くない。たとえば、なぜイエス様だけが救い主であるのだろうか？ 救い主の資格は何だろうか？

第一は、人でなければならない。

人の罪を贖う資格は人にだけある。だから、神の御姿であり、ことばであったイエス様が、人となってこの地上に来られなければならなかつたのである。したがって、もし誰かが、イエスは人として来られたので神ではないと言っても、その理由を知っている人は惑わされない。むしろ、イエス様は神の御子でありながら、救い主になるために人として来られなければならなかつたことを悟らせることができるるのである。

第二は、原罪があつてはならない。

すべての人が親と先祖から原罪を受け継ぐが、イエス様だけは、聖霊によって宿されたので原罪がない。したがって、罪人の罪を赦す資格がある。

第三は、靈的な力がなければならない。

イエス様だけが原罪もご自分で犯した罪もないで、人類を救う力を持っておられる。このような事実を正しく知つていれば、イエス様のほかに誰かが救い主だと言われても、惑わされないのである。

第四は、愛がなければならない。

それでこそ罪人の代わりに残酷な十字架の刑罰を受けて、死ぬことができるのである。「罪から来る報酬は死」という靈の世界の法則に従つて、罪人だった私たちはみな、死に

向かわなければならなかった。ところが、愛のイエス様が十字架で死なれたので、私たちの罪の代価を払って、私たちのいのちを買い取ってくださった。私たちの救い主になってくださったのである。

だから、ある分派で言っているように、イエス様が死なれたから救いに失敗したのでなく、かえって死なれたので、救いを成し遂げられたのである。自分で神を信じていると言ひながら、救い主イエス・キリストを否定する人々はみなにせ預言者であり、偽り者である。

〈第一ヨハネ2:22-23〉に「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。」とある。

また、〈第一ヨハネ4:2-3〉に「人となって来たイエス・キリストを告白する靈はみな、神からのものです。それによって神からの靈を知りなさい。イエスを告白しない靈はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの靈です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。」とある。

私たちがこのようなみことばでよく武裝しているならば、どんな惑わしもみことばで打ち碎くことができるるのである。真理を正しく知って、いつも聖靈によって目を覚ましていて、どんな話や事も真理だけで見分けなければならない。そうする時、どんな分派にも惑わされないだけでなく、神のみこころに外れるどんなことを聞いても、右にも左にもそれないのである。

12) ねたみ

ここで言う「ねたみ」とは、そねみ、嫉妬がひどく発展して、他の人にはなはだ悪を行うことである。「汚れ」の項でも、ねたみが発展して汚したことを行う場合があると説明した。

韓国の歴史を見ても、このようなことがたくさんある。宮中の女性たちが、王の寵愛を受けるために他のそばめをねたみ、相手に生まれた王子を殺すなど、あらゆる策略を企む。ねたむ対象を呪う術を使ったり、誹謗して謀略したりなど、どの時代にもこのようなことがなかった時があまりない。

優れた臣下がいて王に愛されると、その臣下もすぐねたみの対象になる。他の臣下たちが策略を使って彼を謀略して、結局は官職から追い出したり、殺したりもする。このようなことは、世界のどの国にもあることである。

中国の歴史に、ねたみによるぞっとする出来事が一つある。ある皇帝が、皇后と皇太子よりそばめとその息子を愛すると、皇后はねたみに燃え上がり、大変悪い心をいたいた。そばめとその息子に復讐するために、皇帝が死ぬ時だけを待った。

ついに皇帝が死んで、自分の息子が皇帝になると、皇后はそばめを捕らえて、その四肢を切断して、舌まで切ってしまった。しかも、ただ殺すよりもっと残忍に復讐したくて、このように体だけ残った人を治療して生かし、豚小屋に入れておいたのだ。食べ物を与えた

て、まるで豚のように扱ったのだ。そして、新しい皇帝、つまり、自分の息子を呼び、誇らしく自分がしたことを見せた。

しかし、新しい皇帝は母親とは違って、大変驚いて悲しみ、そばめの息子、つまり、腹違いの弟を守ろうと非常に努力した。その弟が食べる時も眠る時も、一時も離さないで、自分のそばにおいて守ったのだ。ところが、虎視眈々と機会を狙っていた母親は、息子の皇帝がほんのわずかの間、目を離したすきに、そばめの息子までも暗殺してしまった。

良心が正しい人ならば、こうしたことは口にすることさえぞっとすることである。しかし、ねたみに燃え上がると、人のかたちをしていても、このように獸にすぎないことが出来るのだ。

ところが、問題はこのようにぞっとするねたみという罪と悪が、結局はそねみ、嫉妬と同じように、同じ根から出ているということである。真理を喜ぶことができない心、人をそねんで嫉妬する心が少しでも発見されるなら、徹底的に捨てなければならない。

13) 酔酔

人が酒に酔えば、自制できなくなり、正しからぬことさえわきまえられなくなる。身を慎みながら聖なる生き方を追い求めるのではなく、自制せずに罪人の本性のままに行うようになる。

恥ずかしいとも思わず、おかしな行動をしたり、ぎやあぎやあ大声を出したり、けんかしたりする人もいる。言ってはならないことを言い、してはならないことをして、取り返しのつかないことをしたりもする。

ユダヤ人のタルムード（訳注：現代のユダヤ教の主要教派のほとんどが聖典として認めしており、ユダヤ教徒の生活、信仰の基となっていると言われる文書）には、「サタンがあまりも忙しくて来られないなら、その代わりに酒を送る」という言葉もあるほどだ。

もともとイスラエル地域は水が貴重で、実のなるぶどうの木が多い。それで、水の代わりに、実を発酵させたぶどう酒を飲んだ。飲んで酔うことが目的でなく、飲み物として使つたのである。

このようにイスラエルの人々がぶどう酒を飲み物としたからといって、神が酒に酔うことを許されたのでは決してない。〈箴言23:31〉に「ぶどう酒が赤く、杯の中で輝き、なめらかにこぼれるとき、それを見てはならない。」とある。酔おうという誘惑も受け入れないように、全く初めから遮りなさいということだ。

〈レビ10:9〉を見ると、アロンの子孫に「会見の天幕に入って行くときには、あなたがたが死なないように、あなたも、あなたとともにいるあなたの子らも、ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。これはあなたがたが代々守るべき永遠のおきてである。」とある。〈民数記6章〉や〈箴言31:4〉には、王や、神の御前に聖別された人には、さらに厳しく酒を禁じておられる。

人が正しい良心があるならば、神の御前で酒に酔うことがふさわしくないと自分で悟れ

る。世の人も、礼儀をわきまえるべき時や、気を遣う目上の人に対する時は、酒に酔った姿を見せないだろう。まして神の御前ではさらにそうすべきである。

今日のクリスチャンは、神の子どもとしていつも神の御前で生きている。また、聖靈が私たちのからだを聖靈の宮として住んでおられる。だから、主を受け入れて、聖靈に働きかけられれば、酒に酔うことが正しくないことをすでに心で感じるようになる。

〈エペソ 5:18〉に「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御靈に満たされなさい。」とあるように、ただ御靈の新しい酒に酔い、いつも満たされた信仰生活をしなければならない。

14) 遊興

辞書を見ると「遊興」とは「遊び興じること。特に、酒色に興じること。」とある。

世の中には、情欲的なことを楽しんで求めるだけでなく、それに完全にふけって、自制できない人がいる。そのために自分の責任が果たせず、道理をわきまえることもできなくて、人の本分さえ果たさない場合がよくある。たとえば、一家の長が酒と賭けにふけって、家庭を全く顧みないなら、家族はどれほど苦しむだろうか？

韓国の昔の農村では、このようなことも見られた。一年の農作業の収穫をしたり、あるいは一年分の賃金をもらったら、人が集まって賭博をしたりする。ところが、ただ楽しみとして少しするのではなく、気がつかないうちに賭博にはまって、一年分の収入をあつという間にする人もちょくちょくいた。時には家と財産を全部失ったり、はなはだしきは賭博をするために自分の家族まで売ったりする場合もあったのだ。

ところで、最近はいわゆる「ブランド品」と呼ばれる贅沢品のために苦しむという。自分の分に合わない数十、数百万円のバッグ、服、アクセサリーなどを、しかもカードで無節制に購入して、その代金が払えなくなるのだ。

主婦が夫にこっそりとブランド品を購入して、途方もない借金を作り、結局離婚することも聞く。カードの代金を返す方法がないから、盗む人もいて、結局、自分の命を絶つ人もいるそうだ。これは、どれほど愚かなことだろうか？ むさぼり一つも制ることができなくて、遊興に陥り、結局、災いと死の道に向かうのだ。

〈第一テサロニケ 4:3〉に「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。」とある。神の子どもたちならば、決して遊興に深入りして、自分を汚すことがあってはならないだろう。主を受け入れてからも、そのような生活を続けるなら、神の御前に自分の心をささげることもできないし、罪を捨てて聖められる力を得ることもできない。

教会に通っていると言っても、形式的に行ったり来たりするだけで、救われるようなまことの信仰を持つことはできないのだ。もちろん、新しいエルサレムを望んでいる聖徒は、このように情欲的なことを追い求めて、遊興に深入りすることはないだろう。

しかし、もっと完全になるために、このようなことも一度顧みなければならない。「私ははたして全家を通じて忠実であるのか？」「心と思いがある一方に片寄っていて、他の分野は疎かにしてはいないのか？」すなわち、あらゆる分野において、自分のすべきことをしているのかということである。

また、自分に与えられた一日一日の時間をどのように使っているのかも、一度チェックしてみる必要もある。一日の時間を計画的に使って、熱心に全家を通じて忠実に働いたら、祈る時も父なる神の恵みと力がもっとあふれるように与えられる。神が喜ばれるのを心で感じられるからである。

4. 肉を体験しなかった人の靈は完全でない

今まで肉の行いには何があるのか、肉の行いがどれほど悪くて醜いのかを一つ一つ調べてみた。信仰があると言ひながら肉の行いをすれば、救いとも直接かかわるので、比較的詳しく説明した。

いくら神を、主を信じていると言って、信仰生活を熱心にしているようでも、肉の行いを捨てなければ、結局は救われないのである。

ここでもう一つ考えてみなければならないことがある。神と交わっていたアダムが、善惡の知識の木の実を取って食べたので罪を犯して、肉にすぎないものに変わってしまった。

それなら、神が善惡の知識の木を置かれた理由は何だろうか？ 善惡の知識の木がなかったなら、アダムも初めに造られたまま、神と交わっていただろう。善惡の知識の木の実を取って食べることもせず、肉にすぎない存在に堕落することもなかつたはずだ。

ところが、あえて神は善惡の知識の木を置かれたので、アダムが肉を体験した後に、再び神と交わるようにされたのである。その理由はまさに、肉を体験しなかった人の靈は完全とは言えないからだ。

善惡の知識の木を置かれた理由については、すでに『十字架のことば』などで説明した。それは相対性を体験して悟らせるためだ、と述べた。不幸を一度も体験したことのない人はまことの幸せを感じることができなくて、苦しみを味わったことのない人はまことの平安の喜びを味わうことができない。食べ物がなくてお腹がすいた経験のある人だけが、豊かな食べ物に感謝することができ、病気にかかるて苦しんだ人は健康の大切さがわかる。

善惡の知識の木の実を取って食べる前、アダムは苦しみも、悲しみも、不幸も、体験したことになかった。エデンですべての良いものを味わっていながらも、自分が本当に幸せだと感じられなかつたのである。

だから、神と交わっていても、神のまことの子どもになれなかつたのだ。すなわち、肉を体験してこそ、まことの価値が持てるのである。

それで、神は人間耕作の摂理のうちに、善惡の知識の木を置かれて、その木の実を取つて食べるとどんな苦しみを受けるのか、アダムに全部教えてくださつた。善惡の知識の木の実を取つて食べないように禁じられたが、その結果について十分に知らせてくださいり、自由意志をもつてアダムが選ぶようにされたのである。

アダムがまことに御靈に属する人だったなら、不従順の結果によるあらゆる不幸がどれほどつらいものなのかわかつたはずであり、神に聞き従うことがどれほど幸せなのかを悟つて感謝しただろう。肉がどれほど醜くて悪いものなのか、御靈に属していることがどれほど良いのかがわかつただろう。だから、いくら善惡の知識の木の実が好ましそうになつ

いても、永遠に取って食べなかつたはずである。

しかし、肉を体験したことがなかつたアダムは、自由意志によって肉の性質を受け入れて変わつてしまふ可能性があつたのだ。だから、このような状態では完全とは言えなかつたのである。

神は、肉を体験したまことの御靈の人を願われた。神の愛に心から湧き出る感謝をささげて、永遠に変わらずに愛が分かち合える、まことの子どもを願われた。そのために善惡の知識の木の実を置いて、今日のような人間耕作を計画して行っておられるのだ。

ところが、私たちは、肉にあるままでいれば、よりいつそう価値がないといふことも必ず覚えなければならない。神が人を創造された目的は、結局、御靈に属するまことの子どもを得るためである。しかし、アダムが善惡の知識の木の実を取つて食べて、墮落して肉にすぎない存在になつたので、そのままでは人としての価値がなくなつたのだ。御靈に属さず、肉にあるままでいるなら、神と何のかかわりもなく、罪の奴隸として生きて、結局は死んで地獄へ行くのである。

このようなたとえを一度考えてみよう。チョウの幼虫は、卵からかえつてある程度の時間が過ぎると、さなぎになる。幼虫だった時は、好きなとおりにあちこちはつて動いていたが、さなぎになるとびくともせず、硬くて醜い殻の中に閉じ込められているのだ。

なぜそうするのだろうか？ 地上ではうだけの一生を終えるのではなく、美しいチョウになって、思いきり空を飛ぶためにである。チョウとしてのまことの生を味わうためにである。ところが、もしさなぎがチョウになれなくて、そのまま醜くて硬い殻の中に閉じ込められて一生を終えるなら、どれほどむなしいことだろうか？

同じように、肉に墮落してしまつて耕作を受ける人の子らも、肉にあるなら何の価値もない。肉を脱ぎ捨てて、御靈に属する存在に変えられてこそ、神が人間を創造された目的が遂げられるのである。このために神は、世界の始まる前にイエス・キリストによる救いの道を備えられた。

イエス・キリストを救い主として受け入れるなら、肉に変わつてしまつて死んでいた私たちの靈がまず生き返る。そして、毎日毎日御靈によつて靈を生んでいくほど、言いかえれば、肉を脱ぎ捨てていくほど、靈とたましいとからだがみな御靈に属する完全なものに変えられるのである。

だから、私たちが信仰生活をどうすべきなのか、ここで答えが出る。各種の礼拝に参加して、聖書の学びをして、長老、勧士、執事、区域長、教師、聖歌隊、このような務めを受けるからといって、信仰生活を正しくしているということではない。

礼拝に参加すること、忠実であることも大切だが、信仰生活の最も核心的な部分は、まさに肉を脱ぎ捨てる過程である。すなわち、先に説明した肉の行いと肉的なことをこまめに捨てていく聖潔の過程があつてこそ、まことの信仰生活をしているのであり、救われるほどの信仰があると言えるのである。

いくら長く教会に通つていて、務めを果たして忠実であったとしても、相変わらず罪と惡を捨てないで肉にあるなら、神が耕作される目的とはあまりにもかけ離れている。熱心

に農作業をしたのに、実でなく殻が出てきたようなものである。神が、その殻のような肉の人を得るために、尊いひとり子を十字架に渡してくださったのではない。

私たちが昼も夜も主を呼んで祈る最も大きい理由も、結局は肉を脱ぎ捨てて御靈の歩みに入るためである。そうする時、神が私たちを愛して、なかなか見ることの難しい数多くの不思議とするしを現されて、すべての点で祝福をあふれるまでに下さるのだ。

このように、私たちがなぜ生きていくのか、なぜ耕作を受けるのかという、人間耕作の目的を本当に悟るなら、肉を脱ぎ捨てようとする心が切実になるのである。

5. 肉の欲

それでは、今からは、どうすれば肉を脱ぎ捨てることができるのか、具体的に調べていこう。

〈第一ヨハネ2:15-16〉に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」とある。このように、肉というものは世から出たものである。

神は最初に人を靈の生きた者として造られ、その中に御靈に属するものを満たしてくださった。たとえば、真実、愛、柔軟、平和、仕え、このような真理の知識を教えて、心に満たしてくださったのである。

ところが、アダムが罪を犯して靈が死んだ後は、この世の支配者である敵である悪魔・サタンが、人に真理に逆らう知識、すなわち、肉の性質を植えつけた。憎しみ、そねみ、嫉妬、憤り、欲、姦淫、このようなものが心に入るほど、神が植えつけてくださった御靈に属するものはだんだん抜けてしまった。敵である悪魔・サタンが権威を持っている肉の世で生きていきながら、歳月が過ぎるほど、ますます多くの肉の性質が人に入るようになった。

この世から来たもの、すなわち、肉の性質を上の聖句では三つに分けて説明している。すなわち、肉の欲、目の欲、そして、暮らし向きの自慢である。私たちが肉を脱ぎ捨てるためには、まずこの三つが何かを悟って、これらがどれほど醜くて汚れていて、私たちに害になるものなのかなを、心から切に悟ればよい。

仮に私たちの目の前にコップがあって、その中にはきれいな色で香りも良い飲み物が入っているとしよう。ところが、誰かがそれは怖い毒薬だと教えてくれるなら、または、その毒を飲むとどれほど苦しむのかがわかるなら、いくらのどが渴いても、それを飲まないだろう。

そのように、まずは肉の欲と目の欲、暮らし向きの自慢がどれほど害になるかを悟らなければならない。そして、捨てられる方法を見つけて、そのまま行えばよいのだ。

それでは、まず「肉の欲」について調べてみよう。「肉の欲」とは、肉の性質に従って行

おうとする心である。

先に、「肉」とは、真理が抜けてしまった人のからだと罪の性質が結びついたものと述べた。すなわち、真理の知識が抜けていった人の心に罪の性質が入ってきて、あらゆる真理に逆らうものをいだいている状態である。憎しみ、憤り、欲、淫欲、そねみ、高ぶり、このような属性が人の中にぎっしり詰まっている。すると、自分の中にある悪い心の願うことに従って、見て、聞いて、考えて、行いたくなる。これが肉の欲である。

たとえば、自分の中にさばいて罪に定める属性があると、他人の噂を聞くのが好きになる。聞いて、伝えて、ひそひそと話すことがおもしろく感じられる。肉の欲に従わないようになると、つまり、聞かないで他の人に伝えないとすると、口がかゆくてむずむずするのだ。

心に憤りがあれば、気を悪くすることがあったとき、怒ると胸がすっとする。怒りを我慢して肉の属性に従わないようになると、はらわたが煮えくり返ってあまりにも苦しいのだ。高ぶりがあるので、その属性に従って仕えられたくなり、自分を表して自慢しようとする。むさぼりがあるために、他人に害を与えてでも不正な財物を集めようとする。

ところが、たとえ初心の者であり、信仰が弱くても、聖霊に満たされて祈って、聖徒の交わりによって恵みを受け、聖霊に満たされている時は、肉の欲が簡単に働かない。心の片隅で肉の欲が働き出しても、直ちに真理で退けることができる。

もし祈りをやめて聖霊に満たされなくなれば、敵である悪魔・サタンが肉の欲をあおるような隙を作ることになる。だから、肉の欲を遮るために大切なことは、一瞬も聖霊に満たされない隙がないようにすることである。それで、肉の性質に従おうとする心より、御霊に属するものを追い求めようとする心を持ち続けるように、自分を守らなければならぬ。

そのためには、絶えず火のように祈らなければならない。〈第一ペテロ 5:8〉に「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」とあるように、いつも靈的に目を覚ましていなければならない。

自分では「信仰がある」と思っている働き人であっても、このみことばを心に留めなければならない。いくら忙しく神の働きをしていても、絶えず祈らないと、聖霊に満たされなくなり、肉の欲が働く隙を作るようになる。それで、心で罪を犯したり、まかり間違えば肉の行いをしたりするようになる。絶えず祈らないので、神の働きを進めているといいながら、肉の思いが働いて、誤った道を選んだりもする。

だから、神の御子であるイエス様も、この地上では、絶えず祈る模範を見せてくださった。イエス様は、時には召し上がる時間や休まれる時間さえないほど忙しかったが、絶えず祈られたので、いつも父と交わっておられた。だから、その摂理を成し遂げていかれたのである。

もちろん、肉を全部脱ぎ捨てて聖められたなら、祈りの量が満たせなかつたからといって、肉の欲が働くことはない。もちろん、聖められた人は、祈りをやめることもないだろ

う。御靈に導かれて肉の性質を治めて従えるので、肉に負けて罪を犯すことはない。目に見える肉、すなわち、身体までも強くなる。

聖められた人は、もう肉の欲を遮るために祈るのではなく、もっと御靈に感じて動かされて満たされ、力を授けられて、神の国を大いに実現していくために、火のように祈るのである。

ところで、このように肉を脱ぎ捨てていく過程で、とても重要なことがある。それは、これ以上世から肉の性質を受け入れてはいけないということだ。これは「目の欲」を遮る時にできることである。

6. 目の欲

「目の欲」とは「目で見て、耳で聞いたことを通して心が揺れ動き、肉の性質を追い求めるようにさせる属性」のことである。人は、生まれて成長する間、見て、聞いて、感じる一連の過程で、心に目の欲が入ってくる。すなわち、見聞きするすべてが心に働いて、感じとなり、それによって目の欲が生じるのである。一度も感じしたことのないものは、いくら見て聞いても、別に何の感じもない。

たとえば「真っ赤に熟れたりんごがどんなにやわらかくて甘かったのか」という言葉を聞いたとしよう。この時、りんごというものを見たことも食べたこともない人は、そのような言葉を聞いても、食欲がわからない。しかし、以前、よく熟れたりんごを食べて、「おいしい」と感じた人は、そのような言葉を聞けば、もう唾が出てくる。以前、食べたことのある記憶が浮かび、もう一度食べたいという欲求が生じるのである。その欲求が強く働くと、店に行って買って食べるという行いが出てきたりする。

目の欲も同じである。何かを見るとき、肉的な感じとともに受け入れたなら、次に似た場面を見ると、以前と同じ感じを呼び出す。直接見るのではなく、それに関する言葉を聞くだけでも、以前の感じが思い出されて、そのために目の欲が誘発されることもある。目の欲を遮らないで受け入れ続けると、肉の欲を誘発するようになり、結果的に罪を犯すようになるのだ。

聖書を見ると、ダビデ王が目の欲を受け入れたので、大変な試練を招いた記述がある。ダビデが王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女がからだを洗っているのが屋上から見えたが、その女は「非常に美しかった。」と書いてある。女性がからだを洗っているのを見ても、直ちに他に視線をそらせて見なかつたなら、それ以上の罪に発展することはなかつたかもしれない。

ところが、ダビデはそうしなくて、見ることを通して目の欲を受け入れた。それで肉の欲が働き、その女性が他人の妻だと知っていたながら召しいれて、後にはこれを隠すために、忠実な民を異邦人の手で死なせるという罪まで犯した。

その結果、どうなつただろうか？ 神にはなはだ責められただけでなく、悔い改めた後にも、罪に対する報いとして、多くの恥と訓練を受けなければならなかつた。一瞬の目の欲を遮らなかつたので、大変な苦しみの歳月を送らなければならなかつたのである。

〈ヨシュア 7章〉に出てくるアカンも、目の欲のために、死の道へ向かった人物である。カナンを征服する過程でエリコ城を攻略するとき、神はその城から得るすべて戦利品を聖絶のものにするように命じられた。ところが、アカンは、その中の、シヌアルの美しい外套一枚と、銀と金を見て、目の欲が働き、それらを隠しておいた。

このひとりの罪によって、神がイスラエルに御顔を背けられて、イスラエルは次の戦いで多くの死者を出して、敗れてしまった。アカン自身も、その罪が明らかにされて、石で打ち殺されてしまったのである。一瞬のうちに目の欲が入ってきて、むさぼりを追って盗みましたが、その結果は、立ち返ることができない死の道だったのだ。

小さい子どもたちが暴力的な漫画や映画を見ると、遊ぶ時にもたたいて物を壊すなど、暴力的な行動をするようになる。悪いことを見るので、自分の中の悪が揺れ動くのだ。おとなも同じである。仮に、酒をやめようとする人が職場の同僚と酒場に行って、他の人が酒を飲む姿を見て、またそのにおいをかぐなら、どうだろうか？ その杯を見ておいをかぐと、心が揺れ動くのではないだろうか？

だから、〈箴言23:31〉には「ぶどう酒が赤く、杯の中で輝き、なめらかにこぼれるとき、それを見てはならない。」とあり、目の欲でさえ遮るように言われているのである。そうしなくて、目の欲を受け入れ続けるなら、肉の欲が力を得て、罪を捨てるのがあまりにも難しく感じられるのである。

したがって、肉の欲を捨てるためには、まず目の欲を徹底的に遮らなければならない。真理でないものは見ても聞いてもいけないし、真理に逆らうものに接しそうな場所は、全く行かないほうがよいのだ。

いくら祈りをやめないでも、断食して徹夜で祈って肉の欲を捨てようと努めても、目の欲を遮らないでいるなら、肉の欲がさらに力を得て働くのである。だから、肉の欲が簡単に捨てられないし、罪と戦うことがつらくて難しく感じられるのだ。

たとえば、戦争で城の中にいる兵士が城の外から支援軍や支援物品を供給されるなら、戦う力を続けて得る。城の外からいくら攻撃しても、城の中にいる敵軍を滅ぼすことはやさしくない。

だから、敵軍を滅すためには、まずは城を包囲して、支援軍と食糧、武器などが供給されないように、完全に遮らなければならぬ。そのようにしておいて攻撃を続けると、結局、城の中にいる敵軍が全滅するのである。

ここで「城の中にいる敵軍」が自分の中の真理に逆らうもの、すなわち、肉の欲とすれば、「城の外の支援軍」は目の欲である。支援軍を遮断するように、目の欲を徹底的に遮つてこそ、祈って断食して罪を捨てようとする努力がすみやかに実を結ぶようになる。

もう少しやさしいいたえを挙げてみよう。汚い水が入った器の中に、きれいな水を注ぎ続けると、結局はきれいな水に変わる。しかし、もしきれいな水を注ぎながら、同時に汚い水も入れるなら、どうなるだろうか？ いくら時間が経っても、器の中の水がきれいになりにくい。

同じように、目の欲を通して肉の性質を受け入れ続けるなら、聖められるためにいくら努力しても、変えられるのが遅くなるのである。ひょっとして、罪を捨てることが難しいと思うならば、一度考えてみなければならない。見て、聞いて、目の欲を受け入れ続けながら、罪が捨てにくいと言ってはいないだろうか？

目の欲を遮ることは、自分の意志でもいくらでもできる。捨てられないのではなく、自分が捨てないだけなのである。だから、本当に聖潔を慕って、父なる神の愛と祝福を慕い求めるなら、すべての目の欲を徹底的に遮るべきである。肉に属することは見ることも、聞くこともせず、世でそのようなことに接しても、決して心に受け入れないようにしなければならない。

7. 暮らし向きの自慢

「暮らし向きの自慢」とは、「現実のすべて享樂を追い、自分を表すために自慢しようとする属性」のことである。他の人の前で自慢したくて、自分を表したいので、さまざまな肉に属することを追い求めるのだ。

世の人々が集まって話をするのを聞いてみると、自慢話が本当に多い。お年寄りが集まると、「昔、自分はこんなに大した者だった」と言ったり、家系の自慢、子どもからのプレゼントの自慢、孫たちがかわいくて賢いなどの自慢が話題のほとんどである。

女性が集まれば、夫の自慢をしたり、高い服や家、宝石などを自慢したりすることが多い。自分の容貌や才能についても、それとなく自慢して、他人がわかってほしいと思ったり、時には権威のある人や有名な人と親しいと自慢したりする。

このように富と栄華、知識、才能、容貌などに価値を置く人々は、これらをもって世で認められるために、懸命に暮らし向きの自慢を追い求めていく。真理と善と永遠のものに価値を置くのではなく、世で自慢するようなものに価値を置いて、これらを得るために悪い方法をも辞さないのである。財産や権力のために他の人をだましたり、他の人のものを奪つたりする。競争相手を謀略したり、卑怯な計略を使つたり、わいろと暴力を使つたりするなど、手段、方法を選ばない人もいる。

しかし、このように真理に逆らう方法で良いものを手に入れて自慢するとしても、それが何の益になるだろうか？　〈詩篇103:15〉に「人の日は、草のよう。野の花のように咲く。」とある。この世で自慢するどんなものによっても、まことの価値といのちを得ることはできないのだ。

〈ルカ16章〉に出てくる金持ちを見ても、よくわかる。金持ちはこの世では多くの召使いに仕えられて、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。しかし、神を信じなかつたので、死んだ後は、下のよみの炎の中で刑罰を受けるようになった。

この地上でいくら多くを持っていたとしても、死んでからは、舌を冷やす水一滴さえ得られない、惨めな立場になってしまったのだ。だから、以前に持っていた富と栄華は本当にむなしくて、何の価値もないのである。

イスラエルの王として大いなる富と栄華を味わったソロモン王も、ついに人生の黄昏時

には、このように告白している。〈伝道の書1:2-3〉で「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」と言っている。世の栄華からは永遠のいのちが得られなくて、まことの満足も得られないことを悟ったのである。

しかも、世で得た富と栄華は、いくら多く持っていても、あつという間に崩れることもある。歴史を見ても悪い方法で暮らし向きの自慢を求めていった権力者たちは、その末路が本当に悲惨なことが見られる。一時は、飛ぶ鳥も落とす権勢をふるっていた人々が、今はその力を失って、民にうしろ指を指されて隠れて生きる場合がある。

事業家が権力者にわいいろを送ったり、不正な方法を使ったりして、かえってもっと苦しむこともよくある。自分を誇示するために自分の分に合わない贅沢をして、経済的に大変困ってしまうこともある。

また、暮らし向きの自慢を追い求めて、自分を表す人は、高ぶりのために周りの人々と不和になり、そねみ、嫉妬の対象になったりする。これらよりもっと大きい問題は、神が暮らし向きの自慢を求める人を遠ざけて、助けられないことである。

〈箴言16:5〉に「【主】はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。」とあり、〈ヤコブ4:16〉には「ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。」とある。

聖書を見ると、このように悪い方法で自分の誇りを求め、神に捨てられて滅ぼされた人々が出てくる。そのうちのひとりが、まさにイスラエルの初代王だったサウルである。初めに王に立てられた時のサウルは、自分を高めようしたり、王になろうと叫んだりしたのではなく、むしろ遠慮して隠れる人だった。

ところが、一度王となり、王の権力を味わうと、後には自分の栄光のために神の命令にさえ逆らう人に変わってしまった。ある時は、神がサウルにアマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよと言われた。それで、サウルはアマレクを攻撃はしたが、アマレクの羊と牛の最も良いものを生かして、アマレク人の王アガグを生けどりにして来た。

肥えた羊と牛の良いものを見ると、惜しいと思うようになり、また、敵軍の王を生けどりにしてくると、自分の勝利をさらに輝かせそうだったからである。むさぼりと暮らし向きの自慢があったので、神に聞き従わなかったのだ。それで、神は預言者サムエルを遣わして、その不従順のため、神がサウルを捨てられたことを知らせてくださった。

するとサウルはどうしただろうか？　すぐに悔い改めて、へりくだった姿で神に赦しを求めただろうか？　サウルはそうしなかった。〈第一サムエル15:30〉に「サウルは言った。『私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。どうか私といっしょに帰って、あなたの神、【主】を礼拝させてください。』」とある。

サウルが今「私は罪を犯した。」と言ってはいるが、いざその心はというと、へりくだっているのではなく、悔い改めて赦されようとする心でもなく、かえって自分が高められることだけに関心がある。

だから、預言者サムエルに、自分といっしょに帰って、民の前で自分の面目を立ててくれるようになるとだけ、しつこく願っているのだ。サウルは、結局、神から赦しの機会を頂か

ずに、後には異邦人との戦争に負けて、悲惨な死を迎えた。

名譽を求めて、面目を立てようとしたが、それによって自分のいのちを失ってしまったのだ。結局、暮らし向きの自慢を求めたことは、むなしいことだった。この地上ではたとえ彼が王だったとしても、地獄に行っては何の意味もない。

このように、暮らし向きの自慢を求めて、自分を高めようとするることは、靈的に見ると、何の益にもならないだけでなく、神の御前に罪を犯すようになり、むしろ滅びを招くようになるのである。

ところで、〈第一コリント 1:31〉に「誇る者は主を誇れ」とある。これは、むなしくて無益な暮らし向きの栄光を求めて、自分を高めようとするのではなく、生ける神の栄光を誇りなさいという意味である。つまり、私たちを救ってくださった主の十字架を誇り、私たちのために備えられた天国を誇るのである。また、神が下さった恵みと祝福、栄光、このようなものは、思いきり誇らなければならない。

神が下さる祝福と栄光は、変わったり朽ちたりするのではない。この地上でも、天でも永遠であり、本当に価値あるものである。このようなものを求めて誇るのは神に栄光を帰すことであり、私たちのたましいに幸いを得て、天の報いを受ける道である。

このような主にあっての誇りは、神に栄光を帰すだけでなく、それを聞く人に信仰と希望を植えつけて、靈的なことを慕う熱い心を植えつける。それで、教会でも、主にあって熱心に忠実に仕えた人や、神の栄光を大いに現した人は、聖徒の前に知らせてほめたり、賞を与えてたりする。

また、主を真実に信じられるように、神に会って体験できるように、道を開いてくれるまことの教会と牧者を誇るだろう。ところが、この時も、私たちが真理に変えられて、誠実で真実に生きていくほど、その口の話が世の人々にも権威があり、それだけ神の栄光が現れるのだ。そして、世の栄光がどれほどむなしいかわかるので、世の名譽や知識、権勢、財物があるからと言って、それで叫ぶことはあまりないのである。

ところが、ある場合は、教会の中で信仰生活をしながら、暮らし向きの自慢があるのに、自分では悟れない人がいる。明らかにうわべでは主にあって誇っているように見えるけれど、その心の深くでは「私はこんな人だ」と自分が認められたい意図が入っている。

たとえば、「私は教会に来て長くなったり、いろいろな務めも持っている」、あるいは「私は靈的に多くの奥義を知っている」と言ったり、「御靈の人と親しい」などと言ったりして、それとなく自分が高められ、他の人々が自分を認めてほしいと願うのだ。

また、何か靈的なことを聞いて知るようになったり、靈の目が開かれて何かを見たりするので、他の人にその内容を伝える時も、自分がどういう心で話しているのか見極めなければならない。

人と恵みを分かち合うために、また、主に栄光を帰すために伝える人ならば、本当に伝えるほどの状況なのかわきまえて、聞く人の信仰水準と心を考えて伝える。〈ローマ15:2-3 節前半〉に「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかつたのです。」とあるように、徳を高める話をするのだ。

ところが、ある人は「私はこんなに靈的だ。こんなに主を愛して、牧者を愛する人だ」と言って、自分が認められたいと願う心から話を伝える。このような時は、その伝えることが徳にならないで、自慢になってしまふのだ。

また、別の例を挙げると、ほめられる時と責められる時、自分がどんな姿なのか考えてみても、暮らし向きの自慢を求める心があるのかがわかる。暮らし向きの自慢を求める心がないならば、ほめられるからといって調子に乗ったり、責められるからといって気を落したりしない。ほめられる時は、さらにへりくだつてもう一度自分を振り返るし、責められる時は、自分が変えられるように悟らせてくれたことに感謝して、もっと熱心に努力していくだけである。ひょっとしてでも自分が認められて高められようとする心が入ってこないように、自分の言葉とを行いを振り返ってみなければならない。

第4章

肉を脱ぎ捨てる方法

1. 目の欲を遮り、肉の行いを断ち切り、心にある罪の性質まで捨てる方法

これまで「からだ」「肉」「肉的なこと」「肉の行い」、また「肉の欲」「目の欲」「暮らし向きの自慢」などを詳しく説明した。これらはすべて朽ちて醜い肉の性質であり、これらを捨てる時でこそ、肉を脱ぎ捨てて御靈の人に変えられるのである。

それなら、どうやって捨てられるだろうか？ ごみは拾ってごみ箱に捨てればよく、体についていた汚物は石けんで洗い落とせばよい。そのように自分にある肉の性質も、発見したらすぐ捨てればよいのである。

その方法について具体的に調べる前に、まず、人に肉の性質がどのように入ってきたかを知らなければならない。

初めに創造された時のアダムとエバは、神のいのちの息が吹き込まれて、生きものになったと述べた。ところが、彼らが蛇に惑わされて不従順という罪を犯したので、肉の人に変わってしまった。この時から神との交わりが途絶えて、敵である悪魔・サタンが人を支配していきながら、その心にだんだん罪の性質を植えつけた。まるで白紙に汚いしみをつけていくように、真理で満たされていた人に、憎しみ、そねみ、憤り、欲、高ぶり、姦淫、このようなものを植えつけたのだ。

人の罪の性質は、子どもと子孫にも受け継がれる。両親の体質と性格、あらゆる気質は、神が下さったいのちの種である精子と卵子に含まれていて、子孫代々に伝えられる。両親の罪の性質も、子どもに受け継がれるのである。だから、アダムのすべての子孫は、生まれた時から罪の性質を持った罪人である。

人は罪の性質を持って生まれるだけでなく、自分でも数多くの罪の性質を受け入れていく。まるで磁石が鉄を引きつけるかのように、肉の人は肉に属するものを必要とするようになり、それが甘美に思われて、ますます求めていく。だから、だんだん肉の人に、よりいっそう真理に逆らう人になっていくのである。

このように変わってしまった肉の人が、聖められて御靈の人になるためには、どうすればよいだろうか？ 以前に世で一つ一つ受け入れてきた肉に属するものを、反対に一つ一つ捨てなければならない。

最も先にすることは、目の欲を遮ることである。すなわち、真理に逆らうものは、見ることも、聞くこともせず、これ以上心に受け入れないことである。目の欲を遮らないと、相変わらず肉に属するものを見て、聞いて、受け入れるから、いくら肉の性質から解き放

たれて罪を捨てようとしても、思いのままにならないのだ。

目の欲を遮ったなら、その次は、肉の行い、すなわち、行いで罪を犯すことを断ち切らなければならない。盗んだ人は盗んではいけないし、偽りを言っていた人は偽りを捨てるべきである。人に悪口を言って殴っていた人も、そうしない人に変えられればよいのだ。

肉の行いをしないだけでも、人が見て「あの人は本当にいい人だ」と認めるようになる。ところが、神が子どもたちに望まれるのは、行いで犯す罪だけを捨てるのではなく、心にある罪も捨てることである。

〈第一ヨハネ 3:15〉に「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」とあるように、行いとして憎しみが現れなかつたとしても、心で相手を憎んでいるなら、神がご覧になる時は、これも悪なのである。

人が肉の行いをして罪を犯すなら、敵である悪魔がさまざまな災いというかたちで試練、患難をもたらす。肉の行いを犯した人は、明白な悪を行い、自ら闇に属するようになるので、敵である悪魔が訴えると、神がその人を守ることがおできにならない。

ところで、肉的なことを考えていれば、肉の行いをした時のように試練や患難がやって来るのではないが、心にある罪の性質までも捨てられるように、訓練を受けることを神が許されるのである。

たとえば、ある人が自分を憎んで、礼儀に反する行いをして、おおっぴらに無視するなど、とても困らせるとしよう。それで自尊心が大変傷ついて、相手があまりにも理解できないで、その人のために気に障ることが起り続ける。

ところが、もし自分に憎しみも憤りもなくて、敵をもいだいて相手の利益が求められるなら、このようなことが起るはずがない。相手がどんなことをしても理解して、相手の立場から考へるので、相手のために苦しむこともない。いつも相手を心にいだいてその利益を求めるから、結局は神が悪い人の心をもつかさどられ、平和をつくるように導かれるのである。

しかし、相変わらず自分の中に悪があって気を悪くするなら、神が肉の人をそばに置いて練られる場合がある。だから、何かの訓練を受けるとき、自分を振り返って、喜んで感謝しながら変えられ、すみやかに通り抜けるなら、それが賢い人である。

また、人には、自分自身は知らない、深い本性の中に潜んでいる真理に逆らうものがある。行いや思いで罪を犯さないで、善を追い求めて生きる人であっても、深い心の中に隠れている罪の性質までは、自分では発見して捨てるとはできない。だから、これについても神は特別に練られ、それが現れるようにして、発見して捨てるように導かれるのである。

人が雑草を取り除こうとしても、根はそのままにして葉と茎だけを抜くなら、時間が経つにつれて再び雑草が育つ。根の根まで完全に抜き取ってこそ、その雑草を取り除いたと言えるだろう。同じように、人が行いで罪を犯さないで、すぐは心に悪をいだかなかつた

としても、根にある罪の性質そのものを心から抜き捨ててこそ、再び罪を犯さないのである。

ところが、心にある罪の性質を捨てるとは、人の力でできるのではない。肉の行いは、強い意志で努力すれば断ち切ることができると、肉的なことを考えるのも、ある程度自分の力で制する人がいる。しかし、本性にある真理に逆らうものと罪の性質そのものは、自分で発見して捨てることができないし、原罪は自分の力で赦されることもできない。

完全に罪の性質を捨てるためには、人の努力だけでできるのではなく、その他に三つの要素がなければならない。すなわち、神の恵みと力、そして、聖霊の助けが必要である。

もちろん、このような恵みと力を受けて、そして、聖霊に助けられるためには、必ず自分の努力という行いがなければならない。本当に罪を捨てようと心を尽くして祈って、断食しながら神に切にすがると、神が恵みと力を下さって、聖霊が助けてくださるので、この四つがともに働き、罪の性質が捨てられるのである。

ここで覚えるべきことは、人が罪を捨てる能够性は、根本的にイエス・キリストの血によって信仰で罪が赦される、救いの道が開かれたからだということである。時々、世の中には、主を信じない人々の中にも、修練によって心が治められるようになって、世に対する欲を断ち切ったという場合がある。こういう人を「悟りを得た」と表現したり、多くの人から「聖人だ」と尊敬されたりする。

しかし、仮に自分で本当に心が治められて、自分の意志で罪を犯さない人がいても、人はすでに原罪を受け継いで生まれたのだし、本性の中に罪を持っているので、その人は相変わらず肉に属しているのだ。また、以前に犯した罪は解決されずに残っているので、相変わらず罪人なのである。

しかし、主を信じる人々は、信仰によって義と認められて、原罪はもちろん、自分で犯した罪もみな赦される。また、罪が赦された人の心にこそ聖なる御霊が住まわれて、一つ一つ罪を捨てていき、ついに聖められるまで助けることがおできになるのだ。

それでは、もう少し具体的に、私たちが努力するとどのように神の恵みと力を受けて、聖霊に助けられるのか調べてみよう。

たとえば、御霊の九つの実の説教で「平安」について聞いたとしよう。平安とは、どんな人とも平和をつくっているので安らかな心になったことである。それは、真理にあってであれば、自分の意見に固執しないで、これもあれも正しいと思えるので、平穏な心でもある。また、自己的方法のほうが正しくても、相手の信仰と都合に合わせられて、自分を前に出さない心である。

このようなみことばを覚えて、神の御前で一つ一つ祈っていけば、聖霊が自分を発見するように悟らせてくださる。いつ、誰との関係で平安でなかったのか思い出して、それが自分のどんな心から出たのか、悟らせてくださる。「私にこんな高ぶりがあったんだ。自分の悪と義のために相手をつらくさせたんだ。私は相手が悪くて信仰がないと思ったのに、実は、私がこのように叫ぶ心だったんだな」と細かく発見するようにしてくださるのだ。

すると、その悪があまりにもいやで恥ずかしく、今すぐにでも捨てたい心が切実になる。

このように聖霊が助けてくださって、自分を悟って悔い改めるなら、それがすなわち、神の恵みが臨んだということである。その悟った内容を覚えて、それから力を求める。「父なる神、私の中にある平安を保たないようにする高ぶりと、義と、叫ぶ心、これらをすべて捨てられるようにしてください。次からは、誰ともどんな状況でも穏やかであるようにしてください」と、一つ一つ主を呼んで祈っていくのである。その心が切実なほど、定めて祈ったり、徹夜して断食しながら祈って主にすがったりするのだ。

そのように心から祈り求めて努力すると、上から神の力が臨み、心が変えられる。まるできれいな水で垢が洗い流されるように、心の罪の性質が捨てられて、きよい、御霊に属する心に変えられるのである。

前は自分の義のため、相手を傷つけることを言いそそうだった状況になっても、今は聖霊が「そうしないで」と悟らせてくださるので、もう一度考えるようになり、相手に恵みと徳になる表現で話をするようになる。前は「ムッ」と憤るようなところでも、今はすばやく「こうしたら悪だ」と自分で心が守れるようになる。

このように1か月前と今日が変わってきて、さらに1か月が過ぎるとまた別の姿にと、だんだん平安の実が美しく結ばれていくのだ。ついには、そのような一瞬の揺れもなく、いつも平安であるようになるのである。

このように平安の実が結ばれるなら、ひょとして自分の利益に合わないで、自分の主張が受け入れられなくても、平安であるということだけでとても幸せで楽しいのだ。平安を保てなくするような憤りと欲、固執、高ぶり、このような肉の性質があまりにもいやになるので、何としてでも自分の意見を通そうともしない。

他の罪と悪も同じである。自分が努力しているうちに、神の恵みと力を受けて、聖霊に助けられると、結局は罪と悪をすべて捨てて、御霊に属する心になれるのである。

〈ヤコブ1:23-25〉に「みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどうであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」とある。

鏡を見て髪が乱れているなら、とかすはずだし、顔に何がついているなら、拭き取るだろう。ただ「何かついたんだ」と背を向けて忘れてしまうなら、鏡を見たとしても変わったところがない。

靈的にも同じである。私たちが真理のみことばを学んだら、御霊の人に変えられるために努力をしなければならないし、恵みを受けて、まるで鏡を見たように自分の姿を悟ったなら、その次は力も受けて変えられなければならない。

切に願うからといって御霊の人になるのではなく、5年以上、10年以上みことばを聞いて、恵みをたくさん受けたからといって、自分を悟ったからといって、それだけで御霊の人になるのではない。聞いた真理のみことばを、自分に照らして悟って、その悟りを自分

のものにして、肉の性質を捨てていってこそ、御靈の人になれるのである。

2. 最も大きい罪の性質を集中的に捨てる方法

ここでは、肉の行いを捨てて、肉的なことを考えない方法を、もう少し具体的に説明しよう。

聖書を見ると、「何々をしなさい」「してはいけない」「捨てなさい」「守りなさい」このような神の命令がたくさんある。たとえば、祈りなさい、愛しなさい、へりくだりなさい、仕えなさい、さばいてはいけない、そねんではならない、人を殺してはいけない、姦淫を捨てなさい、高ぶりを捨てなさい、安息日を守りなさい、などの命令がたくさん出てくる。

ここで「してはいけない」「捨てなさい」と言われたみことばを一つ一つ心に留めて、聞き従うなら、これが肉の性質を捨てることになる。そして、「しなさい」「守りなさい」と言われたみことばに聞き従うなら、心に靈の知識、すなわち、真理を入れることになる。

農夫が雑草の生い茂った畠で収穫をするためには、まず雑草を抜いて、種を蒔かなければならぬ。「してはいけない」「捨てなさい」と言われたみことばに聞き従うと、これは心の地から雑草を抜くのと同じである。そして、「しなさい」「守りなさい」と言われたみことばを守ると、心の地に真理の種を蒔くのと同じである。

真理に逆らう雑草を抜きながら、真理の種を蒔く——このような作業を信仰で行い続けるなら、さまざまな御靈に属する実が結ばれるようになる。御靈の九つの実、愛の章にある愛の実、光の実などの実が一つ一つ結ばれるのだ。そうすると、いつの間にか御靈の人を変えられているのである。

ある人は「私の中には捨てられないものがあまり多いのに、いつ全部捨てられるんだろう」と、初めからあきらめようとする。しかし、気を落とさなくてもよい。いくら真理に逆らうものが多くても、その中で最も大きいものを目標にして捨てればよいのである。自分にとって最も大きく見える罪の性質をつかんで集中的に攻めるのだ。

大きい木を抜くといつても、根を一本一本全部抜かなければならないのではなく、大きい根だけを抜くなら、残りの小さい根は一緒に抜ける。そのように、自分の中で最も大きい罪の性質を捨てるなら、残りははるかにやさしく捨てることができる。

たとえば、自分の中で最も大きい罪の性質が憎しみならば、憎しみを捨てるという祈祷課題を握って、火のように祈って断食して、同時に、憎しみと反対である愛を行えばよい。前は憎んだ人に対して、反対に愛の行いを見せて、真理の種を蒔くのである。手でも取つて笑いかけ、何としてでも相手の喜ぶことを探して、相手が要求しなくとも先にわかって仕えるのだ。

こうして憎しみが捨てられる一方で、変わらない靈の愛が心に臨むようになると、他のさまざまな真理に逆らうものも捨てられたことがわかる。靈の愛が心に臨むと、そねまず、憤らず、自分の利益を求めることもしない。礼儀に反することもせず、さばいて罪に定めることもしない。

「憎しみ」という大きい根を抜き取って、愛が心に臨むと、このような小さい根のような真理に逆らう要素までも同時に消えるのである。このように一つ一つ捨てていけば、いつの間にか「このように聖められたんだなあ」とわかるようになるのだ。

このように肉の性質、すなわち、真理に逆らう要素を全部捨てると、人のからだも、肉に属するからだでなく、御靈に属するからだに変わる。しょっちゅうあれこれ病気にかかって、空腹と疲れにも耐えられない弱いからだでなく、強いからだに変わるのである。

たとえば、聖靈を受ける前のペテロは、眠氣にも勝てなかった。イエス様が十字架につけられる前日の夜、ペテロとふたりの弟子を連れて、ゲツセマネへ行かれた。十字架の苦しみに耐えるために祈りながら、弟子たちにも目を覚ましているように言われた。しかし、弟子たちはしばらくして眠ってしまった。

すると、〈マタイ26:40-41〉で、イエス様はペテロに「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」と言われた。

ここで「肉体は弱い」とは、しばしば人が思うように、ペテロのからだが弱いという意味ではない。むしろペテロはがっしりした漁師出身で、他の人よりも体力があるほうである。それでは、ここで「肉体は弱い」とは、どういう意味だろうか？　これは、まだ聖靈を受けていないペテロが、いまだに罪を全部捨てなかつた人であり、御靈に属するからだになつていなことを意味している。

肉を脱ぎ捨てて御靈の歩みに入ると、たましいやからだが靈に従う。だから、からだがいくら疲れていても、目を覚ましていたい時は眠らずにすむ。当時のペテロは、たとえからだのがっしりしたおとなだったとしても、まだ肉の性質を全部捨てていなかつたので、いくら目を覚ましていたくても、疲れ、怠けなどの肉の性質を制することができなかつたのだ。

また、ペテロは、イエス様が捕えられた後は、一瞬の恐れから愛するイエス様を「知らない」とまで言った。これも肉体が弱かったからである。つまり、靈でたましいが治められたなら、十分に恐れを克服することができたはずなのに、そうできなかつたので、恐れに屈服して「知らない」と言つてしまつたのだ。

ある人はこのようなペテロの姿を引き合いに出して、自分の過ちを正当化しようとする。「イエス様の一番弟子も眠氣に勝てなかつたのに、ペテロも主を知らないと言つたのに、私のような者が過ちを犯すこともあるだろう」と言うのだ。

しかし、これは正しくない。ペテロの肉体が弱かったのは、聖靈を受ける前だったからである。聖靈を受けて肉の性質を捨ててからは、弱いので疲れたり、病気にかかつたりするのではなく、むしろ多くの人々の病気とわずらい、悪靈につかれた人も治して、はなはだしきは死んだ人も生き返らせる神の力あるわざを行つた。そして、自ら願つて十字架に逆さにつけられるまで、すべての苦しみを恐れずに耐えられる、強くて大胆な人に変えられたのである。

聖靈を受けた人も、心が聖められるほど御靈に属するからだに変えられていく。完全に聖められていなくても、御靈の人に変えられていくほど、前は弱かった人も神は強くしてくださるのだ。「たましいに幸いを得ているように、すべての点でも幸いを得て、健康であるように」というみことばどおりになるのである。

このように健康になった証しには次のようなものがある。病気と身体の障害がいやされた。お年寄りが若返りした。つまり、前は脚の力がなくてよく倒れ、からだが弱くなるとあちこちがいつも痛かったのに、年を取るほど、かえってもっと健康になり、丈夫になった。青年でも、つらいほどの階段を上がり下がりしてトラクトや教会の新聞を配っても、全然つらくない。

毎日主を呼んで祈りながら、肉の性質を捨てていきながら、聖靈に満たされる信仰生活をすると、弱かったからだもこのように健康になり、神のみことばがまことであることを確認するのである。

第2部 たましい

〈第二コリント 10:3-6〉

「私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。

私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、

神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。

私たちは、さまざまの思弁と、

神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、

すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

また、あなたがたの従順が完全になるとき、

あらゆる不従順を罰する用意ができているのです。」

ここからは、たましいについて説明する。このような内容をよく糧とすると、自分のたましいの働き、すなわち、思いを制する方法がわかるようになる。

たとえば、人があることを考えないように努力しているのに、ずっとそのことが思い浮かんで苦しむことがある。このような時、たましいとたましいの働きについて正確に知っている人は、自分が願わないなら、そのことが思い浮かばないように、思いを制する方法がわかるのだ。

また、ある人は、憎んでいた人を愛そうとしても、実際にその人を見ると憎しみの感情が先に浮かび、愛するのが難しいと言う。この時も、自分のたましいの働きについて正確に知っているなら、憎んでいた人を愛することがもっとやさしくなる。

だから、私たちが聖められることにおいても、このたましいの働きを知って制することがとても大切である。先に学んだからだについての内容は、ある面では、このたましいについて学ぶための準備のようなものだった。たましいについて学んだ後、次に靈について学ぶと、聖められて御靈の人に変えられるのにより大きい力が得られる。それゆえ、自分のたましいについて正確に知って、たましいの働きを真理で制さなければならない。

第1章

たましいとたましいの働き

1. たましいの定義

「たましい」とは何だろうか？　辞書を見ると、「たましい」についていろいろと定義している。「人の肉体に宿る精気。たましい。靈魂。特に陽の魂をいう」と説明したり、「ころ。精神。」とも言ったりする。

しかし、このような説明は正確ではない。目に見えない精神的なこと、靈的なことについては、人の力では究明することはできない。このような靈的な内容については、神が教えてくださってこそわかるのである。

それでは、神が教えてくださった「たましい」の定義は何だろうか？　人の頭には脳があって、その中には記憶装置が入っている。そして、人が育ちながら得た知識、すなわち、見て、聞いて、学んで体験した数多くの内容がこの記憶装置に保存される。このように保存された資料、すなわち、記憶された内容を再び取り出すのが「思い」である。「脳の記憶装置と、その中に記憶されている知識、そして、それを思い出させる働き」、これらをまとめて「たましい」と言う。

コンピュータの中には記憶装置があって、その記憶装置の中に資料を保存しておけば、後でその資料を検索して活用することができる。この記憶装置と資料、そして、検索して活用するすべてが、人で言うなら、みなたましいに属するものである。

そして、人が育ちながらどれほど多くの資料を見聞きして入力したのか、その資料をどれほど多く記憶できるのか、また、どれほど適切に活用できるのかなどによって、知能指数が違ってくる。

私たちにもみなたましいがある。皆に頭があって、脳の記憶装置に両親、先生、友だちを通して、その他にいろいろな人と本、テレビなどを通して、見て、聞いて、記憶しておいた資料がある。そして、その資料を引き出して活用しながら、數えきれないほど考えたり思ったりする。

今、ここで学んでいる時も、たましいがあるから読んだことが理解できて、記憶装置に保存して覚えられるのである。また、学んだ内容を再び思い出すのも、たましいがあるからできるのだ。だから、人にとってたましいとは心臓のように大切ななものであり、からだとては、この心臓に着せられている服のようなものである。後で学ぶが、「靈」とは、このたましいを完全なものにさせるものである。

2. たましいの働き

ここまでたましいが何かを調べた。それでは、はたしてたましいはどんな働きをする

のだろうか？ たましいは記憶装置に入力された内容を引き出す働きをすると述べた。それは人の性分や性格、判断基準を形成して、心の地を作る大切な働きをする。

人の靈とたましいは別々に離れているのではなく、互いに密接につながっている。ところで、私たちが知っておかなければならないことは、今日のたましいの働きは、アダムが罪を犯す前のたましいの働きとは違うということである。

〈創世記〉を見ると、神は、アダムを造られるとき、まず土のちりで造られて、その鼻にいのちの息を吹き込み、「生きもの」にされた。すなわち、アダムは肉に属する存在でなく、神と交わる靈の生きた存在だったのである。したがって、アダムには骨と肉はあったが、朽ちないからだを持っていた。また、靈が人の主人であって、たましいは靈の指示に従うしもべのような役割をしていた。

もちろん、その時もたましいは記憶して思い出す働きをしていたが、ただ真理のみことばに聞き従う靈の指示だけに従ったので、真理に逆らう思いはしなかったのである。

ところが、アダムが神のみことばに聞き従わず、善惡の知識の木の実を取って食べると、神が「あなたは必ず死ぬ。」と言われたとおり、靈が死んでしまった。すると、途方もない変化が起きた。

生きていた靈が死ぬと、アダムはたましいとからだだけが残った肉にすぎない人になって、そのからだは土から取られたので、再び土へ帰るようになった。

それでは、アダムが罪を犯してから、たましいの働きはどう変わっただろうか？

靈が生きていた時は、靈である神と交わって真理で教えられていたが、靈が死んで神との交わりが途絶えると、その時からはたましいが代わって主人になるようになる。そして、闇の支配者であるサタンは、まさにこのたましいを支配していく。

サタンは神に敵対する存在なので、人のたましいの働き、すなわち、思いを通して、真理に逆らうものを植えつけていったのである。悪を植えつけ、罪を植えつけ、神の心と反対になるものを植えつけていった。

たとえば、誰が自分を殴ろうと襲いかかってくると、サタンは「お前も殴って仕返しするのが正しい」という思いを吹き込む。その通りにしないと「お前は自尊心もないのか。ただ殴られていてもいいのか」と思うようにさせるのだ。まるで怨みを晴らすことが正しいかのように、心に植えつけていく。

しかし、これは真理ではない。神のみことばは、むしろ迫害する者のために祈って、祝福して、敵も愛しなさいである。

しかし、サタンは思いを通して神の心と反対になることだけを吹き込んで、それを人の心に植えつける。結局、怨みを晴らすことが正しいというのが、良心と判断の基準になるのである。そして、このように作られた良心と判断基準によって、人はそれぞれ自分が正しいと思うままに行う。それで、いろいろな悪い行いも現れるようになる。

子どもが育つ過程を見ても、このような事実がよくわかる。赤ちゃんの時は善と悪が何か知らずに本能的に行動するが、だんだんと育ちながら世から真理に逆らうものと悪を受け入れる。それで、心が徐々に悪に染まっていくようになる。

もちろん心の地によって、また、どんな環境で育つかによって、悪を受け入れる程度も違うが、サタンは思いを通して真理と反対になることを吹き込み続け、これが心に積まれるのである。

したがって、人の心は自然に良い地ではなく、悪い地になっていくのである。人は生まれるとき、数多くの歳月の間、真理に逆らう思いを通して受け入れてきた悪が含まれている親の気を受け継いだ。その上、育ちながら思いにサタンが吹き込んだ悪が心に入っているのだから、人間の心がどれほど頑なで高ぶっているし、悪い地になっていただろうか？

また、たましいの働きで真理に逆らうものが心に積まれるようになって、これが人の判断基準と価値観になり、人はますます自分が見て正しいと思うとおりに、恐ろしい罪を犯していくのである。はなはだしくは獸にすぎない行いをするようになる。

〈伝道者の書 3:18〉に「私は心の中で人の子らについて言った。『神は彼らを試み、彼らが獸にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。』」とある。すなわち、神を信じる前は靈が死んでいるので、獸のような行いもするのである。したがって、人の本分を取り戻すためには、何よりも先に、死んだ靈を生き返らせなければならない。これについては、後で説明する第3部「靈」で具体的に調べる。

ところで、私たちがたましいの働きを理解するとき、一つ参考にすべきことがある。入力した内容を引き出す働きが起きるためには、その内容を入れる器、すなわち、脳が必要である。ところが、仮に交通事故にあって脳にけがをすると、どうなるだろうか？ 命が助かっても、脳が損傷して記憶喪失になる人がいる。このような場合は、食べて、眠って、感じることはできるけれど、以前とは全く違う人になる。

それでは、この地上で記憶喪失だった人が天国に行くと、どうなるだろうか？ その時は神の力でこの地上で覚えられなかつたことが覚えられるようになる。神が破壊された部分を再生してくださるので、再び完全なたましいの働きができるのだ。

このように、私たちが天国に行く時は、靈だけが行くのではなく、私たちのたましいも一緒に行くことがわかる。ただし、ここで「たましい」とは、御靈に属するたましいのことである。この地上の真理に逆らうものが入力された部分ではなく、真理に属する部分だけが天国へ行くのだ。このように、救われる人は靈とたましいが一緒に天国に上るのである。

ところで、人が各自の脳の記憶装置の中にどんな資料をどのように入力しておいたのかによって、どんなたましいの働きが起きるのか、その結果は百ならば百通り、みな違う。

たとえばAさんがBさんと大きい声で話をしている姿を、通りかかった三人が同時に見たとしよう。この時、ひとりは「あのふたりは本当におもしろそうに話をしてるな」と思う。別の人には「声があんなに大きいから、何か良くないことがあるのかも」と思う。また、もうひとりの人は、以前にAさんが憤るのを見た。だから、この状況を見て「AさんがまたBさんに憤っている」と思うのだ。このように人によって同じ場面を見ても、それぞれのたましいの働きが全然違うこともある。

また、食べ物を本当においしそうにパクパク食べている人を見ると、そのように食べるのは教養のない行動だと入力して人は、「どうしてあんなに行儀悪く食べるんだろう」と

思う。ところが、ある人は同じ姿を見ても「とてもおいしそうに食べてるなあ。食べ物の有難さがわかる人だな」と思うのだ。人それぞれ、何をどのように入力させてきたかによって、同じ場面を見ても、その感じと考えが変わるのである。

ところが、神はご自身の子どもたちがたましいの働きをするとき、真理にあってすることを願われる。神に喜ばれる考えと、神の御前でふさわしい感じを持つことを願われたのだ。

〈第二コリント 10:5〉に「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち碎き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」とあるように、誤ったすべての知識と思弁、そして、神に喜ばれないすべてのはかりごとを、みことばに合わせて真理に変えていかなければならない。そのためにはまず、私たちの脳の記憶装置の中に何をどのように保存するのかを悟らなければならない。

まず「何を保存するのか」によって、神に喜ばれる良い思いもできるし、できないこともある。すなわち、私たちが世で良いものを見聞きして感じて、それを入れることもできるし、悪いことを見聞きして感じて、それを入れることもできるのだ。良いものを入れたなら、良いことが思い浮かぶし、悪いものを入れたなら、悪いことが思い浮かぶのである。

たとえば、少し離れているところにいるふたりが、ひそひそ話をしながら笑っているとしよう。すると、ある人はそれを見て、「自分たちだけでこそこそ言ってる。気分悪い」と思ったり、「私の悪口を言ってるようだ」と思ったりしてしまう。このような人は、似た状況になるたびに気を悪くして、しゃくに障るのだ。悪い資料を入力するから、悪い思いが出てくるのである。

一方、ある人は、「周りの人に邪魔になるかと思って、小さい声で話しているようだ」と思ったり、「小さい声で話さなければならないことがあるんだろう」と思ったりする。このように思った人は、次に他の人がこそこそ言うのを見ても、特に気にならないのだ。「何かあるようだ」くらいで終わるのである。このように、同じ場面を見ても、良いものを入力させた人は良いことを考えるようになり、悪いものを入力させた人は悪いことを考えるようになるのである。

3. たましいの人

今までたましいの働きを調べた。それでは、私たちがどんなたましいの働きをすれば、神に喜ばれる人になれるだろうか？

サタンはたましいに働きかけて、しきりに疑いをもたらして、神の心と反対になる思いをするようにさせる。このように、たましいの働きによってサタンに支配される人を「たましいの人」と言う。このような人は、神の真理のみことばを聞くとき、まず脳に入力されている人間的な思いが先に立って、心に受け入れない。したがって、靈的なことを悟ることも、御靈の歩みに入ってくることもできない。

神は、ご自身の子どもたちが決してたましいの人になることを願われない。父なる神が靈であられるので、私たちも御靈の人にならなければならない。そうなるためには、何よ

り真理に逆らう思いを遮って、サタンに支配されないようにしなければならない。その代わりに、真理のみことばをもって私たちの心をつかさどられる聖霊の声を聞いて、私たちのたましいをその声に完全に従わせていかなければならない。

神のみことばを聞く時も「アーメン」と言って受け入れて、そのみことばの靈的な意味を心から悟る時まで火のように祈り、私たちの中に宿っておられる聖霊に感じて、動かされて、満たされなければならない。そうする時、たましいが主人でなく、靈が主人になり、毎日神と深く交わって、靈の世界にすみやかに入ることができる。

4. 記憶の方法

次に、私たちが神に喜ばれる良い思いをするためには、記憶の方法についても知らなければならない。私たちが見て、聞いて、体験したものをどのように保存するのか、記憶するにもいろいろな方法がある。あるものは確かに見て聞いたのに、それについての記憶が全くなかつたり、ぼんやり残っていたりする。一方、あるものはあまりにもはつきりと記憶に焼きついていて、長い歳月が過ぎても忘れられない。

これは、それぞれの内容を入力する方法が違うからである。人が記憶して入力する方法は、四つに分けられる。

1) 流してしまう

これは、確かに目を開けて見て、音を聞くことはしたが、特に注意をしなかつたので、ただやり過ごしてしまうことである。

たとえば、故郷に行くために汽車に乗ったとしよう。途中、田んぼが広がっていて、稻が黄金色に実っていた。ところが、家族に早く会いたくて、「行って何を話そうか」「このお土産をあげれば、どんなに喜ばれるだろうか」などの考えに夢中だ。それなら、故郷に行く途中に見た風景や場面をよく覚えているだろうか？ ほとんど覚えていないだろう。ただ流してしまったからである。

もう一つたとえてみよう。ある生徒が授業を受けている。授業が終われば何をして遊ぼうかという考えにふけっている。このような生徒は、確かにそこに座って聞いてはいたけれど、授業が終わった後、何を学んだのかと尋ねれば答えられない。先生の説明を聞き流してしまったので、全然心に入れなかつたのである。

2) 見て聞いておく

先に故郷に帰る道のたとえを挙げたが、この時、故郷にいる親が農業をしているならば、田んぼを見て、親と関連づけて覚えることもある。「お父さんも田んぼをしているが、ここもよく実ってるなあ。」このように思いながら、田んぼを眺めるのである。この程度に記憶に入れた時は、故郷に到着して、「途中、どうだった？」と聞かれると、途中で見た場面が大まかには思い出される。「両側に田んぼがたくさんあって、黄金色によく実っていた」と答えられるのだ。しかし、それ以上詳しく覚えていないし、覚えていた場面も、ある程度時間が過ぎると簡単に忘れる。

また、生徒が授業時間に、他のことは考えないで、先生の説明を聞くことは聞いたが、ただ「そうなんだなあ」と思うだけの場合がある。この時は、授業が終わって、「きょう、どんなことを聞いたの?」と聞くと、大まかに「これこれについて聞いた」くらいは答えられる。しかし、何日か過ぎると、聞いたことを忘れてしまって、そのまま試験を受けるなら、確かに学んだことは学んだけれど、その内容を覚えていないのである。

3) 記憶に留めておく

先の故郷に帰る道のたとえで、仮に農業をしている人ならば、途中田んぼを見たとき、ただ流してしまわないだろう。「ここはうちよりよくできているなあ。」「あのビニールハウスは本当に丈夫に作ってある。」「家に帰ったら、あんなふうにしてみよう。」このように関心を持って一生懸命に見るのである。すると、このように見たことは、記憶によく留められる。後で家に帰っても、見たことが詳しく思い出されるのである。

また、別のたとえとして、生徒が授業を聞いている場合を考えてみよう。先生が「この授業が終わったら、その内容についてテストをする。一つ間違えるたびに、一回物差しで手をたたく」、このように言うのだ。それなら、生徒が授業を聞くとき、どれほど集中して聞いて、記憶しておくだろうか? こういうものは聞いてすぐ忘れないで、比較的長く記憶に残るのである。

今まで三段階を説明したが、後に行くほどもっとよく覚えている。

4) 刻んでおく

たとえば、ある子が7、8歳くらいで、大好きなお母さんが交通事故にあって亡くなる場面を見たとしよう。すると、どんなにショックを受けて悲しむんだろうか。このような時は、頭で覚えるだけでなく、悲しい感じとともに心に刻まれるようになる。このように頭と心に一緒に入力されたことは、長い歳月が過ぎても忘れない。いくら忘れようと努力しても、その場面が度々思い出されて、時には夢にまで現れたりする。

お年寄りは歳月が過ぎるほど記憶力がなくなって、ちょっと前のことも忘れてしまったりする。だが、むしろとても昔のことははっきりと覚えていることがある。頭と心に一緒に強く入力されたことは、記憶力そのものが弱くなってしまっても、ずっと残っているのである。しかも記憶力が衰えていないなら、頭と心に同時に刻んだこのような記憶は、脳細胞が破壊されない限り、一生の記憶として残っていられるのだ。

これまで、資料を記憶の中に入力しておく方法を四つ調べた。このようなことを知っていると、たましいの働きを治めていくのに大きい力になる。

一つ例を挙げてみよう。真理に逆らうことを考えたくないのに、その考えが執拗に思い浮かぶ場合がある。これは感じとともに入力して、記憶と心の両方に刻んだからである。

たとえば、ある人が自分をとても苦しめると、その人の名前と顔が感じと一緒に入力される。その人に苦しめられたので憎むようになり、その人を思い出すなら、憎しみという

感情が一緒に思い浮かぶのだ。また、考えないようにもしても、その人が自分をつらくさせた場面が度々思い浮かんで、心が苦しいのである。

もちろん、憎しみを引き抜いた真理の心ならば、このような感情のために苦しむこともない。ところが、この憎しみを捨てるために祈っても、憎む人に対する感情が捨てられずに、ずっと憎い心が浮かび上がり、苦しむ人がいる。このような悪い考えによって苦しめられないためには、初めから良いものを入力すればよい。

相手が自分の心に合わない行いをしても、「もう、いやだ。あの人はいったいどうしてそんなことするんだろう」と思うのではなく、「よっぽどのことがあって、ああするんだなあ。何かの理由があるんだろう」と相手の立場から理解しようとするのである。相手がいくら自分を苦しめても、このように良いことだけを入力すると、その人について思う時も、憎しみが思い浮かばないのである。

それでは、すでに感じとともにに入力してしまった真理に逆らうものは、どうしたらよいだろうか？　この時、感じとともにに入力された記憶を、何が何でも消そうとするだけでよいのではない。その記憶はすでに入力されたものなので、考えないようにしても、さらに執拗に思い浮かぶのだ。だから、このような時は、その記憶そのものをなくすのではなく、感じを変えていかなければならない。

たとえば「憎しみ」や「赦せない」という感じを変えて、「その人の立場からは、その時そうすることもありえただろう」「あの人もどんなにつらくて、そうしたんだろうか」、このように相手の立場から考えてみるのだ。そうしながら、相手の愛すべき点や長所を思い出して、相手のために祈るのである。ひと言でも暖かい言葉をかけて、ささやかなプレゼントでもするなど、愛をもって行うのである。

このように行うほど、憎しみが愛に変わっていく。だから、その人のことを思っても、これ以上苦しんだり、つらくなったりしなくともよくなるのだ。

第2章

たましいの働き

1. 真理に逆らうたましいの働き

人が真理に逆らうたましいの働きをすると、これは自分にも害になるだけでなく、周りの人々にまでも大きい害を与える。

たとえば、全く罪のない人をさばいて、罪に定めて、噂を立てる場合を考えてみよう。この時は、さばいて罪に定める自分自身だけが神の御前に罪の壁を作るのではなく、噂の当事者をとても困らせるのだ。

あるいは、相手は良い意図をしたことを、全くとんでもなく誤解して、互いに気まずくなる場合もある。何の過ちもないのに誤解されて相手の怒りを買う、そのようなことを体験したことがないだろうか？ 反対に、自分もそのような間違ったたましいの働きで相手をつらくさせた経験もあるだろう。

これから、このような真理に逆らうたましいの働きの代表的なものを調べてみよう。

1) 理解できなくて心にいだけない

これは、互いに違う部分が理解できなくて、心にいだけないことである。人が生まれてから生きていくうちに、それぞれ自分なりの好みや価値観、あるいは「正しい」と思うことについての枠が作られるようになる。

服でも、ある人は派手でユニークなデザインが好きで、ある人はシンプルなデザインが好きである。同じ映画を見ても、ある人はおもしろいと言うのに、ある人はとても退屈で眠たいと言う。同じ人を見ても、ある人ははきはきして活発でいいと言うのに、別の人には軽率で短気に見えると思う。このように、人がそれぞれ違うので、気質が似た人どうしはすぐに親しくなるけれど、そうでない人については「気に入らない」とか「何だからちょっとおかしな人だ」と思うのである。

たとえば、Aさんは積極的で開放的な性格なので、何かの働きをするなら熱く燃えてしなければならなくて、気に入らないことがあれば、何が気に入らないのか相手に率直に話してやっとすっきりする。ところが、同じグループのBさんという人は、好きか嫌いか相手に感情をよく表現することもなく、何かの働きをする時も、じっくり後先を考えるので、決めるまで時間が長くかかるほうである。

ところが、Aさんが見るには、Bさんがとてもじれったくて理解できない。だから、心に不満をいだいて、「どうしてこんなじれったいやり方をするのか」と思って苦しむのである。一方、Bさんのほうからも、直接表現するAさんに応対するのがつらくなつて、だんだん避けたいと思うようになる。

このように互いに理解できなくて心にいだけないこと、これも真理に逆らうたましいの働きから出る。自分が見て良いことだけを良く思つて、自分が正しいとみなすことだけを

正しいと思うので、自分と違う相手については理解できないし、心にいだきにくいのである。

2) さばく

「さばく」とは、ある人や事物について、自分なりの枠や感じなどで決めつけてしまうことである。これらのこととは、互いに違う文化を持つ人々の中で簡単に見つけられる。

ある国の人々は、食卓で鼻をかめば失礼で教養のない行いだと思うけれど、ある国の人々は、食卓で鼻をかむのを全く失礼だと思わない。

また、ある国では、食事に招待されたとき、大きい皿から自分が取った食べ物を残せば、とても失礼である。「あなたの食べ物はあまりにもまずくて、とうてい食べられない」という意味になる。ところが、ある国では、全部食べるとはしたない、教養のない行動なので、必ずわずかは残しておかなければならぬそうである。

もう一つの例として、インド人が手で食べ物をつまんで食べるのを見た外国の人が「手でつまむことは非衛生的だ」と言った。するとこのインド人は、「少なくとも私の手は自分できれいに洗って食べるけれど、食堂で出すフォークやナイフはどれほどきれいなのがわからないから、むしろ手のほうが衛生的だ」と言ったそうだ。

同じ状況でも、自分がどのように学んだかによって全然感じが違って、考えが違うのである。地域と文化によってだけでなく、時代によっても基準は大きく違う。

たとえば、今から 50 年ほど前は、生徒が学校で歌謡曲を歌うと懲らしめを受けるほど、とても不良な生徒とみなされた。ところが、今日はどうだろうか？ 歌謡曲を歌っても全然問題にならないだけでなく、昼食の時や休み時間に、放送室から歌謡曲を流す学校もあるそうだ。

また、一時は大変はやっていて、その当時は洗練されたように見えたスタイルが、時間が過ぎて流行が変わると、やぼったく思われたりする。ところが、数十年の歳月が過ぎたら、また以前の流行が戻ってきたりもする。

だから、絶対的な真理の物差しではなく、時と場所によって変わる基準に合わせて、何かをさばいてはいけない。また、自分の考え方と同じに合わせて、相手の意図や行動をさばいてしまうことも多い。嘘をよくつく人は、他の人も嘘をつくときさばきやすいのだ。他人の過ちを言うのが好きな人は、他の人が自分には聞こえないように小さい声で何かを言うのを見ると、「今、あの人は私の過ちを言っているようだ」とさばきやすいのだ。

このようなこともある。ある青年がある若い女性を見ただけで顔が赤くなる。以前に、この女性に悪気はないのに迷惑をかけたので、彼女を見るたびに、申し訳ないからそうなるのである。ところが、そばでこれを何度か見たことのある人は「彼はあの女性が好きなんだ」とさばくのだ。

あるいは、視力の悪い人が、自分に気がつかずに、挨拶もせずに通り過ぎた。すると「あの人には私に何かわだかまりがあるんだろうか？ どうして私を無視するのか」とさばいたりする。もともと表情が硬い人を見て、「あの人はどうして私を見ると、あんなに顔がこわばるのだろうか？ 私が嫌いなんだ」このようにさばくこともある。

よく知っている男女が、偶然ホテルの前に立っているのを見たら、どう思うだろうか？

世では、ただその前に立っているのだけを見ても「あの人たちはホテルから出て来たんだな」とさばく人が多い。ここからさらに進んで「なんだか、前からあの人たち、互いに見つめ合うとき、目つきが違ってたよ」と解釈まで加えるのだ。

このようなこともたびたびあるだろう。牧師が数多くの聖徒と握手をすると、ひとりひとり目を合わせて笑おうと最善を尽くすが、そうできなくて通り過ぎる場合がある。すると、ある人は「どうして私を見なかったのだろうか？　私が何か間違ったことをしたから笑ってくださらないだろうか？」とひとりで思いを働かすのである。自分の心に責められることがあって、大胆に神の御前に出られない時は、なおさらそう思いがちである。「私がこういう間違いをしたから、先生は私から顔をそむけるんだな」と、時には気を悪くすることもある。

もちろん、これが聖霊の働きから来る悟りならば、心から感謝して立ち返って、それからは満たされた姿になればよい。ところが、肉の思いを働かす人は、そのような思いによってさびしくなったり傷ついたりして、もっと沈滞してしまうのだ。

的外れな答えも、さばきから出てくる場合が多い。たとえば、遅刻をよくする人に「今朝は事務室に何時に来たの？」と聞くと、答える人は気を悪くして「きょうは遅刻しなかったよ」と言うのだ。ただ何時に来たかを聞いたのに、「あの人は私がまた遅刻したと思って聞いてる」とさばいて、とんでもない返事をしたのである。

このように、人はすべての点で御霊に導かれる前まで、日常生活の中でも、教会の中でも、しょっちゅうさばいて生きているが、自分たちの過ちを悟らない。時にはあまりにも自信を持ってさばき、「見なくてもわかる」「一つ見たら全部わかる」、このようなことまで言うのである。

しかし、人の知識には限界がある。直接見て聞いたことであっても、その内部の事情まではわからないことが多いのに、見ても聞いてもいないことを自分なりに推測して、人の心をさばくなら、これはあまりにも間違っていることである。

〈第一コリント 4:5〉に「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」とある。ただ心をご覧になる神だけがすべてをご存じであって、さばくことがおできになる、ということを心に留めなければならない。

3) 罪に定める

真理に逆らうたましいの働きをすると、自分の考えに合わせて相手をさばくだけでなく、さらに進んで罪に定めることまでする。

たとえば、若い女性を見て顔が赤くなる青年について「彼はあの女性が好きなんだな」とさばく程度を超えて、「あの人は心に姦淫が多いな」と完全に罪に定めてしまう。目が悪いから気がつかなくて通り過ぎた人について「目を合わせても、どうして挨拶しないんだろうか」とさばくだけで終わるのではなく、「あの人はあんまりにも高ぶっていて、人を無視する」と罪に定めてしまう人もいる。

しかし、〈ヤコブ4:11-12〉には「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってはいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。律法を定め、さばきを行う方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすことができます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。」とある。

相手をさばいて罪に定めるとき、すでにその人は自分が神のように高ぶっているということであり、そのために神の御前で自分が罪に定められるのだ。しかも、靈的なことについてさばいて罪に定める時は、問題がもっと深刻である。

〈第一コリント2:14〉に「生まれながらの人間は、神の御靈に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御靈のことは御靈によってわきまえるものだからです。」とある。世の人は、靈的なことを聞いても自分の知識と枠の中で理解できないので、さばいて罪に定める。

たとえば「病院でも治療できなかった私の病気が、神の御前に出てきて、祈りを受けていやされた」と熱心に証しして伝道すれば、神の力を知らない人は、自分の思いでさばく場合がある。「まさか、祈りを受けるだけでどうして病気がいやされるんだろう？ 薬も飲みながら祈りを受けたんだろう」と言ったり「気分が良くなつたと錯覚しているんだろう」とさばいたりするのだ。

時には、証しする人が嘘をついていると罪に定めることもある。また、神の力で葦の海が分かれて、太陽と月が止まったとか、飲めなかつた苦い水が飲める甘い水に変わるなどの聖書の奇跡についても、「本当のはずがない」とさばいてしまうのだ。偽りをでっちあげたと罪に定めるのである。

しかし、このようにさばいて罪に定める人は、どれほど愚かな人だろうか？ 自分の一寸の先の事も知らないし、自分の憂い、悩み一つも解決できない弱い人の子らが、全能なる創造主の神のみわざについて、さばいて罪に定めるという愚かなことをしているのである。

ある人々は、神信じていると言いながら、聖靈の働きをさばいて罪に定める場合もある。たとえば「幻を見た」とか「啓示を受けた」と言うと、「間違っている」「神秘主義だ」と言う人もいる。このようなことは明らかに聖書にも記されている神のみわざなのに、自分なりに作ってきた信仰の枠の中で、聖靈の働きを罪に定めるのである。

イエス様の時のユダヤ人の中にも、そのような人がたくさんいた。イエス様がいくら力あるわざを施されても、自分たちが正しいと思う基準にだけ合わせて、イエス様をさばいて罪に定めたのだ。

たとえば、イエス様が安息日に病人をいやされたなら、大きい神の力がイエス様によって現れたことにもっと注目して当然だろう。ところが、ある愚かなパリサイ人たちは、神の力については考えないで、働いてはならない安息日に病人をいやしたこと働いたことになる、イエス様は安息日を犯す罪人だと罪に定めるのだ。

もし安息日に神の力で病人をいやすことが神のみこころに逆らう罪ならば、神が安息日

にイエス様を通していやしのみわざを施してくださるはずがない。また、イエス様が神の法を犯す罪人ならば、聖なる神が罪人を用いて、病人をいやす力を施してくださるはずもない。

しかし、このパリサイ人たちは、自分の思いの枠に閉じ込められていて、まことが見分けられないので、神の御子イエス様をさばいて罪に定めているのである。

ある人は、自分の基準に合わせて、何と神までもさばいて罪に定める。たとえば、善悪の知識の木を置かれた摂理についてわからないので、アダムが善悪の知識の木の実を取つて食べて罪を犯して、苦しむようにされたので、神は悪い神だと言うのだ。あるいは、自分の過ちで試練、患難に遭ったのに、神が自分にこういう試練を与えたと言つたり、いくら祈っても答えられないから、神はいないと言つたりする人もいる。真理を知らないので、自分の基準に合わせて神をさばいて、罪に定めるのである。

ところが、これらのことは神の御前に大きい罪の隔ての壁になる。まかり間違えば、聖靈を冒涜して、けがし、逆らうという罪を犯して、悔い改める機会さえ得られないこともあるのだ。私たちはそのようなことは決してしてはならない。

ただし、〈第一コリント 2:15〉に「御靈を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによつてもわきまえられません。」とある。このように、御靈を受けている人、すなわち、御靈に属する心になって、聖靈の声をはつきり聞いて働きかけられる人ならば、人の心と意図までわかる。神の深みにまで及ぼれる御靈がすべてを教えてくださるからである。

たとえば、英語がとても得意な人ならば、他の人の英語の実力がどのくらいなのか、英語で話してみればすぐわかる。相手の英語の実力をさばくのではなく、十分に見分ける力があるからである。

4) 間違つて伝える

世のゲームにこういうものがある。まず十人が一列に並ぶ。そして、一番前の人から十番目の人に耳打ちしながら一つの文章を伝える。すると、一番前の人があつた内容と十番目の人があつた内容が完全に一致することはあまりない。何人かの人を経る過程で、それぞれの考えが入るために、時には初めと完全に違つた内容の文に変わつたりするのである。

ところで、このように話を間違つて伝えることは、実際の生活でも本当によくある。もちろん、周りがうるさくて声がよく聞こえなかつたので、元の内容と違つて聞いて伝える場合もある。

しかし、問題は、元の内容をちゃんと聞いたのに、その内容を自分なりに変えてしまうということである。自分の思いと感じを混ぜて、内容を変えるのだ。実際、聞いた内容を文字どおりに伝えてても、表情と声の大きさなどによって伝えられる意味が変わつたりする。

たとえば、同じように「おい」と相手を呼んだとしても、やさしく親しそうに「おい」と言うのと、荒々しく怒りっぽい声で「おい！」と言うのとは全然違う。まして相手の話

や表現をそのまま伝えられなくて、自分の表現に変えて伝えたならば、もっと簡単に元の意味とは違ってしまう。

聖書にもこのようなことが記されている。〈ヨハネ 21 章〉で、よみがえられたイエス様が、ペテロが今後殉教することを知らせてくださる。するとペテロが、後についてくるヨハネを見て、気になってイエス様に聞く。「主よ。この人はどうですか。」すると、イエス様は「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」と言われた。すなわち、主が再臨される時までヨハネが死がないといつても、ペテロにかかわりのあることでない、という意味である。

ところが、〈ヨハネ 21:23〉には「そこで、その弟子は死がないという話が兄弟たちの間に行き渡った。しかし、イエスはペテロに、その弟子が死がないと言われたのでなく、『わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか』と言われたのである。」とある。この時も、イエス様の言葉を全く思いもよらない意味に変えて伝える人々がいたのだ。

このような例は、日常生活の中でもたくさん見つかる。元の内容を誇張したり、縮小したり、ひどい時は全然違う意味に変えて伝えるのだ。「そのようではないのか？」という話が、「そうだったんだ」に変わって、「そうすることもある、そうする予定だ」という話が「そのように決まった」と伝えられたりする。「あのふたりの間が遠くなつた」という話が「ひどくけんかした」と変わったり、「財政が厳しい」という話が「破産した」と伝えられたりする。

世の人を見れば、話を正確に伝える人よりは、そうでない人のほうがはるかに多い。ほとんどだと言えるほどである。また、話を間違って伝えたとしても、ただ笑って通り過ぎるほどのささいなことも多い。

ところが、なぜこのようなことを説明しているだろうか？　単に話を間違って伝えること自体が問題なのではなく、その瞬間、心の真理に逆らうものとかかわって、間違ったたましいの働きが行われることが問題だからである。人の心が真実になると、自分の思いによって事実をわい曲しない。

自分の利益を求める心、いい加減にやり過ごそうとする心、せっかちにさばく心や人の話が好きな心、このようなものがないほど、間違って伝えることがそれだけ減る。自分の思いと感じに変えて伝えるのではなく、言葉の意味や実際の状況を正確にそのまま伝えるのだ。

だから、「話を間違って伝えることが私にはどれほどあるのか？」と顧みることが、結局「私はどれほど真理に逆らうたましいの働きをしているのか」が悟れる、一つの尺度になるのである。

5) 悪い感情をいだく

真理に逆らうたましいの働きのうち、最後に説明するものは「悪い感情をいだくこと」

である。たとえば、期待していた通りでなかつたのでさびしくなり、むなしくなる、自尊心が傷ついたり気を落としたりして、そねんで怒るなどが悪い感情である。これは、肉の性質があるためにこのような真理に逆らうたましいの働きが出てくるのである。

たとえば、同じ話をしても、それを聞く人によって反応が変わる。上司が部下のミスを指摘しながら、「もっとちゃんとやれないんですか?」と言った。すると、ある人はその指摘を柔軟な心で受け入れて、「はい、これからは頑張ります」と笑いながらその場を切り抜ける。

ところが、ふだんその上司にちょっと不満があつた人は、その言葉を聞いて直ちに悪い感情が生じて、いやな思いをする。「あんな言い方をしなくともいいのに」とか、「自分はどれほどやれるというんだ。上司らしいこともしていないのに」と、真理に逆らう思いをするのだ。

また、自分が一生懸命にしたことについて、「この部分はこのように直せばよさそうだ」と言われたとしよう。すると、ある人は単純に受け入れる。「それも良い意見ですね。教えてくださってありがとうございます」とその意見を参考にする。

ところが、ある人はこの時、気を悪くするか、自尊心が傷ついてしまう。それで、「私がこれをやり遂げるためにどんなに苦労したのか。あんな簡単に言うなんて」と思ったり、つぶやいたりする。「偉そうに言ってる」と思ったり、「そんなによく知ってるなら、自分でやつたら」と思つたりする。

私たちが生きていきながら接する状況で、どんな感情をいだいて、どんな思いをするかは、結局、自分の心にかかっている。悪い感情をいだけば、思いも悪くなつて、行いも悪くなる。そうなると、自分にも益になることが一つもない。一方、良い感情をいだけば、良いほうに見て聞いて、良いほうに思い、それで良い行いが出てくるのである。このように、どんな感情でどんな思いをするのかによって人生が変わることも多いのだ。

聖書にも端的な例がいくつかある。イエス様には多くの弟子がいたが、その中にはイエス様がその心を喜ばれ、特に愛された弟子もいて、結局は、イエス様を裏切ることをご存じだったが、それにもかかわらず、公義にあって弟子として選び、最後まで愛でいだいて導かれた、イスカリオテ・ユダもいた。

イエス様は心が良い弟子だからといって、ほめるばかりでもなく、欠けているところのある弟子だからといって、責めるばかりでもなかつた。かえつて一番弟子のペテロのように厳しく責められた弟子も珍しかつたのだ。ペテロがイエス様の言葉に従つて、水の上を歩いたが、一瞬、肉の思いが働いて、水に溺れかけたことがあつた。この時も、イエス様は「あなたはそれでも私について水の上を歩いたので、信仰が大きい」と言われたのではなく、「信仰の薄い人だな」と責められた。

また、イエス様が十字架を負われる時になり、今後のこと教えてくださると、ペテロは愛する師の苦しみを願わなかつたので、「するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。『主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはあ

りません。』」といきめ始める。この時、イエス様は「私のことを思ってくれるあなたの心は有難いが、私は行かなければならない」となだめてくださったのでなく、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と叱られる（マタイ16：23）。イエス様が十字架につけられて苦しみを受けられてこそ、罪人が救われる道が開かれるのであって、これを邪魔することは、神の摂理を妨げることになるからだ。

しかし、ペテロがこのように責められたからといって、イエス様に対して気を悪くしたり、何か悪い感情をいだいたりしたのではない。そうならば、「私はイエス様を愛しているからそう言ったのに、いくら何でも人前で厳しく叱って、私に恥をかかせなくてもいいのでは」と気を悪くすることもありうる。

だが、ペテロはイエス様が何かの話をされるには、いつもそれほどの理由があると信じた。したがって、心が痛んで恨むのではなく、「イエス様はなぜあんなふうに言われるのだろう？」と考えてみて、自分を変えようと努力した。一点の悪い感情もなく、変わらない心でイエス様に仕えて、変わらず尊敬と愛をもってつき従った。それで、ペテロは結局、イエス様の一番弟子らしく、神の力あるわざを行う立派な使徒になった。

一方、イスカリオテ・ユダはどうだろうか？　〈ヨハネ12章〉を見ると、ベタニヤのマリヤがイエス様の足に香油を塗る場面が出てくる。この時、イスカリオテ・ユダはマリヤを非難する。「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」と言う。しかし、イスカリオテ・ユダは貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、盜人だったからそう言っただけである。ユダは、金入れを預かっていたが、その中に収められたものをいつも盗んでいたから、高価な香油をイエス様の足に塗るのがとても惜しかったのである。

ところが、イエス様はこの時、ユダの肩を持ったのでなく、マリヤがしたことが靈的には意味があって、イエス様の葬りの日のために備えることだと知らせて、マリヤの行いをほめられた。そして、〈マタイ26：14〉を見ると、イスカリオテ・ユダが祭司長たちのところへ行って、イエス様を彼らに引き渡す約束をして、銀貨三十枚を受け取る場面がある。

イエス様はイスカリオテ・ユダに「あなたは間違っている。なぜ良いほうに思わないのか」と責められたのでもなく、多くの人の前でも、個人的にも、「あなたはなぜ私をだまして盗んでいるのか」と叱られたのでもない。

それでもユダは自分の話を認めてくださらないイエス様に恨みを持ち、悪い感情をいだくようになった。このようなわだかまりが大きくなると、サタンが吹き込む思いを受け入れて、イエス様を裏切る計画を立てるようになったのである。結局、イエス様を売るという、途方もない罪を犯したのだ。一時、イエス様の弟子だった彼がここまで滅びの道へ向かったのは、それだけふだんも敵である悪魔・サタンのしわざを受け入れて、悪い思いを積み重ねてきたからである。

ここまで真理に逆らうたましいの働きの代表的な五つを調べた。理解できなくて心にいだけない、さばく、罪に定める、間違って伝える、悪い感情をいだく、これらすべてが真

理に逆らうたましいの働きである。根本的には、心の悪とつながる。

ところで、〈ローマ8:6〉に「肉の思いは死であり、御靈による思いは、いのちと平安です。」とある。これまで調べた真理に逆らうたましいの働きは、御靈による思いではなく、肉の思いである。肉の思いをすると、神が願われることと反対に思うので、結局、いのちでなく死に向かうようになる。また、心にも平安がない。

みことばに照らして、「私は、はたしていのちと平安を与える御靈による思いだけをしているのか」と自分をよく顧みなければならない。それで、真理に逆らう思いはすみやかに捨てて、真理で見て、聞いて、思って、真理で話をして行う、完全な人になるべきである。

2. 真理に属するたましいの働き

『靈・たましい・からだ』の学びによって、自分を発見していくならば、真理に逆らうたましいの働きは、その時その時すぐ発見して捨てていくことができる。時には真理に逆らうたましいの働きをしていても、直ちに悟れないこともあるが、後で一日を振り返って祈ると、聖靈が思い出させて悟らせてくださったりする。このようにいつも目を覚まして、自分を発見するために努力して、真理に属するたましいの働きをする人に変えられなければならない。

ところで、時にはいくら真理で考えようとしても、しきりに真理に逆らう思いが浮かぶ場合がある。これから、私たちがどうすれば真理に逆らうたましいの働きをしないのか、すなわち、真理に属するたましいの働きができるのか、その方法を具体的に調べてみよう。

1) すべてを真理の基準でわきまえる

人によって正しいか正しくないかをわきまえる良心も違うし、世で正しいと思われる価値判断の基準も、ほとんどが時間と場所、文化によって違う。いくら正しい行いをしても、価値観が違う人が見る時は、全然正しくない行いをしたと思われることもある。

是非をわきまえる基準、たった一つの変わらない絶対的な基準は、真理そのものである神のみことばだけである。世の人々が真理だと思っていることの中には、聖書六十六巻の真理と一致するものもあるが、そうでないものもたくさんある。

簡単なたとえを挙げると、世では怨みを晴らしてこそ正しいのであり、そうでなければ卑怯だと思う。しかし、神は敵をも愛しなさいと言われた。そして、イエス様は自分を釘づける人の子らのために、いのちを渡すまで愛を与えてくださった。世では「義侠心が厚い」と思われることも、神がご覧になる時は正しくないこともよくある。

仮に、親しい友だちが罪を犯したのに、他の人が犯人に仕立てられて、濡れ衣を着せられたとしたら、友だちの過ちを言わないことが友だちに対する節義だと思う。しかし、濡れ衣を着せられた人の悔しさを知つていながらも沈黙するなら、神の御前で決して正しいと言えないのである。

自分自身が主を信じる前の姿と、主を受け入れて真理を知ってからの姿を見ても、ずいぶん違うことが発見できるだろう。

たとえば、神を信じる前は、食事時間によその家に行って、「食事、してきましたか？」

と聞かれると、まだ食事をしなくとも、「食べてきました」と言っていた。そうしながらも、全く間違いだと思わなかったのである。自分の益を求めるためにそうしたのではなく、相手に何か害を及ぼしたのでもないし、むしろ相手の益を求める事なので、それが正しいと思う。

しかし、神を知って真理に照らしてみたら、これもまた確かに偽りなのである。そんなに大した罪ではないとしても、神の御前では完全ではない姿である。相手に迷惑をかけないようにという心は良いけれど、その方法自体は真理でなかったのである。この事実を悟つたなら、ただ「食べたくありません」と言つたり、他の表現に代えて言つたりする方法もあるだろう。

また、このようなこともある。受けたくない電話がかかってきた時や、会いたくないお客様が来たとき、親が子どもたちに嘘をつかせる。「今、いないと言いなさい」と言うのだ。このようにいつも真理に外れる行いをしていても、「私はこんなにショッちゅう嘘についているんだ」と悟れないのである。

他人の物を借りて使っても返さない、あるいは断らないで他人の物を使ったのに、ささいなことだと、盗みとは思わない場合もある。

このように神のみことばに照らしてみると、日常であまりにも多くのことが真理から外れていることがわかる。しかも、時代がだんだん悪くなるほど、自分の利益を求めて真理に逆らう行いをしていながらも、自分では悟れないことが多くなっている。それなのに、人をさばいて罪に定める時は、自分自身の基準で「間違っている」と罪に定めるのだ。

たとえば、政治をする人がライバルを非難するのを見ると、自分は正しくて、相手は間違っていると主張することがほとんどである。自分たちは国と国民のためにこうすると言ひながら、相手はそうでないと非難する。すると、見守る国民までも分かれて「この人たちが正しい、あの人は正しくない」とさばいて、互いにけんかする。

それでは、このようにさばくことが、はたして真理から出たものだろうか？人の心は神だけがご存じである。本当に国を愛して、国民のために行う心から、良い心から行っているのか、でなければ自分の利益を求めているのか、人は知らなくても、神はみな知っておられるのである。

ところで、人は、その心の底が全部は読めなくとも、真理のみことばに照らしてみると、口から出したひと言や行いを見て、その心にどれほど悪があるか、ある程度はわかる。

たとえば、手紙をもらったとしよう。そこには悪い表現で誰かの過ちを伝えてそしる内容が書かれていた。それなら、その手紙の内容が信じられるだろうか？おそらく信じられないだろう。手紙に書かれた悪い表現だけを見ても、その人がどれほど真理に逆らう心なのかがわかるからである。そのような悪い心を持った人が他の人をそしつた内容が、事実だとは信じられないのである。

クリスチャンは、これからは神のみことばを糧として、真理ですべてをわきまえなければならない。そのためには、真理を熱心に聞いて学び、心に糧とする事が大切である。神のみことばである聖書六十六巻を熱心に読まなければならぬし、世で真理に逆らうも

のが間違って入力された基準を捨てなければならない。

世でいくら賢いことであっても、神のみことばに外れることは、みな捨てなければならぬ。〈第一コリント 3:18〉に「だれも自分を欺いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思う者がいたら、知者になるためには愚かになりなさい。」とあるように、世から入力された真理に逆らうものを捨てる時でこそ、神が下さる真の知恵を得ることができるのである。

2) 真理にふさわしく感じる

ある人は「憎しみ」という感情を捨てようとしても、相手を見るといやな感じがするはどうしようもないと言い訳をしたりする。しかし、感じというのもも、結局、たましいの働き、すなわち、思いによって変わる。愛も憎しみも、すべてが自分次第である。

こんな映画があった。ある少女が小さい時から象とともに仲が良くて、象は少女の首に長い鼻を巻きつけていたずらをしたりした。ところがある日、この少女が眠っていると、毒蛇が来てその首に巻きついた。もしそれが毒蛇だとわかつたら、少女はどれほど恐ろしくて、気味悪く感じただろうか？ しかし、少女は相変わらず目を閉じて、自分の首に巻きついているものが象の鼻だと思うと、驚くこともなく、かえって親しみを感じるのだ。思いによって感じまで変わるのである。

日常生活でこうしたことがあまりにもたくさんある。狭い木の橋を渡る時も、その橋が地上から 1 メートルぐらいの高さにある時は、ほとんどの人が無事に渡り終わる。ところが、同じ橋を仮に 10 メートルぐらいの高さに置けば、その時は怖くなってしまって渡れないのだ。

また、ウジやミミズ、ムカデなどを見ると、気味悪くて汚いとうんざりする人もいるが、それらを餌にして育った鶏の肉はおいしそうに食べる。このように、感じというのもも、みな自分次第なのである。

ある人を見る時も、何かのことに対する時も、良いほうに思って良い感じで受けければよい。自分の性格と教養に合わない人も、「あの人は本当にいや」と思ってしまえば、良くない感じとして残るが、相手の立場から考えて理解すると、良い感じとして入力されるのだ。

ところで、私たちがすべてのことに善で思って善で感じるためには、何よりもいつも善なるものを見て、聞いて、心の中に入力していくなければならない。もちろん、世に生きていると、人々の言葉と行いの中から真理に逆らうものを多く見るので、悪いものに全く接しないでいることはできない。

特に最近は、マスコミやインターネットで残忍で暴力的なこと、偽り、自分の利益を求めて裏切ることなど、悪いことにたくさん接することもあるだろう。私たちが真理で自分を守るために、できるならこのようなものは見ないで、聞かないで、記憶に入れないとよい。しかし、やむをえずこのようなものに接することになっても、それらを毎瞬、真理で、善で、入力すればよいのである。

たとえば、映画で暴力的なシーンを見たとき、世の人々は「かっこいい。自分もしてみたい」と感じるかもしれない。しかし、真理でわきまえる人は「あんなことをしたらいけ

ない。自分は人を苦しめないようにしよう」と感じるのだ。

それでは、感じがすでに真理に逆らうものとして入力されてしまったなら、どうすればよいだろうか？この時は、真理に逆らう感じをなくそうとするのではなく、真理の感じに変えていけばよい。

たとえば、幽霊やドラキュラなどの怖い話を聞いて成長した人は、恐ろしい感じとして入力されている。特にホラー映画でも見てから、暗い所にひとりでいるなら、ぞくぞくっと背筋が冷たくなったり、何でもないことにもびっくりしたりする。「怖くない」と思ったり、考えないようにしたりしても、なおさら思い出されるのだ。

ところが、私たちが信仰を持つようになって、悪い靈の世界について正確に知って、光の中を歩むようになると、このような感じを変えることができる。悪い靈どもの正体を確かに知っているので、恐ろしい感じを変えて、イエス・キリストの御名によって大胆に退けるのである。

次に、憎しみという感情をたとえに挙げてみよう。ある人に対して憎しみという感じが入力されたなら、これからその人について度々良い視角で見て、善をもって思いながら、相手を心にいだいていけばよいのだ。そうしていくと、憎しみという感じが愛する感じに変わるのである。

以前は、聖地巡礼に行くと、女性聖徒の中に、ヨーロッパの彫刻を見たとき、顔を赤らめて恥ずかしがる人がいた。しかし、その文化を理解して、感じを変えてしまえば、全く恥ずかしいことがない。淫らに見えて、悪く見えるのではなく、ただ芸術作品として眺められるようになるのだ。

このように、すべてのことに真理で思い、真理の感じとして受け入れると、真理に逆らう感じを真理に変えていくとき、たましいの働きもまた真理だけになるのである。

3) 相手の立場から受け入れる

真理に属するたましいの働きをするには、何をしても、自分の立場からではなく、相手の立場から受け入れなければならない。

何かの話を聞いたり、ある状況を見たりするとき、自分の立場と経験、考え方で受け入れる時は、いろいろな真理に逆らうたましいの働きが起こる。自分の考えに合わせて相手の話を付け加えたり減らしたり、さばいて罪に定めたり、誤解して悪い感情をいだいたりするのである。

たとえば、ある人が「この間、金剛山（クムガンサン）に行ってきたけれど、景色がとてもきれいで涙が出るほどだった」と言ったとしよう。このような話を聞けば、人々は自分が経験した山に関することが直ちに思い浮かぶ。以前に山に行ったことのある経験や、金剛山に直接行ってはないけれど、写真やテレビなどで見た金剛山のことが思い浮かぶのだ。ほとんどがこれらを土台にして、相手の話を聞く。

そうなると、このようにさばく人もいる。「山を見て涙が出るなんて、おおげさな」と言うのだ。こういう人は、以前に美しい自然景観を見て、涙が出るほど感動したことがないのである。

また、こういう場合もある。ある人がやけどをしたが、苦しみを訴え続けている。すると、そのような苦しみを経験したことがなかったり、忍耐心の強い人が見たりすると、「おおげさだな」と思うのである。

このように、自分の立場に合わせて、自分の経験に合わせて、相手の話を受け入れるなら、真理に逆らうたましいの働きをするようになるのである。たとえ自分が見てそれほどではなかったとしても、相手の立場で聞くなら、「私が山に行った時はそんなにきれいじゃなかったけれど、あの人が見た時は、きれいだったんだろうな」と理解して、信じられるのである。また、やけどの場合、相手がおおげさだと思うのではなく、相手の苦しみを理解するようになる。

ある家庭で、家に帰ってきた夫が、妻の話に返事もなくにしないで無愛想に応対したとしよう。妻の立場から考えるなら、気を悪くして「私を愛していると言ったのに、どうしてこんなことができるんだろう」とさびしくなる。しかし、相手の立場から考えると、「主人は疲れているからそうなんだろう」あるいは「今日、何かつらいことがあったんだろう」と、理解していただけるのである。むしろ「どうすれば主人が元気を出すように助けられるだろうか」と思うようになるのだ。

夫も同じである。自分にいくらつらいことがあったとしても、遅くまで待っていた妻の立場を考えるなら、妻にさびしい思いはさせないはずだろう。ふたりのうちひとりだけでも、相手の立場から考えて、真理でたましいの働きをするなら、平和が破れることはないのだ。

他の人の過ちを見る時も同じである。「あの人はなぜああなんだろう」とさばいてさげすむよりは、「そうするしかない理由があるんだろう」とか、「まだ完全なのではないから」と理解する心にならなければならない。相手が理解できるなら、過ちを見ても赦せて、憐れむようになる。

このように相手の立場を理解していだくなら、すべての人との平和を追い求めるができる。憎むこともなく、気まずくなることもない。仮に相手によって自分が害をこうむつても、相手の立場を先に考える人は、その人を憎んで嫌がるのではなく、相変わらず愛して憐れむことができるのである。

私たちが十字架で死なれたイエス様の愛を悟って、神の恵みを悟るなら、十分に敵をも愛するようになる。ステパノ執事がそうだった。ステパノ執事は福音を伝えて、神に逆らうユダヤ人を諭したが、これを聞いて心を刺されたユダヤ人たちは、ステパノ執事を石で打ち殺した。

〈使徒の働き 7:60〉に「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、眠りについた。」とある。何の過ちもなく石に打たれて死にかけていながら、自分を殺す人を憎んだのではなく、むしろとりなしの祈りをささげているのだ。

もちろん、相手の立場を理解しなさいということが、何が何でも過ちを黙認して、おおいなさいということでもなく、悪を行う人を見て「良い人だ」と嘘をつきなさいというこ

とでもない。神のみことばを基準に善悪をわきまえて、時にはステパノのように相手の悪を悟らせるこどもできる。

しかし、その悪のゆえに相手を憎んで無視するのではなく、過ちを責めても、相手が悔い改めてたましいに幸いを得てほしいという、まことの愛から責めるのだ。そのような心なので、自分を殺す人々のためにも、憐れみの祈りがささげられるのである。

ここまで私たちが真理に属するたましいの働きをするために、どうするべきなのかを調べた。

ところが、真理に属するたましいの働きをしようとして、思ったとおりにできる場合もあるが、そうでない場合もある。したがって、自分が努力するのと同時に、火のように祈って神の力を頂かなければならぬのだ。自分の思いと感じを、言葉と行いをいつも顧みながら、真理に属するたましいの働きをするために絶えず努力しなければならない。

ところで、すべての点で御靈に導かれるようになると、思いや感じが簡単に支配できる。靈が主人になって、たましいと肉を支配するので、心次第すべてが調節できるのである。何かを考えたくないなら、直ちに遮ることもできるし、はなはだしきは、においや音、痛みなどまでも、自分が思ったとおりに遮ることができる。トイレから悪臭がひどくするとしても、そのにおいを感じなければよいのだ。誰がつねって殴っても、思いを遮るなら、痛みが感じられないこともある。

そうできるならば、どれほど安らかで幸せだろうか？ 真理に逆らうたましいの働きがあるから、心に合わないことにあうと、はらわたが煮えくり返って、悪い感情を持つから、自分でつらくなるのだ。

御靈に属する思いをして、すべての考え方と感じを従えて、真理に属するたましいの働きをするなら、いつも喜びと感謝で満たされるようになる。「御靈による思いは、いのちと平安です。」とあるように、いのちと平安が満ちあふれるのである。

真理に属するたましいの働きをするために、祈り続けて努力していくれば、結局は変えられて、神が喜ばれる真理の思い、御靈による思いだけをするようになる。思いと感じを制することができますのである。

この学びで、「はたして私はどんなたましいの働きをしているのか」をはっきり悟って、自分を発見することができたら、これからはただ真理でわきまえて、真理で見て、聞いて、感じができるだろう。それで、真理に逆らうたましいの働きをすべて捨てて、神が喜ばれる真理の思いだけをする、聖なる神の子どもたちにならなければならない。

第3章

御靈による思いと聖靈の声

1. 肉の思いと御靈による思い

たましいの働きを大きく二つに分けると、真理に逆らう働きと、真理の働きがある。言いかえれば、「肉の思い」をする場合と「御靈による思い」をする場合がある。

それでは、「肉の思い」とはどんなものであり、「御靈による思い」とはどんなものだろうか？

人が入力された知識を引き出して活用することが「思い」だと述べた。この時、真理の知識が活用されるか、真理に逆らう知識が活用されるかによって違ってくる。神のみことばである真理の知識が活用される時は「御靈による思い」をして、真理に逆らう知識が活用される時は「肉の思い」をするのである。

ところが、この時、頭で真理をたくさん知っているからといって、御靈による思いができるのではない。御靈に属する知識が心に臨んだ分、すなわち、肉の性質を捨てて、御靈に属する心になった分、御靈による思いをするようになる。心の中の真理が思い浮かんで活用されて、御靈による思いができるのである。

たとえてみよう。多くの人が見ている前で、ある人が自分にひどく恥をかかせた。全く関係のない、理由もわからないことで、悪口を言って脅かすとしよう。

御靈に属する心になっている人は、たましいに先立って真理の心がまず反応する。愛、赦し、平和、このような心が働き、その心がたましいを制するのである。「あの人とぶつからずに、その心を和らげる答えをしよう」「あとの人の誤解を解かなければ」、このように真理に属するたましいの働きをするのである。

また、どうすれば相手と平和をつくることができるのか、その方法までも聖靈が心に働きかけて教えてくださる。すると、このように真理の心がつかさどるとおりにたましいが従って、次はからだを動かしていく。やわらかい表情で、穏やかな声で、また、相手の心を感動させる言葉と行いで、相手に答えるようになるのだ。

一方、「肉の思い」とは、心の中にある真理に逆らうものがたましいの働きによって出るものである。この時は、靈とたましいのうち、たましいが主人になり、心の真理に逆らうものを用いて、心を振り動かすのだ。

もし誰かが自分に悪口を言うのを聞くなら、まずたましいの働きが起きる。「あの人は無礼な人だ。不愉快だ。たくさんの人の前で私の面目をつぶしている。」このような肉の思いをするのである。

この時、たましいを支配しているのはサタンであり、サタンが悪い思いを吹き込んでいるのだ。すると、このようないいなましいの働きに従って、自分の中にある真理に逆らう心が揺れ動く。憤り、悪い感情、憎しみ、自尊心、このようなものが揺れ動き、はらわたが煮

えくり返って、「相手をこらしめてやらなければ」という心が強く起る。

そうなると、からだもこの真理に逆らう心に従って、顔が赤くなったり青くなったりする。荒々しい声で悪口を言ったり、何かを投げたり相手を殴ったりするなど、暴力を振ることもある。

このように人のからだは器のようで、靈とたましいはその中身である。だから、からだは靈とたましいがつかさどるとおりに動くのである。靈とたましいのうちでも、本来は靈がたましいをつかさどるべきであり、たましいは靈に従ってからだを動かすべきであった。ところが、ほとんどの人はそうでない。主を受け入れていない人の靈は死んでいて、本来の主人としての役割ができない。それで、たましいが主人になって、からだを動かしていくのである。

主を受け入れて、ひとまず靈が生き返ったとしても、心を熱心に真理で満たしてこそ、靈がますます力を得て、たましいをつかさどることができる。それで、靈がたましいをつかさどる時は、何かに接するとしても真理の思い、すなわち、御靈による思いをするのだ。

一方、靈が思いどおりに働けない時は、たましいがまず働いて、心の中にある真理に逆らうものによって肉の思いをする。もちろん、靈が死んでいる世の人であっても、時には良心に残っている善に従って、真理に属する思いをする場合もあるが、ほとんどの場合は、真理に逆らうものによって肉の思いをする。

ところで、〈ローマ8:7-8〉に「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。」とある。

私たちは神の子どもたちであり、神を喜ばせる時に答えると祝福を頂くことができる。ところが、肉の思いをするなら、神に対して反抗することであり、神を喜ばせることもできない。

たましいに働きかけて、肉の思いをさせるのは、先に述べたようにサタンである。だから、神に敵対するサタンに従って肉の思いをする時は、神に対して反抗する思いをするのである。したがって、肉の思いを持っていては、信仰を持つこともできなくて、神のみわざを体験することもできない。しかも御靈の歩みに入ることはさらに難しいのである。

それでは、ここから肉の思いと御靈による思いについて、いくつか例を挙げながら調べてみよう。

1) 神のみことばを信じることにおいての違い

聖書のみことばは靈である神のみことばであり、靈の世界の法則を説明したものである。肉の世界での一般的な知識と思い、枠などでは理解できないことがほとんどである。「おとめがみごもった」とか、「イエス様が水の上を歩かれた」と聞けば、肉の思いをする人は、直ちに自分の思いを働くとする。「おとめがどうしてみごもれるのか？ 信じられない」と言うとか、「人が水の上をどうして歩けるだろうか？ イエスは浅い所を歩いてこられたんだろう」と自分なりに思うのである。

しかし、聖霊を受けて靈的に理解しようとすると、このようなみことばも、十分に理解できて信じられる。「全能なる神は何でもおできになる方なので、十分にこのようなことが起きるだろう」とうなずくのだ。

ところが、問題は、神を信じていると言いながらも、目の前の自分の利益にかかわることでは肉の思いを働かして、神のみことばが信じられないことである。たとえば、神は「仕える者が偉い者」と言われ、「自分の利益を求めずに相手の利益を求めるなさい」と言われる。仕えられるよりは仕えて、相手の利益を求めることが自分にとって祝福だと教えてくださるのである。

肉の思いを働かす人は、このようなみことばが理解できなくて、従うこともできないので、祝福も頂けない。「私が低くなつて仕えれば軽んじられる。」「みんな自分の利益を求める世で相手の利益を求めるなら、私だけ損をする。」このような肉の思いを働かすのだ。「十分の一献金をささげることは、神のみこころです」と言われても、「すぐ必要なところがどんなに多いか、収入の十分の一もささげることは難しい」と肉の思いが働いて、もったいないと思いながらささげたりする。

神のみことばどおり聞き従うと、人の思いでは損をこうむりそうでも、神が確かにみことばどおりになるようにしてくださる。神を信じて相手に仕えて低くなれば、他の人々に認められてリーダーになるようにしてください。信仰で神にささげると、必ず靈肉ともに満ちあふれるように、または、それ以上の祝福を下さる。しかし、肉の思いが捨てられない限りは、みことばどおり従うこともできなくて、神が下さる祝福も頂けないのである。

〈マタイ19:16〉にも、こういう人が出てくる。多くの財産を持っていたひとりの青年がイエス様のところに来て、「先生。永遠のいのちを得るためにには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と聞いた。これに対してイエス様が「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになる。そのうえで、わたしについて来なさい。」と言われた。

すると、〈マタイ 19:22〉に「ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行つた。この人は多くの財産を持っていたからである。」とある。この人は、永遠のいのちがあるという事実も信じて、自分なりに神の戒めに従ってきた人である。そして、良い心もあって、イエス様の力を見てみことばを聞くとき、それなりにイエス様を信頼してきた。

このように信じているとはいえ、いざ自分のすべての持ち物を与えるとされると、肉の思いがまず働く。「こんなに多くの財産を全部与えるのは、あまりにも惜しい。」「イエス様について行くことが、はたして私の人生とすべての財産をかけるほどの価値があるだろうか」など、あれこれの肉の思いが先に立つたので、悲しんだのである。財産を全部与えるなら、天に宝を積むことになると言われても、そのことばが信じがたくて、財産を売り払って、貧しい人たちに与えてからついて来なさいというおことばに従うこともできないのだ。だから、この人は結局、イエス様の弟子になって永遠の天国の宝を得る機会を逃してしまった。

また、ある人は神を信じているとは言うが、自分の枠の中で肉の思いを働かして、神の

みわざを体験する道を自分から制限したりする。

たとえば、ある人が数多くの証しを聞いてきたので、神が全知全能だということはよく知っている。十分にがんもエイズもいやして、折れた脚も直ちにいやされる神については、よく知っている。

ところが、ある日、自分からだにとげのような異物が深く刺さって抜けないとなると、この時は違う思いをする。「からだに刺さったとげは、病気やわずらいとは違うので、これは祈りを受けてすむのではなく、病院に行って手術を受けなければ」と思うのだ。

このような肉の思いに遮られていれば、祈りを受ける信仰も与えられないし、祈りを受けても、信じられる信仰が与えられない。靈の信仰が与えられないから、神のみわざを体験することもできない。

しかし、御靈による思いをすると、「神は全能なので、これも解決してください」と信じられる。そのように全面的に信じてゆだねさえすれば、神は確かにご自身の方法で働いてくださる。

万民中央教会には、全国、全世界の聖徒から毎週、数多くの証しが寄せられているが、時間がないために、ほとんどは礼拝の時に紹介できずに終わる。しかし、その中でも新しい証し、特異な証しは、できるなら紹介しようとしている。それは、そのような証しが肉の思いを打ち碎いて、信仰を持たせる大切なきっかけになるからである。

自分はここまで信仰で行えなかったことも、他の人が体験した多様な証しを聞くことによって、肉の思いがもっと簡単に打ち碎かれることもある。自分の中に限界を作つて、「こんなことはできないだろう」という枠を打ち碎いて、「こんなことも十分に答えられる」という御靈による思いに変えられるのである。

2)結ぶ実の違い

たとえば、すべてのことを否定的で悲観的に思い、自分自身についてさえも、信仰によって見ることができない場合がある。人が何か失敗や過ちを犯したとき、あるいは自分の欠けているところを発見したとき、当然神の御前に申し訳なくて、心が痛いであろう。

しかし、御靈による思いをする人は、このような時も「私のこんなところを発見させてください感謝だ」「これからはそうしなければよい。早く変えられて神様に喜ばれよう」と思つて自分を励ます。

ところが、肉の思いをする人は「私がこうだから神様も私を愛されないだろう」「いくらしてもこれだけにしかならないから、私はダメだ」、このように否定的に思う。それで、力を失つて祈りもできなくなり、使命も果たさずに、いるべきところにも姿が見えなくなる。すると、結果的にこのふたりの結ぶ実は、どれほど大きく違つてくるだろうか？

〈ローマ 8:6〉に「肉の思いは死であり、御靈による思いは、いのちと平安です。」とあるように、同じ痛みを体験しても、御靈による思いをする人は、平安と喜びの中でさらにすみやかに御靈の人に変えられるようになる。一方、肉の思いをして、挫折して気を落とした人は、それだけ遅れてしまうのである。

このほかにも、肉の思いを働かす場合は、生活の中でも無数に見つけることができる。

自分の経験と思弁を先に立たせるから、自分なりの枠が破れないから、否定的な性格のために等々、肉の思いを働かすいろいろな原因がある。

ところが、肉の思いをする最も根本的な原因は、まさに心の中にある真理に逆らうもの、すなわち、肉の性質である。

〈ローマ 8:5〉に「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御靈に従う者は御靈に属することをひたすら考えます。」とある。「肉の思い」とは「心の中の真理に逆らうものがたましいの働きによって出るもの」である。いくら自分が真理で考えようとして、御靈による思いをしようとしても、心の中にある肉の性質を捨てないでいるなら、それに従って肉の思いが出てくるのである。肉の性質をすべて捨てて、御靈に属する心になるなら、たましいで何かを思う前に、すでに聖靈が心に働きかけて、御靈による思いがまず浮ぶようになるのだ。

人が肉の思いをするのか、御靈による思いをするのかによって、その人の人生はあまりにも違う結末になる。

〈第二列王 5 章〉のナアマン将軍の例を見てもわかる。預言者エリシャに現れる神の力についての噂を聞いたナアマンは、自分のハンセン病を治そうと、エリシャを訪ねて行った。

ところが、エリシャは使いをやって、「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。」と言っただけだった。するとナアマンは怒って、「何ということだ。私は彼がきっと出て来て、立ち、彼の神、【主】の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このツアラアトに冒された者を直してくれると思っていたのに。」と言う。

自分の国にヨルダン川よりまさる川があるから、いつそこで洗ったほうがよいと言いうながら帰ろうとした。しかし、しもべたちが預言者の言葉に従うように切に勧めると、それでも良い心があったナアマンは考えを変えた。「もしも難しいことを命じたとしたら、きっとそうしたのではないか、ヨルダン川で身を洗えばよいのではないか」と身を洗ったのである。すると、神がエリシャの言葉どおり、ナアマンのハンセン病を完全にいやしてくださった。

もしナアマンが肉の思いに従って、怒って帰ってしまったなら、その人生はみじめに終わっただろう。しかし、肉の思いを捨てて、御靈による思いに従った結果、健康を取り戻して命を救っただけでなく、まことの神に出会い、神を拝む靈的な祝福まで受けるようになった。

このように、二つのうちどちらを選ぶかは、単に祝福を受けるか受けられないかの問題だけでなく、その靈とたましいの問題までも左右するのである。私たちは毎瞬、自分を顧みて、肉の思いを一つ一つ捨てて、すべてのことに真理に従って御靈の思いをしなければならない。

2. 聖靈の声を聞くには

最近は道を案内してくれるナビゲーターを車に装置する人が多いという。これを車につ

ければ、いくら初めて行く道、わかりにくい道でも、現在の位置とこれからの経路などが画面で詳しく見られるそうだ。目で見るだけでなく、声も出てきて、「100メートル前方で右折してください」あるいは、「事故が多い地域なので、スピードを落としてください」と、目的地に到着する瞬間まで詳しく案内する。道が混んでいる所をあらかじめ知らせてくれるし、ひょっとして間違った道に入った時は、また元の道に戻る方法も知らせてくれる。

ところで、車だけなく、私たちの人生にも確かな導き手がいるならば、どれほど便利だろうか。将来やって来る試練や患難を前もって避けるように警告してくれて、祝福の道に、栄える道にだけ導いてくれるならば、本当に良いだろう。

私たちの父なる神は、私たちの人生にもこのような導き手を遣わしてくださった。まさに、私たちの心の中で声を聞かせて、働きかけてくださる聖霊を遣わしてくださったのである。

御霊は神の深みにまで及ぼれて、各人の心も、今後のこととも明らかに知っておられる。だから、聖霊の声を聞いて、それに従って行うことさえできるなら、すべての試練や患難の道を避けて、祝福の道だけに行けるのである。

特に教会の働き人となった人にとって、聖霊の声を聞いて御霊に導かることはとても大切である。聖徒の問題を解決して、信仰を植えつけようとしても、人の思いによってできるのではない。

必ず聖霊の声に従って、慰めが必要な人には神のみことばで慰めて、責めて立ち返らせる人には、みことばの権威をもって責めることができなければならない。そうしてあらゆる問題を解決して、祝福の道に導くとき、聖徒の信仰が成長するのである。このように御霊に導かれて顧みてこそ、聖徒が世に向かって離れることもないし、むしろすみやかにリバイバルにリバイバルを加えるのである。

しかし、聖霊を受けて神の子どもだと言いながらも、聖霊の声が聞けない場合が多い。この『靈・たましい・からだ』の学びをよく糧として、肉の性質を捨てて、御霊に属するたましいの働きをするなら、聖霊の声ももっとよく聞こえるようになる。

神は、信仰で主を受け入れたすべての子どもたちに聖霊を遣わしてくださる。〈ローマ8:14〉に「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。」とある。ところが、人が何かの機械を買ったとして、すぐその機械がよく使えるわけではない。そのように、聖霊を受けたからといって、初めから聖霊の声をはっきり聞いて導かれるのではない。

それでは、どうすれば聖霊の声を聞いて導かれるだろうか？ 最も大切なことは、まさに肉の思いを打ち碎くことである。

そのためには、第一に、心の中の真理に逆らうものの、すなわち、肉の性質を捨てなければならない。捨てた分、聖霊の声がよく聞こえるようになる。

第二に、かすかな聖霊の声でも聞いたたら、そのまま従っていかなければならない。

心に真理に逆らうものがあれば、肉の思いが聖霊の声を遮る。しかし、心に真理に逆らうものが残っていても、真理がある分、もう一方から聖霊の声が聞こえてくる。心に真理

で満たされた部分が多いなら、聖霊の声をそれだけもつとはつきり聞ける。真理で満たされた部分が少ないと、聖霊の声もかすかに聞こえる。ところが、このようにかすかに聞こえてくる時も、聞こえたとおり熱心に従っていけば、心がますます真理で満たされていき、聖霊の声ももつとはつきり聞こえるのである。

たとえば、ある人が自分に悪を行ったとしよう。完全に聖められていないなら、二つの思いが同時に浮ぶ。聖霊の声は心に働きかけて「柔軟でありなさい。敵をも愛しなさい」と言われるが、同時に「気に障る。憎らしい」という肉の思いも浮ぶ。憤りと憎しみなど、心に真理に逆らうものが多いほど、聖霊の声はかすかに聞こえるが、それでも真理を学んで、聖められるために祈ってきた人ならば、聖霊の声が聞こえることは聞こえるだろう。その時、きっぱり聖霊の声に聞き従うなら、それだけ心の悪が捨てられて、だんだん聖霊の声がはつきり聞こえるのである。

第三に、火のように祈らなければならない。

たとえば、二つのラジオを置いて、それぞれ違う放送を流したとしよう。一度に二つの放送を流しても、片方のボリュームをもっと大きくすれば、そちらの放送のほうがよく聞こえる。このように、火のように祈って、聖霊に満たされると、まるでラジオのボリュームを上げるように、聖霊の声がさらによく聞こえるようになる。

聖徒を訪問する時も、自分の思いで訪問するのではなく、祈って聖霊が示されるみことばをもって訪問しなければならない。

仮に、信仰が少ない初心の者が主日礼拝に欠席したとしよう。すると、その聖徒を訪問する働き人は「安息日を聖なる日として守りなさい」というみことばを伝えればよいと思いがちである。

しかし、このように思いを働かして、ただ「主日を守りなさい」「主日を守らなければ地獄に行きます」と諭すからといって、御霊に導かれた完全な訪問にはならないのである。そうなるためには、まずはその聖徒のために聖霊に満たされて祈って、聖霊の声を聞かなければならない。すると、聖霊がこの聖徒が主日を守らなかった根本的な問題について教えてくださる。教会の誰かとぶつかったり、職場で何かの問題が起きて気を落したりなど、どんな理由なのかを知らせてくださるのである。でなければ、具体的な問題まではわからなくても、ふさわしい神のみことばを思い起こさせてくださる。

聖霊の声を聞いたなら、聖徒を訪問する人はそれをただ伝えるだけでよい。そうする時、聖霊が相手の心を開き、恵みを受けるようにして問題を解決してくださる。結果的に主日も守るようになるのである。

このように、聖徒を訪問するとき、あらかじめ祈って聖霊の声を聞かなければならぬが、前もって祈りを十分にささげられない時もある。しかし、絶えず祈って聖霊に満たされているなら、何かの問題のためにしばらくの間だけ祈っても、すぐに聖霊の声を聞くことができる。

聖霊の声を聞けば、神のみこころが何かを確かにわきまえて、真理の中に完全にとどまることができる。将来に何かの問題が起るとき、聖霊の声で教えてくださるなり、祝福される道に働きかけられたりする。深い奥義である靈の世界のことを教えてくださったり、

将来の出来事を知らせてくださったりされる。

ところで、神の子どもたちが聖霊の声を聞き始めると、これが自分の思いなのか、でなければ聖霊の声なのか、よくわからないことがある。もちろん、はっきりと真理と真理に逆らうものに分けられる場合は、どちらが聖霊の声なのかすぐ聞き分けられる。聖書のみことばに照らしてみて、真理ならば聖霊の声であり、真理に逆らうものならば肉の思いである。

しかし、時には、二つとも真理に逆らうものではないが、聖霊の声があれなのかこれなのか、正確に聞き分けられない場合がある。それで、これを明らかにするためには、訓練の過程が必要である。まずはその内容をもって切に祈って聖霊に満たされると、聖霊の声がもつとはっきり聞こえる。

また、祈るだけでなく、聞き従った時の結果を見て、聖霊の声なのか、そうではないかが確認できる。本当に聖霊の声であって神がつかさどられたなら、それに聞き従ったとき、神のみわざが現れる。

たとえば、自分の心に上から喜びと感謝が臨み、聖霊に満たされることが、その証拠になることもある。あるいは、他の人の口を通して聖霊の声だったと確かめるようになったり、聞き従って目に見える祝福の実を刈り取ったことで、確認できたりする場合もある。

聖霊の声を聞く訓練の例として、イ・ジェロク牧師の証しを二つ紹介する。

「私には聖霊の声を聞く方法を教えてくれる人がいなかったので、初心の者の時から神様がご自身で訓練してくださいました。おもに大礼拝をささげているうちに、聖霊の声を聞く場合が多かったです。

ある日は、礼拝時間に突然、ある伝道師に3万ウォン（約3000円）を差し上げようと、心に強く働きかけられました。心に働きかけられたとおり従おうと決心しました。ところが、礼拝が終わって家に帰ったら、あれこれの思いが働き始めました。その当時の3万ウォンならば大金で、用意するのはなまやさしくない金額でした。あれこれ考えた後、結局は『私の思いだったのだろう』と差し上げなかつたのです。

ところが、その翌日、伝道師夫人のお母さんから、このような話を聞きました。昨日の夜、夫人が病院に行って赤ちゃんを産むようになったが、出産費用として必要な金額が、まさに3万ウォンだったということでした。その3万ウォンを作るために、その家族が夜中、苦労をしたとのことでした。

すぐはお金がなくても、聖霊が働きかけた時に従ったなら、神様がお金を用意する道を開いてくださったはずであり、ご家族がそのように苦労しなかつたでしょう。自分もそうしたことで大いに祝福されたはずなのに、聖霊の働きに聞き従わなかつたことを悟りました。このような過程で聖霊の声と自分の思いを分けていく訓練を受けたのです。」

「また、こういう場合もあります。ある日、友だちの家を訪ねて行きました。漠然とした記憶に頼って、やみくもに家を訪ねて行ったのです。ところが、実際にその町に行ってみたら、路地も多くて、道もとても似ていました。記憶をたどりながら似た家を何軒か戸をたたいてみたけれど、一時間経っても搜せなかつたのです。

これではいけないと思って、祈りました。すると、先ほどまで行ったり来たりしていた

道が心に浮かんで、そちらのほうへ行くべきだという気がしました。その道の突き当たりに着いて、再び祈ると、今度は近くにある家の門が目に入りました。この門は、私が覚えていた友だちの家の門とは違いました。それでも心には『ここだ』という強い聖霊の働きを感じて、門をたたいてみたら、友だちが出てきたのです。

この時も、私の思いと聖霊の働きがどのように違っていたかを、もう一度悟ることができました。こういう訓練の過程で、何が聖霊の声で何が自分の思いなのか、徐々にはっきりと分けていけました。」

私たちが初めて聖霊の声を聞く時は、おもに聖霊に満たされている時間、特に祈りの時間に聞くことが多い。さらに、だんだんと訓練を通して聞けるようになるし、また、聖められて心が真理で満たされるほど、ふだんからも聖霊の声を聞いて働きかけられる。いつも聖霊に満たされているので、いつも神と交わることができるのです。

ところで、このように聖霊の声を聞こうとするとき、いくつか覚える点がある。

第一に、聖霊の声を聞き分ける時は、真実に神のみこころをわきまえようとする姿勢になってこそ、正確な声が聞けるということである。

自分の思いと意志を先に立たせたり、自分が置かれている状態や現実的な条件をまず考えたりしてはいけないのである。「私はこっちがいい」という私心がある時や、「あれは現実的に難しい」という先入観を持てば、それがまず肉の思いとして働き、正確な聖霊の声が聞きにくいのだ。

ただ神のみこころならば何としても従おうとする心と、現実的に不可能に見えることでも、自分が従いさえすれば神が成し遂げられるという信仰で祈らなければならない。

第二に、自分の枠と思い、義などによって肉の思いを働かしながら、聖霊の声と錯覚する場合があるということである。真理を学びながら自分なりの枠を作つて、それゆえに聖霊の声が聞こえないのだ。

たとえば、もともと自分の義が強い人がダニエルの固い信仰についてのメッセージを聞いて、「妥協しないことが真理だ」と自分なりの義を作つたとしよう。

ところで、神の働きをする時は、一つだけを言い張ってはいけない。真理に逆らうものでなければ、それぞれの信仰と立場に合わせて調節することも必要である。

しかし、自分の義が強い人は、このような時も自分が真理だと思うとおりに言い張つて平和を破る。こういう人は信仰生活を熱心にしているように、ある限界を突き抜けることができなくて、長い歳月が過ぎても御霊によって導かれず、停滞していることもある。

だから、自分が聖霊の声を聞いたと思っても、それが本当に聖霊の声なのか、すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めながら、神のみこころに従っているのか、いつも顧みなければならない。

第三は、いくら聖霊の声を聞いて働きかけられても、そのまま従わないなら御霊に導かれないということである。

しかも、聖霊の声を聞いても従い続けないなら、神のみわざを体験することもできない

し、聖霊の声さえも聞けなくなる。そのように聖霊の声に従い続けないから全く聞けなくなると、これは結局、救いの問題ともかかわる。

たとえば、人が肉の行いをしたとき、御霊ご自身がひどくうめかれる声を聞くので、恐ろしくて震える心になる。しかし、その声を無視して、一度、二度と罪を犯すなら、後になると全く心が鈍って、恐れもなくなる。それが続くと、結局、死に至るのである。

また、聖霊の声を聞いて働きかけられても、それに従わないなら、御霊に導かれるとは言えない。東のほうへ行けばものすごい宝があると誰かが知らせてくれても、ただ西に行くなら、その宝が持てないのである。

イ・ジェロク牧師のもう一つの証しを紹介する。

「私が神学生の時、二百日徹夜祈祷をしたことがあります。早朝4時まで徹夜祈祷をして、五時頃床に就きましたが、遅くとも七時頃には起きなければなりませんでした。自分で目を覚ますのが楽でなかったのです。

すると神様が起こしてくださいました。7時になると、門の外から何かの音を聞くようになります。確かに誰もいないのに、外で人の気配がしたり、「お父さん！」という娘の声がはっきり聞こえたりするなど、目が覚めるようにさまざまな方法で働いてくださいました。

ところが、このように神様が働くのに、思わずまた眠ってしまったことが何回かありました。すると神様もそれ以上起こしてくださいなかつたのです。これを悟って、私は大変悲しんで悔い改めました。朝、起こしてくださいないこと自体はある面ではささいなこととも言えるかもしれません。けれど、私が聞き従わないで、これ以上神様が働くのを止めたいということがあまりにも胸が痛くて、申し訳なかったのです。」

聖霊の声が聞こえなくなる過程もこれと似ている。いくらささいなことでも、聖霊の声を聞くとき、そのまま従っていき、だんだん確かに御霊に導かれていかなければならない。

〈第一テサロニケ5:23〉に「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。」とある。

このように全く聖なるものになるなら、たましいとからだも御霊に属するたましいとからだに変わり、主の来臨のとき、責められるところのないように、靈、たましい、からだが完全に守られるのである。

御霊に属するたましいは、肉の思いを捨てて、真理に従って御霊による思いだけをする。また、肉の思いがないほど、聖霊の声を聞いて、神のみこころがわかつて、聖霊の声に従つて神のみわざが体験できるのである。

3. 人と動物との違い

今までからだとたましいについて学んだ。次は靈について学ぶが、その前に、参考までに説明することがある。それは、人と動物の違いについてである。

人は靈とたましいとからだで構成されていると述べた。それでは、動物はどうだろうか？動物も靈・たましい・からだでなっているだろうか？人は、この地上の寿命が尽きてからだが死ねば、その靈とたましいは天国か地獄に行く。では、動物も、死んだら天国か地獄に行くだろうか？

進化論を信じる人々は、非常に下等な生物から始まって、機能と構造が複雑な高等生物に進化して、結局、ヒトに進化したと説明する。仮にそうなら、人と動物が本質的にはそれほど違うところはないとも思える。

しかし、靈・たましい・からだについて知ると、このような説明は全く正しくないことがわかる。なぜなら、人と動物は、根本的に造られた時からして違って、構成もまた、全く違うからである。

人は靈とたましいとからだで構成されていて、その中で最も大切なのは靈である。これから靈についてもっと詳しく説明していくが、人の靈は決して消滅しない。からだは人の靈とたましいを入れている器のようなもので、幕屋のようなものである。だから、からだが朽ちてなくなっても、靈は消滅しないし、たましいも、靈と結びついてそのまま残る。

ところが、神が動物を造られた時は、人のように神のいのちの息を吹き込んで造られたのではない。それで、動物は神と交わることができないのである。魚や鳥、また、陸地で生きる動物もみな同じである。

これらは頭の中に脳があって、生まれてからその中に入力した知識と本能に従って生きている。そのうち死んでからだが朽ちると、すべてが消滅する。脳細胞が朽ちてなくなるので、その中に入っていた記憶もなくなって、それ以上何の働きも起こらなくなる。完全に無に帰ってしまうのである。

〈伝道者の書 3:21〉に「だれが知っているだろうか。人の子らの靈は上に上り、獸の靈は地の下に降りて行くのを。」とあり、神のいのちの息が吹き込まれたかどうかで、人と動物が違うことをはっきり教えてくれる。

ところが、このような違いがわからない人は、家で飼っていた動物が死ねばひどく悲しむ。事実、死んだ動物のためというよりは、自分の悲しみのために涙を流すほうが多い。また、畑を耕す牛の立場から考えてみるなら、死んでしまったら、それ以上むちで打たれなくてもよく、つらい労働をしなくてもよいのだ。しかし、牛の持ち主の立場から見れば、財産に大きい損失をこうむるので、悲しむのである。

ペットの犬や猫が死んだ時も、犬や猫のほうからは死ねば終わりである。存在自体がくなってしまうので、それ以上苦しみも、悲しみもない。しかし、主人の立場では、自分がかわいがっていた存在がいなくなるので、何ともさびしくて空しいから悲しむのだ。また、自分が死を恐れているように動物もそうだろうと思って、かわいそうになるのだ。

たとえば、子どもたちが遊んでいた人形が壊れたとしても、人形そのものが何かの苦しみを感じるのではない。ところが、子どもは自分が痛みを感じるように人形も痛みを感じるだろうと思うので、かわいそうになる。

動物もこれと同じである。もちろん人形とは違って、動物には命があるので、苦しみを感じるし恐れもある。それなりに感情があるから、主人が愛情を注ぐと、これを覚えて主

人に特別な愛情を見せたり、楽しみや怒りや悲しみを表現したりする。

しかし、これにも限界がある。動物は、生まれれば本能に従って生存する方法を学んで、空腹になると食べて、眠たければ眠って、時になると仔を生んで、そのうち死ぬ。

動物が価値ある人生が何かと悩んだり、「私はなぜ生きているのだろうか?」と、人生の意味を探そうとしたりすることはない。動物の中で割合知能が高いと言われているイルカやチンパンジーのような動物でも、「死ねばどうなるだろうか?」と思って神を恐れたり、宗教を求めたりすることはない。

もちろん、動物も本能的に死に対する恐怖はある。誰かが自分を殺そうとすれば逃げたり、危険を感じれば抵抗したり恐れたりする。しかし、これは危険を感じる瞬間だけであり、目の前から危険がなくなると、死に対する恐怖はたちまち消える。

ところが、人はどうだろうか? 本能に従って生存に必要なたましいの働きだけをしたり、単純で限られたたましいの働きだけをしたりするのではない。動物とは全く違う次元で、さらに複雑で多様なたましいの働きをしながら、単に食べて生きる以上の、もっと価値あるものを追い求める能力がある。だから、文明を発達させることもできるし、人生の意味と価値について悩むので、哲学と宗教を作り出すのである。

死に対する反応も、動物とは違う。死の苦しみを恐れるだけでなく、死そのものを恐れて、死んだ後の世界に対して、もっと大きい恐れを持っている。それで、まだ死が目の前に迫ってきたのでもないのに、死を恐れて、何としてでも避けようとするのである。

今日も、人々は何か長生きしようと、健康であるために力を注ぐ。そのうち死が近づいたことがわかれば、体の苦しみより心理的な苦しみのほうを受ける。

たとえば、ある人が体の調子が良くなくて検査を受けたが、思いがけずがんの末期で、後どのくらいしか生きられないとわかって入院したとしよう。それなら、その前までは普通に生活していた人が、病院に入院してから一日、二日でやつれて、病人の姿になってしまう場合が多い。病勢が突然、悪化するからではない。「もう自分は死なんだな」という絶望感と恐れのためにそうなるのである。

死刑宣告を受けた囚人の場合もそうである。1か月後に死刑になると言われると、1か月間、ずっと死刑になることを恐れて苦しむ。死刑になる時の肉体的な苦しみはつかの間で終わるが、死に対する恐れのために受ける精神的な苦しみのほうが、肉体的な苦しみよりもひどいこともあるのだ。

フランス革命の時に処刑された王妃は、裁判で死刑の宣告を受けてから死ぬまで、監獄に閉じ込められている数日間で、髪が真っ白になってしまったそうだ。死への恐れによって受けた心の苦しみが、それほど大きかったのである。

人がこのように動物より飛び抜けたたましいの働きができる、死に対する恐れが感じられるということは、まさに、人にはたましいとからだだけでなく、神と交わる靈があるからである。その靈があるから、人は本性の中で靈の世界について感じるようになる。主を信じる人はもちろんのこと、信じない人も、深い心の底では神について、天国と地獄につ

いて感じるのである。

したがって、過去に神について知らなくて福音が聞けなかった人々の中でも、良心が正しい人は、漠然とではあるけれど、天を拝んで善良に生きていこうとしたのである。また、頭では神を認めまいとする人々も、「天国、地獄がどこにあるのか。死ねば終わりだろう」と言い張る人々も、本性の中には漠然とした恐れがある。

仮にそのような恐れがないならば、人は死をむしろ歓迎するかもしれない。貧困と病気とあらゆる苦しみの中でみじめに生きているなら、いっそ死んで永遠の安息を味わうほうが良くはないだろうか？ ところが、いくら口では「死にたい」という人も、いざ死に直面すれば、何としても生きようとあがくのである。

あまりにも絶望的な状況で自暴自棄になったり、心と思いを悪い靈に奪われてしまったりする場合は、そのような恐れさえ忘れてしまい、自分で死を選ぶ場合もある。しかし、ある程度でも自分を制することができる人ならば、いくら神を否認していても、死に直面すると、本性にある恐れのため少しでも長く生きようとする。

一つの例として、18世紀の啓蒙主義の哲学者ボルテールを挙げてみよう。彼は有名な無神論者だった。この人は、神もいないし、天国も地獄もないと主張しただけでなく、50年以内にキリスト教を抹殺させると大言壮語して、多くの無神論の書物と神に敵対する文章を書いた。

そんなボルテールが臨終を迎えると、前とは全く違う遺言を残した。自分を担当した医師に「私は神と人に捨てられました。私は恐ろしい地獄に行きます。あなたが6か月だけでも私の命を延ばしてくれるなら、私にとって価値あるすべての半分を差し上げます」と切に願ったのである。そして、死ぬ直前には「いっそ生まれなかつたらよかったのに」と嘆いたそうだ。

有名な哲学者であり、いくら賢い人であっても、それで頭では神を否定して、天国と地獄を否定したとしても、臨終が近づくと、何がまことなのか本性の中で感じられたのである。

興味深いことは、キリスト教を抹殺させようと文章を書いてきたボルテールの家は、彼が死んで20年後には、聖書を出版する出版社になって、後には外国語の聖書まで出版する本部になった。生ける神のみことばは、ある人が否認しても、立ち向かったりしても、それにもかかわらず永遠に生きて働き、今日まで全世界に伝えられているのである。

今まで人と動物の違いを説明した。動物は神と交わる靈がないので、からだが死ねばすべてが消滅すると説明した。

時々、人は「動物が恨みをいだいて死ねば、その靈が人に復讐する」という話を聞いて恐れたりする。また、「猫やキツネのように悪賢い動物の靈が人に害を及ぼす」と言ったりする。

しかし、今までの説明を理解したなら、これらは全く根拠のない話だとわかるだろう。動物はからだの死とともにすべてが消滅してしまうので、誰かに害を及ぼしたくてもできないのだ。また、いくら歳月が経っても、神と交わる靈のない動物が進化して、人のように神と交わる靈を持つ存在に変わることはできない。

ただ人にだけ、神がご自身と交わる靈を下さった。それで、アダムはすべてを治めて従える万物の靈長になれたのである。

今日の人の靈・たましい・からだは、アダムが初めて造られた時の靈・たましい・からだと同じではない。アダムが罪を犯す前は、靈とたましいとからだのうち、靈が人の主人になって、たましいとからだを治めていた。ところが、アダムが善惡の知識の木の実を取つて食べて、罪を犯してからは、靈が死んでしまった。ここで「死んだ」とは、消滅したことではない。靈の活動が全くできなくなつて、死んだようになり、歳月が過ぎて肉の寿命が尽きると、靈とたましいが地獄に行くので、靈的に死ぬという意味である。

アダムが罪を犯した後、靈が死んでたましいとからだを治められなくなると、今度はたましいが人の主人の役割をしながら、からだを治めるようになった。このようにたましいが主人になると、歳月が経つにつれて、人はだんだん人としての価値を失うようになった。神のかたちに造られた人なのに、たましいとからだを真理に導いていた靈がその役割をしなくなつた一方、たましいは、動物と同じように、本能的で情欲的なことを追い求めていったからである。

それで、〈伝道者の書3:18〉に「私は心の中で人の子らについて言った。『神は彼らを試み、彼らが獸にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。』」とあるのだ。獸にすぎないような人の子らは、その靈が消滅しないので、結局、永遠の地獄で刑罰を受けなければならないのである。

したがつて、私たちが天国に行くためには、必ず人としての価値を取り戻すべきである。すなわち、再び靈が主人になって、たましいとからだを治めなければならぬ。それでこそ神のかたちに造られた神の子どもとしての地位が取り戻せて、この地上の人生が終われば、天国で永遠のいのちが受けられるのである。

それでは、どうしたら私たちの靈が生き返つて、たましいとからだが治められるだろうか？　これについては次の第3部「靈」で調べていこう。

第3部

靈

〈第一テサロニケ 5:23〉

「平和の神ご自身が、
あなたがたを全く聖なるものとしてくださるように。
主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、
あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。」

第1章

靈と靈の知識

1. 靈の定義

「靈」とは何だろうか？ 精霊とは「死んだり朽ちたりせずに、変わることのない、永遠のもの、いのちであり、真理そのもの」を言う。

私たちの神は靈であられる。〈創世記 2:7〉に「神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」とある。神はまず、土地のちりで人を形造った後、その鼻に神のいのちの息を吹き込んで、アダムが生きものになるようにされた。

ここで「いのちの息」とは、神のすべての力が凝集した結晶体のことであり、アダムのいのちの原動力になった。神はアダムにいのちの息を吹き込まれることによって、靈であられる神の属性の一部を分けてくださった。そして、いのちの息を受けたアダムもまた、靈的な存在になった。神と交わる靈の生きた者になったのである。

2. 靈と靈の姿

神がアダムのからだの中にいのちの息を吹き込まれたとき、アダムの靈は自分のからだの形のとおりになった。アダムのからだが「アダム」という形を持っているように、靈もアダムと同じ姿を取ったのである。

靈の姿とは、簡単に言えば、靈の形であり、靈を入れる器だと思えばよいだろう。私たちの血肉のからだも、みな同じではなく、他の人と見分けられるように、その姿がそれぞれ違う。ライオンはライオンの姿を、鷲は鷲の姿をしているので、私たちはライオンと鷲

が見分けられるのである。

靈も同じように、御使いならば御使いの姿、天の軍勢ならば天の軍勢の姿をしているのである。もちろん、御使いと天の軍勢の中でもそれぞれ違う姿をしているので、互いに見分けられる。肉の目では靈の姿を見ることができないが、靈の目が開かれて見ると、それぞれ姿が違うので見分けられる。このように、三次元の世界に固有な姿があるように、四次元の世界の天国にも固有の姿がある。天国ではこの姿を見て、互いに見分ける。

それでは、救われた人は、どんな姿でいるだろうか？

〈第一コリント15：42-44〉に「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御靈に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御靈のからだもあるのです。」とある。また、〈第一コリント15:51-52〉には「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましよう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」とある。

これを見ると、まず主が空中に降りて来られると、救われた人は一瞬にして復活のからだ、すなわち、御靈に属するからだに変わることがわかる。この「復活のからだ」は、白い御座の大審判の後、それぞれの報いに応じて栄光の光を放つ「完全な御靈のからだ」にまた変わる。そして、その姿のまま天国で永遠に生きる。

さて、復活のからだは、イエス様がよみがえられた時の姿のように、骨と肉を持っている(ヨハネ 20:27)。これは靈とたましいに朽ちないからだが着せられた状態である。私たちの朽ちる血肉のからだが、神のみことばとその力によって変えられて、新しい、朽ちないからだになる。

したがって、永遠に朽ちない骨と肉でできているこのからだは、光を放つ。この地上で身体に障害があつたり、腕、脚がなかつたりしても、正常なからだになる。また、この「復活のからだ」は、影のようにはかないでなく、はっきりした形を持っているが、時間と空間の制約を受けない。それで、よみがえったイエス様が弟子たちのいる所に現れたとき、自由自在に壁を通り抜けることがおできになったのである(ヨハネ 20:26)。

この地上の血肉のからだは、年を取ればシワができる皮膚が硬くなるが、天国では、朽ちない新しいからだで決して老いることもなく、いつも若さを保って太陽のように明るく輝くのである。

3. 靈の知識

それならアダムの靈には、どんなものが入っていたらどうか？

靈の中に入っているものは「靈の知識」と言える。初めに造られたとき、アダムの靈はまだ靈の知識を持っていない、何も書いていない白紙のようだった。まるで、生まれたばかりの赤ちゃんが、たとえ人の形は持っていても、その頭の中には人間らしく生きられる知識が全く入っていないのと同じである。

赤ちゃんはだんだん育ちながら、周りの人々から、そして学校と社会から、いろいろな知識を学んでいかなければならない。それでこそ人の役割ができるのである。

アダムも、創造された後、多くの時間をかけて神からいろいろな御靈に属する知識を学んだ。神の心についても学び、真理、靈、善などについて学び、また、神が造られた万物についての知識も学んだ。

先に、人のたましいは消滅しないと述べた。それは、人のたましいは靈に結びついて、たましいとしての働きをするからである。それで、からだが死んで脳の記憶装置がなくなっていても、その中の知識は靈の中にそのまま残り、思いや感じもある。このように結びついた靈とたましいとをまとめて「靈魂」と言う。

この時のアダムは、靈が主導的な役割をしていたので、靈が何かをしようとするとき、たましいとからだは直ちに靈が願うままに従っていた。ところが、今日の人々はそうではない。自分で切に願うけれど、できないことが多い。

たとえば、眠りにつく前は「朝、早起きしたい」と思ったのに、実際、そうできない場合が多い。からだが疲れていて、起きたい時間に目が覚めなかったり、その時間に目は覚ましたけれど、「ふとんの中が暖かくて出たくない」とか「もう少し寝たい」などたましいの働きが起きて、からだがたましいに従って起きられなくて、また眠ってしまったりするのだ。自分がしたいと思っていても、からだやたましいが従ってくれないのである。

また「この話は、絶対に他の人に伝えてはいけない」と心に決めたが、思わずそうしてしまったりする。それから、「私はなぜそうしたんだろう」と後悔するのだ。これもまた、自分が願うままにからだとたましいが従わなかったからである。

神が造られた時のアダムはそうではなかった。靈が願うことはたましいとからだがそのまま従って行っていた。ところが、アダムが善惡の知識の木の実を取って食べたので、神の御前に不従順の罪を犯してからは変わったのである。

第2章

靈の死と回復

1. 靈の死

アダムが善惡の知識の木の実を取って食べたことで、神の御前に不従順の罪を犯した後は、「あなたは必ず死ぬ。」と言われたように、靈が死んでたましいが主人になった。さて、靈は永遠のもの、移り変わることがないと述べた。だから、「アダムの靈が死んだ」ということは、靈が消滅したという意味ではない。神との交わりが途絶えてしまったアダムの靈が、活動をやめて死んだようになったという意味である。

神との交わりが途絶えてしまうと、その時からサタンが人のたましいを通して真理に逆らう知識を吹き込み始める。すると神が与えてくださった靈の知識がだんだん消える代わりに、そこにはサタンが植えつける肉に属するもの、すなわち、真理に逆らう知識が詰められるようになる。

たとえば、神は「仕えなさい」「柔軟でありなさい」「真実でありなさい」「真理を喜びなさい」このようなものを植えつけられたが、サタンは「高くなりなさい」「憤りなさい」「自分の益を求みなさい」「嘘をつきなさい」「そねみなさい」などを植えつけるのである。

歳月が経つほど、神が植えつけられた靈の知識は消えていく一方で、サタンが植えつける真理に逆らうもの、すなわち、肉に属するものはだんだん多くなる。このように、心の中に真理が消えて、真理に逆らうものが多くなるほど、だんだん靈は力を失って、ついにはぴくりとも動けなくなる。

クモが獲物をつかまると、糸でぐるぐる巻いてがんじからめにする。まるでこのクモの糸のように、真理に逆らうもの、すなわち、肉に属するものが靈を取り囲んで、身動きもできないように閉じ込めてしまうのだ。すると、靈は死んだように完全に活動を停止してしまい、神が初めに下さったいのちそのものだけが残る。

たとえば、人が事故で脳が損傷して植物人間になったり、脳死状態になったりすると、当分生命は維持される。しかし、人として生きているのではなく、生命は断たれなかつたものの、死んだのと変わらない。それで、脳死状態でまだ心臓が動いているとしても、法的には死んだと認める国もある。

同じように、初めにあった靈が消滅したのではないけれど、靈の知識も、靈の機能も消えてしまった時は「靈が死んだ」と言うのである。

このように靈が死ぬと、アダムはその時からたましいに支配される、たましいの人になってしまった。たましいを通して真理に逆らうものを受け入れて、朽ちる肉に属するものを心に受け入れるようになったので、結局、肉の人になったのである。

アダム以降、人々は歳月が過ぎるほど、ますます肉の性質を生んでいく。〈ヨハネ 3:6〉には「肉によって生まれた者は肉です。御靈によって生まれた者は靈です。」とある。肉

によっては靈を生むことはできない。

世の人々は生きていきながら道徳を学び、法を学ぶが、だからといってだんだん善良になるのではない。子どもがおとなになっていくほど、だんだん悪くなっていくだけである。歳月が経つほど、世では悪に悪が加わり、罪が満ちるようになるのだ。肉によっては肉が生まれるしかないのである。

ところが、私たちが肉の人のままでいては救われない。たましいの人になって肉に変わってしまった人は、サタンのしわざを受け続けて罪を犯し、ついに地獄に行かなければならない。私たちが地獄に行かないためには、つまり、救われて天国に行くためには、まず死んでいた靈が生き返らなければならない。

2. 死んだ靈が生き返って救われるには

それでは、どうしたら私たちの靈が生き返って、救われるだろうか？

靈の知識がなくなって靈の活動が中止されたので靈が死んだ、と述べた。だから、これからは靈がまた活動できるように、靈の知識を満たしていかなければよい。そのためには、何よりもまずイエス・キリストを信じて、救い主として受け入れなければならない。

〈ヨハネ 14:6〉に「イエスは彼に言られた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはできません。』」とある。イエス様が十字架を負って、血を注ぎ出して死なれたので、私たちの罪を贖ってくださった。私たちがイエス・キリストを救い主として受け入れるなら、神は私たちの中に聖靈を遣わしてください。

聖靈は私たちの死んだ靈を生き返らせて、再び活動できるようにされ、靈の知識を供給してください。罪と義とさばきについて悟らせてくださいり、聖書に記された神のみことばが信じられるように導き、みことばどおり従って行うように助けてくださいるのである。

ひとまず主を受け入れて聖靈を受けければ、新しく生まれるようになる。しかし、一度新しく生まれたからといって、それで終わるのではなく、信仰生活を熱心に続けなければならない。

ある人はこのように尋ねるかもしれない。「死んだ靈が生き返れば天国に行けるのに、何のために教会に通って信仰生活をしなければならないんですか？」しかし、私たちが知るべきことは、死んだ靈が生き返ったら、その次は靈が成長する過程が必要だということである。

聖靈を受けて死んだ靈が生き返ったなら、その中に靈の知識を再び満たしていく過程がなければならない。すなわち、御靈によって靈を生んでいくのである。先に、イエス・キリストを主として受け入れて、聖靈を受けければ、聖靈の力でいのちの種が再び活動するようになり、聖靈は心に靈の知識を供給すると述べた。

それで、聖靈を受けて信仰生活をしていくと、アダム以降、だんだん黒くなった心が再び白い心に変えられる。火のように祈りながら、罪と戦って血を流すまで抵抗するほど、黒い心がますます消えていく。聖書のみことばどおり行って、愛、善、真実、柔軟、謙遜などの靈の知識、真理の知識を受け入れるほど、白い心がさらに多くなる。

このようにし続けていけば、ついに黒い心が少しも残っていない、完全な白い心に変えられる。これがまさに聖められる過程である。アダムが罪を犯してから人が肉に変わつていったのと反対の過程を踏むのだ。これがすなわち、「たましいに幸いを得ていく過程」であり、御靈の人に変えられる過程である。

〈第三ヨハネ 1:2〉に「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」とある。たましいに幸いを得ていると、神がいつも私たちとともにいることがおきになる。神が、私たちがすべての点でも幸いを得るように祝福して、あらゆる病気と災いを防いでくださるので、靈肉ともに健康であるのだ。

ところが、ある人は、聖靈は受けたけれど、心を変えない場合がある。神を信じていると言いながらも、相変わらず罪と惡の中で黒い心を持って生きているのだ。あるいは、初めは熱心に罪を捨てるために走って行ったのに、ある瞬間からなまぬるい信仰になって、罪との戦いをやめてしまう場合もある。

こうなると、その心はどうなるだろうか？ 前は少しずつ白く変えられていたのに、罪との戦いをやめてからは再び黒く染まっていく。このように相変わらず黒い心、真理に逆らう心でいれば、聖靈を受けたとしても、その中でいのちの種が力を得ることができないのだ。

〈ヨハネ3:5〉に「イエスは答えられた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御靈によって生まれなければ、神の国に入ることができません。』」とあるように、私たちが新しく生まれて救われることは、心に聖靈を受けるだけでなく、水、すなわち、みことばで心が変えられなければならない。

また、〈第一テサロニケ 5:19〉には「御靈を消してはなりません。」とある。主を受け入れて聖靈を受けても、心を変えないでずっと黒い心でいるなら、すでに受けた聖靈が消えることもある。すると、救いともかかわりがなくなる。

一度聖靈を受けて救われたとしても、そこに安住して変えられないなら、〈黙示録 3:1〉に「あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。」とあるように、死んでいるのである。

したがって、聖靈を受けたからといって、そこにとどまるのではなく、こまめに心の罪と惡を捨てて、真理の知識を入れていかなければならない。完全に白い心を取り戻す時まで、休まないで努力しなければならないのである。

3. 靈の回復過程

子どもが生まれると、幼児期を経て青年からおとなになるように、私たちの靈も、生き返った後は成長し続けなければならない。いのちがあるならば、そのまま止まっていることはできない。

このように靈を生んで成長させる働きを誰がするのだろうか？ それは聖靈である。聖靈の役割について、〈ヨハネ16:7-8〉に「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去つて行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去つて行かなけれ

ば、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」とある。

すなわち、私たちの心に来られた聖霊は、私たちが罪と義とさばきについて悟るようにされる。また、救い主であるイエス・キリストを信じられるように助けて、神のみことばに含まれた靈的な意味を悟って、心から受けられるように導いてくださる。

このように聖霊に助けられて、私たちの心に真理である神のみことばが植えつけられると、それが靈を生んでいくことなのだ。すなわち、神は靈であり、ことばは神であるので、真理のことばが心に植えつけられるほど、靈を生んでいくのである。

このように死んだ靈が生き返って成長していく過程が、まさに信仰生活である。そして、この過程を通して私たちは失った神のかたちを取り戻して、神のまことの子どもになるのである。

〈ヨハネ3:3-5〉で、イエス様が靈的に新しく生まれる過程をたとえで言われた。「イエスは答えて言われた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見るることはできません。』ニコデモは言った。『人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。』イエスは答えられた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。』すなわち、人が水と御霊によって新しく生まれてこそ神の国に入る、と言われたのだ。

ここで「水」とは、真理であり、神のみことばを意味する。それで、この水によって新しく生まれたということは、神のみことばを心に留めて、この中を歩んでいくことを意味する。すなわち、真理のことばを心に植えて、そのとおり行っていくとき、水によって新しく生まれるのである。

また、御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができない、と書いてある。たとえば、聖書を100回読んだとしよう。このようにたくさん読んだとしても、私たちの心に聖霊が来られなければ、みことばに含まれた靈的な意味を悟ることができない。したがって、心に植えられず、信仰にならないので、行いも伴わないのだ。単に一つの知識として積まれるだけである。

聖霊が助けてくださってこそ靈的な悟りが与えられて、このみことばを握って祈ると、行う力が与えられ、神のみことばどおり生きられるのだ。したがって、聖霊が心に来られる時だけ、私たちは天国に行けるのである。

理解しやすくてとてみよう。ある人がバスケットボールの選手になりたくて、バスケットボールについて書かれている本を買って、熱心に読んだ。しかし、それだけでは選手になることはできない。バスケットボールとはどうすることだという知識を習得しただけである。選手になるには、コーチについて実際に訓練をしなければならない。読んだことをもって実際に一生懸命ゴールに入れてみたり、ボールを手に取つたり、ボールを奪われたりする練習を通して身につくとき、はじめてバスケットボールをしたと言える。そして、自信がついて熟達すると、選手として認められるのだ。

信仰生活も同じである。いくら説教を聞いて聖書を読んでも、これは頭にあるのであって、心に植えられるのではない。聖霊に助けられない時は、聞いて頭で知っている一つの知識にすぎない。心で信じられることもなく、したがって、行いも伴わないものである。

ただ聖霊に助けられてこそ、私たちは真理のみことばを悟り、心から疑わないで信じる、まことの信仰が与えられる。まさにその時、行いが伴うのであり、行うほど真理に逆らう肉の性質を捨てることができて、靈を生むようになり、だんだん御霊の人に変えられるのである。

このように聖霊がコーチになって、私たちを悟らせて信仰を植えつけ、行うように教えてくださる。また、みことばどおり行わないと、御霊がうめかれるので、私たちは悩むようになる。このように聖霊は、私たちが目を覚まして祈って、悔い改めて立ち返るようにされ、だんだん御霊の人になるように導かれる。したがって、聖霊に助けられなくては、私たちの靈が成長できないのである。

御霊によって靈を生んでいくと、結局はどうなるだろうか？「御霊の人」になるのである。「御霊の人」とは、完全に真理のみことばを心に留めて行い、心が良い地に耕された人のことである。私たちが真理のみことばを聞いて、心の扉を開いてみことばを心に植えると、真理に反していたものが心から抜けていく。岩地から石を拾って捨てたほど、いばらの地からいばらを抜き取ったほど、良い地になるのと同じである。また、雑草があれば抜いて、地を耕したほど良い地になる。

このように、主を受け入れて、聖霊に助けられて、真理のみことばをどれほど植えていったかによって、真理に逆らうものが一つ一つ抜けていく。憤りが、憎しみ、そねみ、嫉妬が抜けていき、さばいて罪に定めたこと、偽り、ずるがしこさ、変わらぬ心などが抜けていく。それで、結局は心に真理だけがあると、御霊の人になったと言える。真理の心と、真理に逆らう心が一緒にある時は、御霊の人と言えないものである。

それで、私たちが御霊の人になるためには、聖書六十六巻のみことばがそのまま心に耕されて、このみことばを守り行わなければならない。このように真理のみことばが完全に心にあって、聖霊に助けられてみことばどおり行う人が、まさに御霊の人なのである。

御霊の人になったら、良心も真理に変わり、心そのものも真理になる。つまり、アダムが罪を犯す前のように、靈がたましいとからだを治めるようになるのだ。これが、靈が生き返って成長し、回復するということである。

第3章

人の心

1. ことばと神

私たちが信仰生活をするということは、窮屈的に自分の心を神の心に似た心に変えていくことである。このように心をえるためには、人の心とはどんなものなのか知らなければならない。これから人の心について学ぶが、その前にまず説明することができる。それは「神のことば」についてである。

神がアダムに満たしてくださった靈の知識が「ことば」であり、このような神のことばを記した書が聖書である。

私たちが聖書を読んでみると、「ことば」についていろいろな表現がある。「ことばは神であった。」とあり、また「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と、イエス様のことを説明している。このような表現を見れば、「ことば」とは、単に六十六巻の聖書のことばを意味するのではなく、さらに深い靈的な意味があることが感じられる。

それでは、はたして「ことば」とは、何を意味するだろうか？

ことばとは、単に文字で記された聖書のことばだけでなく、聖書に記されていることばを全部含む、真理そのものである「神の心」である。この心は万物を創造された「神の力」でもあり、同時にどこしえからどこしえまでおられて無限な「神の御姿」でもある。神の心は光と真理そのものであり、靈であり、いのちそのものである。神の心は愛と公義がとても調和して結びついていて、限りない力と知恵、知識の初めでもある。

神はことばで天地を創造されて、また、イエス様もことばで風と波を静めて、ことばで死んだ人を生き返らせた。

ところで、〈ヨハネ1:1-3〉に「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によつて造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」とある。

神は靈であり、限りないお方であるから、初めと終わりという概念が必要でないし、どこしえからどこしえまで存在しておられる。したがって、実際、神の存在を説明するためには「初め」という言葉さえも必要ない。

それでもここで「初め」という言葉を使う理由は、人のほうから理解できるように、神が区分できる時点を下さったのである。人はたましいという枠があって、必ず初めと終わりがあってこそ何かが理解できるからだ。しかし、たましいの限界を打ち破って考えてみるなら、神には初めがないということが、あまりにも当然のことだと悟れる。

神に初めがあるならば、それ以前があつて、またその前の時間があるはずなのに、神以前にはどんな存在があつたのだろうか、という疑問が次々に起こるだろう。したがって、

万物の創造主であり、唯一の神である神に、何かの初めがあるならば、それがむしろおかしいのである。

参考までに、〈創世記 1:1〉にも「初めに、神が天と地を創造した。」とあり、「初め」が出てくる。これは〈ヨハネ 1:1〉の「初め」と違う意味の初めである。創世記の「初め」は、永遠の昔の初めではなく、神が天地万物を造られた時点であり、実際に創造のみわざが始まった時点である。

ところで、〈ヨハネ 1:1〉を見ると、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあつた。ことばは神であった。」とある。ことばは「神の心」と述べたが、ここでは ことばと神とは、それぞれ別のように書いてある。ところが、すぐ続いて「ことばは神であった。」とあり、ことばと神が一つであることを説明している。また、「初めに、神があった。」ではなく、「初めに、ことばがあった。」とあるので、神よりことばのほうが先にあったことを表している。

要約すると、神とことばは一つである。それを分離して言うこともできるが、分離して考える時は、ことばのほうが先なのである。

初めに神がひとりでおられた時は、今のような神の姿をとっておられたのでもなく、神という名を持っておられたのでもなかつた。全宇宙空間の中に神の心、すなわち、ことばが光と声として存在しておられた。

そのうちにある時点になって、神は人間耕作のために今のような姿をとって、同じ心を持った三位一体の神になられた。すなわち、御父、御子、御靈の神になられたのである。

〈ヨハネの福音書 1:14〉に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とある。

ここでイエス様が「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」という意味も、このことを指している。三位一体の神が同じ心を持っておられるので、御父、御子、御靈がみな「ことば」であることがわかる。

神の御姿であられる御子の神が、人となってこの地上に来られた方が、まさにイエス様である。そして、イエス様のすべてのことばと行いは、完全に神のみこころをそのまま現してくださいました。だから、イエス様は「わたしを見た者は、父を見たのです。」と言われたのである。

このように三位一体の神になられただけでなく、神という名を持たれたのも、人間耕作を計画された後だったのである。それ以前、神だけがひとりでおられた時は、あえて他の存在と区別される必要がなかつた。

仮に、世の中に誰もいなくて、ひとりだけが生きているとしたら、あえてその人に名をつける必要がない。しかし、たくさん人がいるので、互いに区別するために名前が必要なのである。

神もまた三位一体の神となられ、天の軍勢や御使いや人など他の存在がいるので、ほかと区分される名が必要になったのである。これからは、「ことばと神のうち、どちらが先か？」と聞かれるなら、すぐ答えられるだろう。ことば、すなわち、神の心が先にあって、神の名とかたちは後でできたのである。

けれども、ことばと神は別々に存在するのではなく、結局一つであることも覚えなければならない。たとえば、人には体があるので影があり、影があるのを見ると体があることがわかる。結局、体と影は一つであり、別々に存在するのではなく、一緒に存在するものだが、あえて後先を問うなら、体が先である。このように、ことばが神より先だが、結局、ことばと神は一つであるのだ。

さて、ことばは神の心である。それでは、私たちに下さった聖書六十六巻のことばとは何だろうか？　これは神の心であり、神が初めに持っておられたことばの一部分である。また、神の無限の心のうち、人間耕作を受ける私たちが知らなければならない、最小限の内容を記したものである。

だから、私たちが聖書のことばを糧とすれば、このことばが私たちの中にとどまる。これはすなわち、神の心が私たちのうちにとどまるということである。このように、私たちの心に神の心が臨んだほど、御靈に属する心になるのである。それで、神の力あることばを信じて、そのまま行う人には、ことばがそのまま目に見えるように現れて、昨日も今日も変わらずに驚くべきみわざが伴い、神の生きておられることが証しされるのである。

2. 人と心

それでは、人はどうだろうか？　人は心が先だろうか？　でなければ形が先だろうか？　ことばであられる神は、土地とちりでアダムを造って、その中にいのちの息を吹き込み、「生きもの」（創世記2:7）になるようにされた。このようにアダムの靈が誕生して、その中にいろいろな靈の知識が満たされた。これがまさにアダムの心である。

だから、創造主の神はことばである心が先で、形が後にあるが、被造物である人は、人の形が先であり、心が後になるのだ。

それでは、これから人の心について、もう少し詳しく調べていこう。

辞書を見ると、心とは「人間の理性・知識・感情・意志などの働きのもとになるもの。また、働きそのものをひっくるめていう。精神。心情」と説明している。しかし、神が言われる「心」とは、「靈そのものとその中に入っている知識」を意味する。

最初、アダムの心は完全に空の器のようで、白紙のようだった。まるで器の中に何かを入れるように、アダムの靈に愛、柔軟、平和、真実、謙遜、このような真理の知識を神が植えつけてくださったので、アダムはその心の中に靈の知識を入れていった。

それで、アダムの心とは「いのちの種がある靈そのものと、その中に入っているいのちの知識」である。これは、アダムの「靈」とも同じ意味だから、ただ「靈」と言えばよいだろう。つまり、初めは「心」という言葉を使う必要がなかったのである。

ところが、アダムが罪を犯して、アダムの靈が死んだ後は、「心」と「靈」がもうそれ以上同じ意味になれなくなった。アダムの靈が死ぬと、アダムの心からはいのちの知識が一つ一つ抜けていくようになった。その代わり、たましいを通して敵である悪魔が植えつける真理に逆らう知識が入ってきて、心に詰められるようになった。愛が抜けていき、憎しみ、そねみ、嫉妬が入ってきたし、平和が抜けていき、争いが入ってきた。謙遜が変わって高ぶりになって、相手の益を求める心が変わって、自分の益を求めて欲深い心になった。

このように、アダムが墮落した後に、人の心は「もともとあった真理の代わりに、真理に逆らうものがいのちの種を取り巻いているもの」になった。心に真理だけがある時は「心」という言葉が必要ではなく、ただ「靈」と言えばよかつたが、その中に真理に逆らうものが入ってきて、これ以上「靈」とは言えなくなったので、「心」と呼ぶようになったのである。

心の中には、神様が下さった「いのちの種」があって、敵である悪魔が植えつけた「真理に逆らう知識」があり、「真理の知識」も少しではあるが残っている。アダムが罪を犯すやいなや、真理の知識が一度に全部抜け出たのでなく、歳月が流れながら、真理に逆らう知識が入ってくるほど、徐々に真理が抜けていったのである。

理解しやすく、真理に逆らう心を黒い心、真理の心を白い心としよう。もともとはとてもきよい白い心だったが、だんだん黒い心に染まっていくので、白い心と黒い心が混ざっているのである。

世の人々もまだ少し残っている真理の知識から、時には良い心と行いが出てくる時もある。しかし、こういう真理の知識はきわめて一部しか残っていないし、歳月が経てば経つほど、人の心はますます真理に逆らうものに染まっていくので、終わりの時になるにつれて、もっと悪くなるだけなのである。

ところが、まだ真理の知識が残っているからといって、人の靈が生きているのではない。たとえば、美しい花が咲いていて、その花を取ってきて花瓶にさしたとしよう。ある花はすぐ枯れるけれど、ある花は一週間ももち、もっと長くもつ花もある。すると、このように枯れないで咲いている花にいのちがあるだろうか？ 死んでいるだろうか？ 当分は花の香りもあって、生き生きと保たれる。しかし、いのちの元である根から切られたので、すでに死んだのである。

同じように、人の靈も、アダムが罪を犯したとき、すでにいのちの源である神との関係が途絶えてしまった。それ以上神からいのちの知識を供給されなくなり、以前に与えられたいのちの知識が若干残っていても、結局は、すべて抜けていく。敵である悪魔は真理に逆らうものを植え続けるので、完全に黒い心に染まってしまうのである。

3. 心の大きさ

世の人々もたびたび心の大きさを論じる。ある人については「あの人は大人だ。海のように広い心を持っている」とほめるかと思えば、ある人については「あの人は小人だ。度量が小さい」と言う。心の大きさがそれぞれ違うという事実を感じるだけでなく、その心

の大きさによって人を大人、小人と分けるのだ。

実際に、心は人によってみな大きさが違う。それでは、人の心の大きさを説明する前に、私たちの父なる神の心はどうなのか、調べてみよう。

靈である神の心は、その大きさが無限である。すでに説明したように、神の心は初めに光と声として全宇宙に広がっていて、また、その心にすべての宇宙がいだかれていた。その宇宙の中に、神が靈の世界も造られて、肉の世界も造られたし、地球と天地万物を創造して治めておられる。知識も、知恵も、力も、愛も、これらのすべてが神の心に含まれている。宇宙空間に終わりがないように、そのすべてをいだいておられる神の心も、限りがない。

それでは、人の心は、その大きさがどうだろうか？

初めに、アダムの心は神の靈に似せて造られた靈だった。だから、この時はアダムの心も、靈であるから、その大きさが無限に大きくなれた。もちろん、被造物であるアダムの靈が創造主の神の心と全く同じであるわけにはいかないが、神様が彼に靈の知識を入れてくださるほど、限りなく広くなれたのである。

人の靈が死んだ後は、たましいに支配されはじめて、心の大きさに制限ができた。靈で何かを悟ったり感じたりするのではなく、たましいの働きによって心が動くようになったからである。人が生きていきながら、たましいの働きによってどんな知識をどれほど入れたのか、また、その知識をどのように活用するのかによって、その心の大きさが限られるようになった。自分の思いと知識、枠などでのちの種をがんじがらめにするので、限られたたましいの働きの中で生きていくのである。

ところが、このようにたましいの限界を持った人々の中でも、ある人は目の前のことだけを考えるよりは、比較的遠い将来まで見ることができて、小さい利益にこだわるよりは、より大きいことを考える。また、すぐ感情が揺れ動くよりは、忍耐して憐れみを施す人もいる。このような人は、世の人々の中でも比較的心が大きいと認められ、多くの人々がその中に宿るようになる。

しかし、靈が死んだ人は、比較的に心が大きいといつても、たましいの限界を越えることができない。靈が生き返って心が大きい人は、その心に愛と徳があるだけでなく、その愛が靈的な愛であり、知恵と悟り、忍耐と自制なども心に臨んでいる。私たちがイエス・キリストを受け入れて聖靈を受ければ、御靈によって靈を生んでいくほど、肉の限界をはるかに超える大きい心が持てる。心にある真理に逆らう知識を捨てて、真理の知識を満たすほど、すなわち、靈の知識を満たして御靈の人に変えられるほど、その心が無限に広くなれるのである。

一番最初に造られた時のアダムの心はどうだっただろうか？ 神が任せられた天下万物を支配して従えるだけでなく、すべての家畜と空の鳥と、野の獸に名を付ける知恵と知識があった。すなわち、神が任せられた万物をいだくほど大きい心だったのである。

永い歳月、エデンの園に住みながら生んだ数多くの子孫も、アダムの心の中にいだかれていたし、靈の存在であるケルビムを従えていたし、彼がエデンを守っていた時は、敵である惡魔・サタンが侮れないほどの権威も持っていた。

御靈の人になっていくほど、このような御靈に属する心を取り戻していく、その心が大きくなっていくのである。靈である父なる神の知恵と愛、また、力と権威などを全部所有するようになるのだ。単に目に見える肉の世界だけでなく、靈の世界までもその心にいだけるので、肉の人にはわからないことがわかり、肉の人にはできないことができるのだ。だから、肉の人が御靈の人、心が大きい人を見ると、まるで神のように思うのである。

1) 肉の人は、御靈の人が理解できなくてさばく

父なる神の心と靈の世界の大きさは限りなく、御靈の人だけにその世界のことがわかる。また、御靈の人の心は御靈の人だけがわかる。肉の人は、父なる神の心がわからないだけでなく、御靈の人の心もわからない。

それで、肉の人が自分の限られた心に合わせて、御靈の人を理解しようとするなら、よくさばくようになるのだ。今日、人々が聖書を読みながらも、聖書にある昔の信仰の人々についていろいろとさばく。御靈に感じて彼らの心を感じるのではなく、自分の思いに合わせて解釈するために、誤解したりさばいたりするのである。

たとえば、神が信仰の父アブラハムに、ひとり子イサクをいけにえとしてささげよと言われたとき、ある人々は「アブラハムはこのことばに従うことがとても難しかっただろう。イサクを全焼のいけにえとしてささげるために、山に登っていても、何度も戻って来たかっただろう」と思うのである。

しかし、アブラハムはすでに最初から、神が彼に何の約束もなしに、「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい」と言わされたときも、ためらわずに聞き従った信仰の人である。しかもイサクをささげた時は、それから数十年間の訓練を受けながら、死んだ者も生き返らせる全能の神のみわざを無数に体験した時だったのである。神の御力と善を全面的に信頼していたアブラハムは、イサクをささげよと言われた時も、一瞬の気の迷いもなくイサクをささげることができた。

しかし、肉の人々はアブラハムのような高い次元の信仰と従順について理解できないし、自分の基準に合わせて考へるので誤解するのだ。

また、〈第一列王19章〉を見ると、預言者エリヤが神の御前で嘆く場面がある。〈第一列王19:4〉に「自分は荒野へ一日の道のりを入って行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「【主】よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」」とある。

ある人は、あまりにもつらい苦しみにあうと、神を恨みながら「いっそ死にたい」と言う。このように、エリヤも神の御前にそのような恨みの祈りをしたと誤解する人がいる。

しかし、これはエリヤの心もその信仰も理解できないのであって、全然正しくない。エリヤはすべてのイスラエルの民の前で、自分の命をかけて神のみわざを現した。すなわち、八百五十もの異国の神の預言者たちと対決して、天から火が下るように祈って、三年半の日照りに雨を降らせるなど、大いなる神の力を現した。このように驚くべきみわざを現したのに、悪い王妃イゼベルはエリヤを殺そうとした。それで、エリヤはイゼベルを避けて、荒野に逃げなければならなかつたのである。

神をこの上なく愛して、イスラエルの民をとても愛するエリヤとしては、偶像を拝んで滅びに向かって行くイスラエルの民があまりにもかわいそうだったのだ。また、途方もない力を見せても、むしろもっと悪を行なう悪い人々を見ると、あまりにも心が悲しかったので、このように悲しんで祈ったのである。

これは、肉の人が個人的な苦しみに勝てなくて「いっそ死にたい」と恨む愚かな祈りとは、全く違う次元の祈りである。このように、御靈に属する心を持った人については、自分がそのような心になるほど、また、聖靈の声を聞くほど悟れるのだ。

それで、〈第一コリント2:15-16〉にも、「御靈を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。」とあるのだ。

2) 御靈の人は、肉の人でもさばいて罪に定めない

このように主の心、御靈に属する心を持てば、御靈の人についてだけでなく、肉の人についても、誤解したりさばいて罪に定めたりしない。たましいを働かしてさばくのではなく、御靈によってわきまえるのである。

しかし、真理に逆らう限られた肉の心を持っている人は、自分の思いの限界の中でさばいて、自分の狭い心以上のことを推し量るのが難しい。

たとえば、ある人が自分に会う時はいつも顔がこわばって、目を合わせないで急いで通り過ぎるなら、どう思うだろうか？ 肉の人は、自分の中に悪い感情と憎しみ、憤りなどの肉の性質があるので、相手をさばく。「私にわだかまりがあるようだ」と思って、自分も相手に良くない感情をいだく。

しかし、御靈に属する心を持った人は、絶対にそのようにさばかない。嫌いでそうするのではなく、むしろ好きだけれど、気兼ねするからかもしれないし、恥ずかしがり屋のできこちないからかもしれないし、そのほかにもいろいろな理由がありえる。そして、必要ならば聖靈が働いて、心で正確な事実を悟るようにされ、平和をつくるように働いてくださる。

また、このように御靈に属する心になった人には、数多くの人々が宿る。教会の中でも、主のしもべがどれほど御靈に属する心、大きい心を持ったかによって、その心に数多くの聖徒が宿る。心が小さいほど、働き人たちとぶつかって平和が破られて、聖徒たちをつらくさせるのである。しかし、御靈に導かれて大きい心を持つなら、愛と徳で自分にゆだねられたすべての魂をいだき、彼らが神の愛を感じるようにして、神の力をやって神のみわざを体験するように導く。自分の心を刺してぶつかってくる聖徒、肉に属する聖徒であっても、みな理解して耐え忍び、十分にいだける。だから、自然にリバイバルにリバイバルが加わるのである。

靈的にだけでなく、肉的にも同じである。事業の場、職場でも、御靈に導かれて心を広くするほど、もっと多くの人の心を得て、知恵も力もより大きくなる。しかも聖靈の声を聞いて導かれるので、何をしようが良い実を刈り取ることができるのである。

4. 心の要素

1) 真理の心/ 真理に逆らう心 / 本性

私たちが完全に御靈に属する心に変えられるためには、自分の心を構成している要素を知らなければならない。自分の心にどんな真理に逆らうものがあるのかを知ってこそ、その真理に逆らう知識を捨てて、真理の知識だけで満たしていかる。

私たちの心を分析してみると、まず善を求めたいという明らかな「真理の心」がある。そして、はっきりと悪い「真理に逆らう心」もある。人によってこの真理の心と真理に逆らう心の比重がそれぞれ違うが、とにかくこの二つの心がすべての人にある。

もともとアダムの心は、真理の知識だけが満たされている真理の心だったが、アダムが罪を犯して靈が死ぬと、初めにあった真理の知識はますますなくなつて、真理に逆らう知識が入つていった。

しかし、完全に真理に逆らう心になつたのではなく、真理の心も一部は残つてゐる。それでも人は善が良いものと思って、善を追い求めようとするのである。したがつて、人の心には真理の心と真理に逆らう心が共存していることがわかる。

ところで、このように真理の心と真理に逆らう心のほかに、もう一つの心がある。それは「本性」というものである。本性とは、簡単に言えば、各人が持つてゐる心の根本の性質である。心を地にたとえるなら、本性は土質とも言える。

それでは、この本性はどのように作られたのだろうか？

生きていたアダムの靈が死んで、肉に変わつてしまつた時から、アダムの心には、初めにアダムを造つた材料である土の性質が働き始めた。土は、その中にどんな成分を加えるのかによって土質が変わる特性がある。このように、心にもどんな成分が入つてくるのかによって、心の土質が変わっていく。

一番初めに、靈の知識だけで満たされていたアダムの心が、良い地のように肥えてやわらかい本性を持っていたとすれば、だんだんその心の地にひどく悪い成分が加えられていくうちに、変わつてしまつた本性を持つようになつた。人が生まれてから見て、聞いて、感じるうちに、心に悪が入つてくるほど、その本性が変わるのである。

たとえば、悪賢くて狡猾な性質、卑怯な性質、荒々しく暴虐な性質、自分の益を求める性質、偽りを言って言い訳する性質、高ぶつて無礼な性質などのような、さまざまに悪い性質が入つてきて、人の心の地をだんだん変えていくのである。

このように真理に逆らうものが入りながら作られた人の本性は、人の「氣」を通してその子どもと子孫に伝えられる。ここで「氣」とは「人の全身から出てくる体液の結晶体」のことである。

神は人の精子と卵子を通して、初めにアダムに下さつたのちの種が代々伝わるようにされた。また、この精子と卵子の中には、各人の氣を入れられた。この氣の中には、容貌はもちろん、体質や知能、性格、はなはだしきは癖まで入つてゐる。したがつて、氣を受け継いだ子どもたちは、自分の両親に似て生まれるのである。

この時、心の基になつてゐる性質、すなわち、親の本性も、氣に入れられて子孫に受け

継がれるのだ。だから、親の心が良い地の場合は、子どもも良い地の心を持って生まれやすく、親の心が道端のような土質を持っている場合は、子どもも概して頑なである。

ところが、本性は生まれつき完成されているのではない。生まれつきの心の地も大切だろうが、本人が生まれて育ちながら接する環境によって、そして、そのような環境で心にどんなことを受け入れたかによって変わる。

悪い環境で真理に逆らうものにたくさん接して、悪いものを見て、聞いて、感じて、心に受け入れると、それだけ本性が悪くなる。良い環境で育てば、その本性に植えられる惡が比較的少ない。

生まれつきの心の地も、人それぞれ違って、育ちながら見て、聞いて、学んで、感じることも違うので、本性というものは、百ならば百、人によって変わるしかない。このように、人の本性は先天的に受け継いだ土台の上に、後天的に入力される成分が加えられて、人それぞれ違うようになるのである。

2) 良心

世の人々は、何が善で何が悪かをわきまえるとき、良心というものを基準にする。悪を行ふと自分でも恥ずかしく思うので、「良心の呵責を感じる」と言ったり、悪い人を見ると、「あの人には良心もない」と言ったりする。

この「良心」というのも、本性から出てくる。各人が生まれてから作られた本性の中で、自分なりに「これが善だ、あれは悪だ」と基準を作ったものが、まさに良心である。

人が多くの惡に接して、悪いことを見聞きして心に受け入れるほど、だんだん良心が悪く染まって、悪いことを見ても悪いと思わなくなる。反対に、私たちが神を信じて真理を心に植えるほど、良心が善に変わる。

ところが問題は、この良心というものが絶対的な善の基準になれないということである。本性が人によって違うように、その本性でわきまえる善と惡の基準も、人によって違うからだ。

ある人は法に外れることをしても、「私は自分の良心に従って行った」と言ったりする。ある人は、凶惡な犯罪者がいると、義憤に耐えられず彼を自分で処罰しなければならないと思って殺したりする。それから、明らかに殺人という罪を犯したのに、「私の良心には正しいことをした。私は正しい」と主張するのだ。

また、こういう場合もある。「盗み」が善か惡かと聞くなら、ほとんどの人が悪いと答えるだろう。けれども「あることについて、盗みかそうでないか」と聞くなら、各人の良心がみな違うことがわかる。

ある人はいくらささいな物でも、自分のものでないのに取ると、良心の呵責を感じる。しかし、ほとんどの人は、とてもささいな物は持ち主に断らないで使ったり、少ない金額なら、借りたお金を返さなかったりしてもたいしたことと思わないのだ。それくらいは「盗みではない。悪いことではない」と思うのである。

時には、相手が「なぜ他人のものにむやみに手をつけるのか」と言ったり、「貸したもの

を返しなさい」と言ったりすると、かえって「そんなにささいなことできつく言うな」と、良く思わないこともある。

また、世代と地域によっても、良心の基準が大いに変わる。たとえば、誰でも「親を敬わなければならない」と思うだろうが、その敬う方法も人によって違う。世の人の良心はみなそれぞれなので、自分の良心が善と惡の基準になることはできない。それでも人は、自分の良心の基準が善であり、正しいと錯覚して生きている。

それでは、はたして私たちはどんな基準に合わせてこそ、本当に善と惡をわきまえることができるだろうか？ 真の善の絶対的な基準は、人によって違う良心にあるのではなく、ただ善そのものであり、真理そのものである神のみことばから見つけなければならない。私たちの良心も、神のみことばに照らして真理に変えていかなければならないのである。

〈ローマ7:21-23〉に「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」とある。

このみことばを見ると、今まで説明した心の構成要素が全部あることがわかる。まず、〈21節〉に「私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」とある。このみことばはすなわち、人の心には神のみことばどおり善をしたいと願う真理の属性があるかと思えば、神に逆らって罪と不正と不法をしたいと願う、真理に逆らう属性もあることを語っている。すなわち、心を、まず真理の心と真理に逆らう心の二つに分けている

続く〈22-23節〉を見ると、人の心を今度は三つに分けている。

まず「私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、」とあるが、ここで神の律法を喜んでいる「内なる人」とは、明らかな真理の心、すなわち、白い心である。

次に「私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」とある。ここで「私の心の律法」とは、自分が作り出した心、すなわち「本性」であり、そこから作り出した「良心」である。

そして、「からだの中にある罪の律法」とは、明らかに真理に逆らう心、すなわち、敵である悪魔が植えつけた黒い心である。結局、このみことばは、人が真理の心では神の律法を守りたいと思うけれど、真理に逆らう心が良心さえも抑えて勝ち、罪を犯させるという意味である。

そのように良心の声を無視して、罪を犯していくほど、心はますます黒い心に染まり、良心も鈍くなつて悪く変わるのである。人が生きていくほど、もっと多くの悪を行つて、それだけ本性も悪くなる。そして、このような先祖の気を受け継ぐので、時代が過ぎるほど、世はさらに悪くなるのである。

3) 本性の中の真理に逆らうものまで捨てるべき

私たちが御靈に属する心に変えられるためには、はっきりと真理に逆らう心を捨てるだけでなく、本性の中にある真理に逆らうものまで発見して捨てなければならない。

誰の目にも明らかな真理に逆らう心は、すみやかに取り出すことができる。憎しみ、憤り、そねみ、嫉妬、さばいて罪に定めること、姦淫、このように自分で見ても明らかに真理に逆らうことを行う時は「私は悪いんだな」とすぐ発見できる。発見できたら、心から捨てられる。

ところが、本性の中にある真理に逆らうものは、隠されていて簡単に発見することができない。自分なりの良心に外れないように行うので、自分が正しくて良いと思われる所以である。

細かい不純物が混ざっている水のコップをそのまま置くと、そのカスが底に沈んで、コップの上のほうはまるできれいな水のように見える。しかし、カスがよく見えないからといって、この水がきれいなのではない。

同じように、本性の中にある真理に逆らうものが現れないで隠されているからといって、きよい御靈に属する心だと言えないのだ。それでは、このような本性の中にある真理に逆らうものは、どのように発見できるだろうか？ コップをかき回すと、水の上にカスが上がってくるように、人が訓練を受けて困難を経験すると、本性の中にある真理に逆らうものを発見するようになる。

ある人は憤りをすべて引き抜いたと思ったのに、大変な訓練にあって苦しんでいたら、一瞬、憤りが出てきて、自分でも驚く場合がある。憎しみ、そねみ、嫉妬のようなものはすべて捨てたと思っていたのに、自分は訓練を受けているのに、他の人が愛されて、大いに祝福されるのを見て完全に喜べない、そねみの心を発見したりする。

この上なくへりくだって、役に立たないしもべの心になって、神にだけ栄光を帰す心だと思っていたのに、多くの働きをして聖徒に愛されて認められると、ある瞬間、高ぶりが現れたりする。

主を愛して 100 パーセント抛り頼んでいると思っていたのに、主のゆえにひどい苦しみを受けると、信頼と確信が揺れる心を発見したりする。それで、信仰が強くて良い人に見えて、時々神が訓練を受けることを許されるのは、まさにこのような本性の中にある真理に逆らうものが現れるようになるためである。

たとえば、ダビデは神の心にかなう者と認められるほど美しい心を持っていて、神と民をこの上なく愛していた。ところが、このようなダビデも、神が訓練を受けることを許されると、本性の悪が現れるのが見られる。

自分の臣下であるウリヤが戦場に出ているうちに、ウリヤの妻を見て手に入れた。これによってウリヤの妻がダビデの子をみごもった。ダビデはその事実を隠そうと努めたが、結局隠せなくなると、策略を用いて神の民ウリヤを異邦人の手で殺されるようにさせた。あれほど良い心のダビデが、窮地に追い込まれると、本性の中にある真理に逆らうものが現れて、殺人という悪を行ってしまったのである。

それからダビデは自分の罪を悟って、直ちに徹底的に悔い改めたし、その報いとして大変な訓練を受けるようになった時も、この上なくへりくだった姿で訓練を受ける。そして、これによって、以前よりさらに良い、全き心に変えられた。

ダビデが訓練を受けているとき、ダビデの息子アブシャロムが反乱を起こしたので、ダビデが急いで逃げた。この時、ある民がダビデをひどく呪った。王を呪う民は、当然死に当たる罪を犯したのであり、ダビデがたとえ追いかけられていたとしても、そのひとりくらいはいくらでも処罰できた。

それでも、〈第二サムエル16:11-12〉で、ダビデは「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうつておきなさい。彼にのろわせなさい。【主】が彼に命じられたのだから。たぶん、【主】は私の心をご覧になり、【主】は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言って、この上なく低くへりくだった姿で神だけを仰ぎ見ているのだ。

以前、ダビデが血氣盛んだった時は、ナバルという人がダビデの恵みを裏切ってさげすむようなことを言ったとき、ダビデは直ちに彼を罰しようとした。ところが、今はこのように神と人の前にとてもへりくだって、低くなった姿に変えられたのだ。〈詩篇119:71〉に「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」とあるように、靈的な祝福が臨んだのである。

ヨブもダビデも、このように訓練によって、本性の中にある真理に逆らうものまで引き抜いてからは、靈的に祝福されただけでなく、肉的にも以前と比べられないほど大いに祝福された。

ヨブは訓練を受ける前も、東の人々の中で一番の富豪であったが、訓練を受けた後には、以前より倍に祝福されて、息子七人、娘三人を持ち、また、ヨブの娘たちほど美しい女はこの国のどこにもいなかった、と書いてある。

また、ダビデは、訓練の後にその王位が固く立っただけでなく、イスラエルの歴史上、最も偉大な王として代々記念される栄光を受けた。

5. 御靈に属する靈・たましい・からだ

1) 守りなさい / してはならない / 捨てなさい / しなさい

聖書のみことばに「守りなさい」「してはならない」とあるとおり、肉の行いをしないで自分を真理で守るほど、御靈に属するからだに変えられるようになる。行いも美しくなって、からだも健康になる。また、「捨てなさい」とあるとおり、心の悪を捨てていけば、肉的なことも、肉の思いもすべて捨てられて、御靈に属するたましいに変えられるようになる。真理だけで思うので、聖靈の声をはつきり聞いて導かれることができる。

このように「守りなさい」「捨てなさい」と言われたみことばを完全に心に耕すと、その心には真理に逆らうものがないので「御靈の人」と認められる。そして、「しなさい」というみことばに完全に従うと、最初の人アダムの心がそうだったように、いのちの種と真理

の知識で満たされた御靈に属する心が完全に取り戻せる。

しかし、耕作を受けた御靈の人の心は、最初の人アダムの心と同じではない。アダムは肉の世界を経験しなかったので、完全だったとは言えないのだ。肉の世界を経験しなかったので、肉の世界にあるすべての悲しみと苦しみも知らなかった。だから、神が彼を愛してくださっても、それが良いことがわからなくて、感謝することもできなかつたのである。

しかもアダムは自由意志によって肉の性質を受け入れて、墮落するかもしれない可能性を持っていた。だから、アダムの靈は永遠に生きる完全な靈でなく、「死ぬこともある靈」だった。

しかし、肉の世界を経験して、真理を追い求めて御靈の人に変えられた神の子どもたちは、肉と靈の相対性をよく知っている。肉の世で罪と惡と苦しみ、悲しみを経験したので、肉がどれほど苦しみをもたらすのか、どれほど醜くて価値のないものなのかをよく知っている。肉と反対の靈がどれほど良いのか、どれほど美しくて幸せで良いものなのかもよく知っている。

だから、自由意志があっても再び肉を受け入れないし、靈のほうを選んで天国の幸せを味わって生きていくのである。また、そのような幸せを下さった神のみこころと御旨がわかるので、心より愛して感謝する。

人が頭では聞いて知っていても、心にある肉の性質が捨てられなかつた時は、その愛と感謝が真実なものになれない。いくら「愛している」「感謝します」と告白しても、自分の益に合わない時は変わってしまうのである。一方、肉の性質を全部捨てて、御靈の人に変えられた人は、すべての心と思いつ力と最善を尽くして神を愛して、その愛と感謝が変わらない。

まことの子どもを得て愛を分かち合おうと、善惡の知識の木を置いて、数多くの痛みに耐えながら人間を耕作された神の摂理を深く悟って、心から感謝するようになる。自分のために十字架を負われた主に、また、真理で生んでくださつた聖靈に対しても、心から愛して感謝して、その愛と感謝は永遠に変わらないのである。

「守りなさい」「捨てなさい」というみことばを心に耕して御靈の人になれば、変わることもないだけでなく、悪いことは思いもしない。もちろん肉の世界を経験したので、惡がどんなものなのか記憶には残っているが、それが自分の感じと感情に出てこないのである。

「してはならない」「守りなさい」「捨てなさい」というみことばを完全に心に耕すと、それだけでも心に真理に逆らうものがなくなるから、御靈の人だと認められる。それに「しなさい」というみことばまで完全に行うなら、その人は、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するのである。すなわち「あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。」と書いてあるように、全く聖なるものとされるのだ。

もちろん、真理に逆らうものを捨てることと真理で満たす過程は、同時に進む。しかし、真理に逆らうものをすべて捨てた御靈の人の中でも、真理で満たされた程度はそれぞれ違う。

たとえば、「守りなさい」「捨てなさい」というみことばを全部心に耕すなら、相手が自分に惡を行っても、憎しみや悪い感情が生じない。しかし、「しなさい」というみことばがどれほど心に留められているかによって、御靈の人に変えられた程度は違う。

たとえば、「愛しなさい」というみことばがどれほど臨んだかによって、単に憎まない次元で終わるのか、でなければ、相手に愛で仕える積極的な行いで相手の心を感動させられるのか、あるいはそれ以上の深い愛までも現せるのか、各人の程度がみな違うのである。

だから、悪を行わないだけでなく、善をもって行って神に喜ばれ、また、その良い行いがいのち尽きるまで変わらないとき、全く聖なるものとされたと認められるのである。

2) 御霊の人が受ける祝福

私たちが肉の性質を捨てて、御霊の歩みに入れば入るほど、聖書に記された数多くの約束のみことばがそのまま現実として現れる。神の約束の中にはすべての祝福がみな含まれている。

まず、<第一ヨハネ 2:25>に「それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であつて、永遠のいのちです。」とあるように、地獄に行く魂が永遠のいのちを得て、天国に行く約束がある。

また、この地上の富と名誉も、権勢も、健康も神の約束にある。家族の問題も解決されて、知恵も知識も得ることができる。使命を果たす力も与えられて、教会のリバイバルの祝福も頂ける。どんな心の願いを持っていても、全能の神がすべてを答えてくださるという約束のみことばが聖書に入っているのである。

ところが、この世に神の子どもたちは多いが、いざその約束された祝福を受ける人はなど、それほど多くない理由は何だろうか？ 神の約束には必ず条件があるからである。

<第一ヨハネ 2:25>で神が下さった永遠のいのちの約束も、すぐ前の<24節>を見れば条件がある。「あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。」すなわち、神のみことばを心に耕すなら、それが神のうちにとどまることであり、神のうちにとどまっている人でこそ、約束された永遠のいのちが受けられるということである。

「主よ、信じます」と口だけで告白して、永遠のいのちを得るのではなく、必ず神のみことばを守り行う時でこそ、救われて永遠のいのちを得るのだ。祝福の約束、答えの約束も、みな同じである。人のほうから神のみことばどおり行ってこそ、その約束が実際に臨むことができる。

たとえば、ツアレファテのやもめはどのように祝福されただろうか？ 深刻な日照りで貧しいやもめに残ったのは、ほんの少しの油と一握りの粉だけだった。それでパンを焼いて食べたら、その後はひとりしかいない息子と飢えて死ぬしかないほど切羽詰っていた。

ところが、その時、預言者エリヤが現れて、その糧を自分に与えるように要求する。最後の糧で神の人を養うと、日照りが終る時まで糧がなくならないと、神が約束してくださったのである。肉の思いを働くなら、決して従えないことだったが、このやもめは神を信じたので、その言葉に聞き従った。

この従順のゆえに神は約束したとおりに働くので、深刻な日照りの中でも、やもめとその息子は糧がなくならずに生き残るようにされた。神を信じて、神のみことばに聞き従う

と、祝福の約束がそのとおりに臨んだのである。

ダニエルの三人の友だちも、神を信じて、そのみことばに聞き従ったので、大きい名誉と権威を得た。偶像を拝まなければ火の燃える炉に投げ込まれるぞと脅かされても、彼らは神の戒めを守るために、偶像を拝まなかつたのである。

すると神は、彼らを死ぬように放っておかれたのではなく、かえって大きい栄光と誉れを得るようにされた。火の燃える炉の中でも、火は全く彼らのからだにはききめがなかつたのである。これを見た王は、彼らを榮えさせて、全国に命令をして、神を尊ぶようにした。

〈第一サムエル2:30後半節〉に「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる。」とあるように、彼らが神を尊び、みことばに従つたので、神も彼らを尊い座に導いてくださつたのである。

〈申命記30:11〉に「まことに、私が、きょう、あなたに命じるこの命令は、あなたにとつてむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。」とある。神を愛するなら、また、祝福の約束を信じるなら、いくらでも従える命令である。

ところが、世には命をかけなければならないのでもないのに、自分の益に合わないから、あるいは自分の思いに合わないから、神のみことばに従わない場合がよくある。このような時は、神も約束された祝福を与えることがおできにならない。

しかし、一つ一つみことばどおり従っていくと、神の約束がそのまま臨む。〈第三ヨハネ1:2〉に「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」とあるように、まだ肉の性質をすべて捨てられなかつた人でも、たましいに幸いを得ているほど、すなわち、みことばに聞き従うほど、すべての点でも幸いを得、また、健康である祝福が臨む。

しかし、まだ肉の性質がある分、約束された祝福を受ける時も、相当な努力をしなければならない。何かで祝福されたいなら、断食して徹夜するなど、いろいろ神に喜ばれるほどのことをして、答えられる器を備えなければならない。また、何かを神にささげても、三十倍、六十倍、百倍に受けるのではなく、押しつけ、揺すりいれあふれるまでに祝福されるところで終わるのだ。

しかし、すべての面で御靈に導かれると、いつも祝福される器を備えているようなもので、何かが必要ならば直ちに答えられる。〈第一ヨハネ3:21-22〉に「愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。」とある。

このみことばのように、何でも大胆に求めるようになる。神も必要なものをあらかじめ備えて、御靈の人が求めると、直ちに答えてくださるのである。また、信仰で蒔いたものに報いてくださる時も、すべての面で御靈に導かれるなら、三十倍、あるいは六十倍に、さらに完全に導かれるなら、六十倍、百倍に祝福してくださる。

〈申命記28章〉に、入るときも、出て行くときにも祝福され、貸すであろうが、借りることはない、主がかしらとならせ、尾とはならせないなど、神が約束されたすべての祝福も、御靈の人、さらに全く聖なるものとされた人にはそのまま臨むのである。

6. 御靈に導かれるために

私たちが福音を聞いて主を受け入れると、聖靈を受けて死んだ靈が生き返る。すると、心から喜びと感謝があふれるようになる。また、この地上でもたましいに幸いを得ているほど、神の愛の中にとどまり、それで、求めることは何でも答えられて、はいるときも、出て行くときも祝福されるので、もっと感謝して幸せがあふれる。

ところが、いくらこの福音を聞いても信じられない人が世には本当に多い。「神様は生きておられます。天国と地獄はあります。イエス・キリストだけが私たちの救い主です。」このようにいくら教えても、「私にはとうてい信じられない」と言うのだ。これはまさに、彼らのたましいの働きが強いからである。

〈第一コリント 2:14〉に「生まれながらの人間は、神の御靈に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御靈のことは御靈によってわきまえるものだからです。」とあるように、御靈のことを聞いて悟って信じるのは、御靈によってこそできる。

だから、人が福音に含まれた靈的な内容を信じるためには、この福音が人の心の奥深くにある靈にまで届かなければならない。ところが、靈が死んだ人は、たましいの働きが先に起こって福音を拒む。

たとえば、「目に見えてもない神をどうやって信じるのか?」「おとめがどうやってみごもれて、死んだ人がどうしてよみがえるのか?」このようにたましいの働きが先に起きるので、伝道を受け入れないのである。

御靈のことを受け入れるためには、まずこのような真理に逆らうたましいの働きが打ち砕かれて、それから心の戸を開けなければならない。〈黙示録 3:20〉に「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」とある。

福音を聞くとき、主が、また、聖靈が心の戸をたたかれるので、私たちが心の戸を開けて、主を救い主として受け入れるなら、私たちの中に聖靈が来られる。すると、聖靈の働きで靈が生き返って、だんだん御靈によって靈を生んでいく。この時、心の戸を開けるためには、まずたましいの働きを打ち砕かなければならない。

たとえば、ゆで卵の黄身を食べるためには、殻と自身をまずむかなければならぬと同じである。別のたとえを挙げると、門の外にいる人が奥の間にいる家の主人に会うためには、まず門を開いて家の中に入って、奥の間の戸を開けて部屋の中に入らなければならない。

このように、まずはたましいの働きを打ち砕いて、次に心の戸を開けてはじめて、福音が人の靈にまで届くのである。

1) たとえを使われたイエス様

イエス様も、ご自身がこの地上に来て、人々にみことばを教えてくださるとき、たましいの働きを打ち砕くためにいろいろな方法を活用されたが、その中でもたとえをとてもよく使われた。

〈マルコ4:33〉に「イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。」とあり、〈マタイ13:34〉に「イエスは、これらのことのみを、たとえで群衆に話され、たとえを使わずに何もお話しにならなかつた。」とある。

たとえば、イエス様の時代、パリサイ人たちは、イエス様が安息日にも病人をいやされたからといって、「イエスは安息日を守らない罪人だ」と罪に定めた。しかし、神だけにできるみわざをイエス様が行われたら、イエス様は律法を破る罪人ではなく、神に認められる方だと思うべきであろう。

しかも、安息日であろうが、他の日であろうが、神の力で病人をいやして悪霊につかれた者をいやすからといって、これがどうして神に逆らって律法を破ることと言えるだろうか？

ところが、このように真理を説明しても、当時のパリサイ人たちは理解できなかつたのである。彼らのたましいの働き、すなわち、律法について自分たちで作った枠があまりにも強くて、自分たちだけが正しいと思うからだ。

だから、イエス様はさまざまなたとえを通して、彼らの誤った思いと枠を悟らせてくださる。〈マタイ12:11-12〉に「イエスは彼らに言われた。『あなたがたのうち、だれかが一匹の羊を持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それを引き上げてやらないでしょうか。人間は羊より、はるかに値うのあるものでしょう。それなら、安息日に良いことをすることは、正しいのです。』」とあり、また、〈ルカ13:15-16〉には「しかし、主は彼に答えて言われた。『偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。』」とある。〈ルカ13:17〉を見ると「こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさつたすべての輝かしいみわざを喜んだ。」とある。

このようなたとえで、たましいの働きによって目が遮られていた人であっても、自分の誤った思いと枠を発見する機会が得られたのだ。そのほかにも、イエス様は数多くのたとえを用いて、人々が自分の思いを打ち碎いて、御靈のことを慕っていけるように導いてくださった。

2) 伝道する時

したがって、伝道をする時も、福音を受け入れるように相手の心の戸を開くためには、まず相手のたましいの働きを打ち碎かなければならない。

それでは、どうすればよいだろうか？ 最も大切なことは、相手が自分から「私の知識と思いは正しくないんだ」と認めるようにすることである。その時まで自分が正しいと信じてきた知識と思いが真理でないことを悟ってこそ、自分の思いと合わない靈的なみことばを聞く時も、これを受け入れる姿勢になるからである。

たとえば「神は目に見えないので、信じられない」と思う人がいるなら、どうしたらよいだろうか？　このような人には、「目に見えないからといって、信じられないことは間違いだ」という事実を悟らせなければならない。

空気や風、あるいは赤外線や紫外線が私たちの目で見えないからといって、存在しないのではない。同じように、靈であられる神を、私たちの肉の目で見ることができないからといって、信じられないというのは間違いである。

神が生きておられるという事実を最も簡単に悟らせる証拠は、人としてはできない神の力あるわざである。〈ヨハネ 4:48〉に「そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。』」とあるように、神だけが行える不思議とするしを見て、見えない神を信じるようにすることができる。

今まで直接体験した証し、そして、周りから見聞きした数多くの証しを、写真やさまざまな証拠と一緒に見せると、それだけ相手のたましいの働きはもっと簡単に打ち碎かれる。しかもこのような神の力が全世界の医学博士たちによって科学的に立証されているという事実も知らせるなら、もっと確信を植えつけることができる。

また、『十字架のことば』で詳しく説明したように、もし神が生きておられないならば、宇宙万物が今のように秩序正しく動かないことを科学的に証明する、いろいろな資料もたくさんある。

また、ある人は「進化論は科学的なので信じられるけれど、創造論は非科学的なので信じられない」と言う。それならどうしたらよいだろうか？　一般に科学的だと思われる進化論が、実はかえって科学的でなく、創造論のほうがもっと科学的で論理的であることを知らせればよいのだ。

たとえば、神をよく知らない人を伝道するとき、よくたとえに挙げられる説明がある。それは、人種と文化を超えてすべての人が、目が二つ、鼻は一つ、口が一つあること、その構造と機能まで同じであることを説明して、進化が正しくないことを悟らせるのだ。これは人だけでなく、動物、鳥と魚、はなはだしきは昆虫まで同じである。

このようにみなが同じように進化することは、数学的な確率からしも不可能であることを科学者たちも認めている。必ずおひとりの創造主が同じ設計によって創造されてこそ、このようにできるのである。

このように進化が虚構であることを、万物に現れた証拠をもって説明すると、人々のたましいの働きが打ち碎かれる。以前自分で正しい信じていたことが間違った知識だったことを悟って、たましいの働きが打ち碎かれるので、心の戸が開かれて、創造主の神を認めるようになるのである。

その他にも多くの方法がある。歴史的な証拠を説明することもできるし、自然のたとえで説明することもできる。

ところが、すべての人に同じ方法を使って、たましいの働きを打ち碎くことができるのではない。ある人は論理的で知識的な説明をすると、直ちにたましいの働きが打ち碎かれて、心の戸を開ける。ある人には神の力を見せるのが最も良い方法であり、ある人には適切なたとえを挙げると、簡単にたましいの働きが打ち碎かれて、心の戸が開かれる。

それぞれの人にどんな方法が最も良いかは、祈って聖霊の声を聞いて、知恵を得なければなければならない。

3) 信仰が成長するために

これまで、人のたましいの働きが碎かれてこそ、御霊のことを悟って受け入れると説明した。これは単に福音を聞いて主を受け入れる時だけに適用されることではない。すでに救われた聖徒の信仰が成長して、すべての面でもっと御霊に導かれるためにも、同じように真理に逆らうたましいの働きを、毎日打ち砕いていかなければならぬ。

自分なりに熱心に信仰生活をしていても、もっと深い靈の世界にすみやかに入れなくて、停滞している人々がたくさんいる。その中にはこのようにたましいの働きによって靈の悟りが止まっている場合が多い。

ヨブの場合を考えてみれば、簡単に理解できる。ヨブは行いでも心でも、自分が知っている限りはこの上なく完全に行つたので、自分が悪いとは全然考えられなかつたのである。しかし、彼の深い本性の中には、明らかに悪があって、彼がもっと完全になるためには、これさえも発見して捨てなければならなかつた。

自分では完全だと信じているヨブだったので、彼が悪を発見して悟るためには、神が特別な方法で彼のたましいの働きを打ち砕かなければならなかつた。それで、神はヨブに対するサタンの訴えを受け入れて、厳しい訓練を受けるようにされたのだ。この訓練で家族も失って、財産も失って、全身が悪性の腫物で打たれると、ヨブは自分で思いもよらなかつた悪を行つて、あまりにも悪い言葉を吐き出した。

その瞬間、神が彼の悪を悟らせてくださると、ヨブははっきりと自分の姿が悟れた。そして、これを徹底的に悔い改めて捨てて、もっと深い靈の次元に入ることができたし、肉的にも前より倍の祝福を受けた。

今日の聖徒も、たましいの働きを打ち砕いてこそ、自分の悪と欠けているところが発見できる。そうしないと、信仰生活が長くても、変化が遅くて靈的に停滞しているはずである。

たとえば、ある人々は神がこれはせずにあれをしなさいと言われても、自分の思いであれこれの言い訳をしながら聞き従わない。「私がこれをしなければ、ほかにする人がいません」「私があれをするよりはこれをしたほうが、神の国にとってもっと益になる」と言うなど、自分なりの理由があるのである。

「不従順は高ぶりであり、惡から出る」といつもみことばを聞いて、知識では知っているけれど、「私は正当な理由があるから例外だ」と思つたり、「私は主のために良い心でそうした」と言つたりするだけで、自分の姿を認めないのである。

しかし、まず低くなつた心で自分の誤った姿を認める時、それで、悔い改めて立ち返る時でこそ、自分の心についてもつとはっきりと悟れる。このようにたましいの働きを打ち砕く時でこそ、神もその人をもっと完全にして、もっと深い靈の世界に導くことがおできになる。

また、ある人は惡を行つても、「私はそうするしかなかつた」と言つたり、「あの人気が私

に悪を行ったので、私もそうするしかなかった」と言ったりする。

しかし、環境のせい、他人のせいにするのではなく、まず自分の悪を徹底的に認めなければならない。〈第一ヨハネ 1:9〉に「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」とある。ここで「自分の罪を言い表わす」ということは、それほど父なる神の御前に自分の過ちを徹底的に認めて、心から立ち返るという意味になる。

また、〈詩篇51:6〉には「ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。」とある。真実な心でみことばに自分を照らしてみると、そして、父なる神の御前に自分の誤った姿を認めるとき、まことに悔い改めることができて、たましいの働きが打ち砕かれる。そうする時でこそ、自分の真の姿が発見できて、上から恵みと力が臨み、すべての面で御靈に導かれる知恵が臨むのである。

〈終わりに〉

『靈・たましい・からだ』を学ぶと、人の靈とたましいとからだについて、人の知識と知恵では悟れない、深い内容が悟れる。

目に見えるからだの分野については、人の知識でも比較的よく研究されているが、だからといって、すべてを明らかにすることもできないし、研究された内容が 100 パーセント正しいとも言えない。

しかも目に見えない靈とたましいについては、誰も明快に説明することはできない。しかし、人の靈とたましいとからだを直接創造された神は、いくらでも正確な知識を教えることがおきになる。まさにこの『靈・たましい・からだ』の学びが、神が教えてくださる内容である。

このように『靈・たましい・からだ』について学ぶ目的は、私たちの靈とたましいとからだを、御靈に属する靈・たましい・からだに変えることである。

これまで学んだように、初めに神が創造された最初の人アダムは、そのような靈・たましい・からだを持っていました。しかし、神のみことばに聞き従わずに罪を犯した後は、アダムとその子孫の靈・たましい・からだは、肉に属する靈・たましい・からだに変わってしまった。

生きていたアダムの靈が死んで、真理の知識だけを受け入れて真理だけでたましいの働きをしていたのに、真理に逆らうものを受け入れて活用するように変わった。永遠に死なないで老いなかつたアダムのからだも、老いて朽ちるからだに変わった。

このように肉に属する靈・たましい・からだを、再び御靈に属する靈・たましい・からだに取り戻すことが、まさに神が私たちをこの地上に耕作される目的である。私たちが御靈の人に完全に変えられたとき、神のかたちに似た神の子どもとして、天国で大いなる栄光が授けられるのである。そして、この地上でも神の子どもとされる特権を持って、祈つて求めることは何でも答えられて祝福されて、神の栄光を現しながら生きていく。

したがって、主を信じる子どもたちは、一日一日をただ無意味に生きていくのではなく、毎日、御靈に属する靈・たましい・からだに変えられていく尊い時間として活用しなければならないのである。

この『靈・たましい・からだ』は、マンミン国際神学校(MIS)の理事長であり、大韓民国ソウルにある万民中央教会の堂会長イ・ジェロク牧師の説教が編集され、教材として出版されたものです。

さらに詳しいことを知りたい方は、以下にご連絡ください。

Email: japanmis@gmail.com

Manmin International Seminary
c/o
Manmin Central Church
235-3 Guro-3dong Guro-gu Soul KOREA
152-848
Tel: 82-2-818-7335

<http://www.manminseminary.org/> (英語)

マンミン国際神学校・教材案内

既刊

十字架のことば
靈・たましい・からだ

以下、出版予定

信仰の量り (『信仰の量り』 ウリム・ブックス刊あり)
祈り
信仰生活の基礎 (礼拝論 : レビ記講解、十戒)
まことの祝福 (幸いな人、八つの幸い、善)
聖靈 (聖靈論、聖靈の声、御靈の九つの実)
愛 (神の愛、愛の章)
地獄 (『地獄』 ウリム・ブックス刊あり)
天国 (『天国 上・下』 ウリム・ブックス刊あり)
創世記講解
教会成長の秘訣 (七つの教会、カナン征服史)
ヨハネの默示録講解

*聖書の引用は日本聖書刊行会『新改訳聖書第3版』による。